

新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題

— 平成 20 年度アンケート調査報告 —

京都大学高等教育研究開発推進機構

全学共通教育システム委員会 教養教育専門委員会少人数教育部会

目 次

はじめに	1
第1章 調査の概要	3
第2章 受講学生調査の結果	7
1. 設問別の結果	7
2. 自由記述のまとめ	20
第3章 非受講学生調査の結果	27
1. 設問別の結果	27
2. 自由記述のまとめ	34
第4章 担当教員調査の結果	35
1. 設問別の結果	35
2. 自由記述のまとめ	53
第5章 まとめ	57
1. ポケット・ゼミの成果と可能性	57
2. 受講希望者を可能な限り救うために	57
3. ボランティア科目であることのメリットとデメリット	58
4. 大学教育再構成にむけての参照系として	59
ポケット・ゼミに関するアンケート 調査票	60
・ポケゼミを受講した学生対象	60
・ポケゼミを受講しなかった学生対象	64
・担当教員用	67
少人数教育部会名簿	71

はじめに

平成 10 年度に開設された「新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）」は、新入生を対象にして、大学とはどういうところか、学問をするとはどういうことか、最先端の分野でどんなことが行なわれているかなどについて、教員が直接に学生に語りかけ、あるいはさまざまな研究のフィールドに誘う、いわば「京都大学そのものへの入門」の授業として位置づけられてきました。当初より学生・教員の双方から高い評価を得てきましたが、同時に教員の自発的参加によるボランティア科目という位置づけからくる種々の困難が問題にされてきました。平成 15 年度には、これらの諸点について、ポケット・ゼミ担当教員、受講学生に加え、受講しなかった（できなかった）1 回生学生をも対象にして本格的なアンケート調査が行なわれました。そこでは、学生・教員双方のいづくポケット・ゼミへの期待が具体的に把握されるとともに、全学共通科目全体における位置づけ、経費支援、実験やフィールド授業における安全の確保と保険の整備、希望者全員が受講できる体制の確立など、改善すべき諸課題が抽出されました（「新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題—平成 15 年度アンケート調査報告—」平成 16 年 3 月発行。全学共通教育システム委員会教養教育専門委員会少人数教育部会（子安増生部会長）編集）。

以来 5 年間、まさにボランティア精神に支えられた教員の方々多数のご協力を得続けるとともに、先の報告書で指摘された諸課題に対しいくつかの改善策が講じられ、少しずつではありますがサポート体制も整えられてきました。その結果、平成 15 年度から 20 年度にかけて、開設科目数は 134 から 148 へ、受講許可者数は 1,136 人から 1,352 人へ、入学者に対する受講許可率は 40.3%から 45.7%へと、増加いたしました。「希望者全員の参加を保障する」という導入教育としては当然の目標からみれば道遠しの思いを禁じられませんが、幾多の制約の中でうまれた前進であり、学生・教員ともに高い前回はさらに上回る評価を得たことを考えれば、注目に値する成果をあげているといつてよいと思われます。

今回の調査で得られた知見を一言で述べれば、ボランティア科目という性格がもつ積極面と消極面の双方に対する認識が深まったことだと思ひます。ボランティアであるがゆえに生み出したと思われる種々の積極性に目を見張る思いがしましたし、同時に、ボランティアであるがゆえに被らざるを得ない制度的支えの不足と改善の難しさを再認識いたしました。平成 15 年度報告書は、ボランティア科目という位置づけ自体の限界を重視し「ボランティア科目かデューティ科目か」という問いをたてました。それと対比して言えば、ボランティア性のもつ積極面を高く評価しつつ、「ボランティア科目としての積極面を最大限発揮させるような制度整備を」というように問題を組み直したところに、本報告書の特色があるといえらと思ひます。さらに、ボランティア性が生み出したと考えられる多彩なアクティビティは、導入教育という枠内にとどまらない積極性・可能性をもつようにも思われ、少人数教育部会の所掌範囲を超えるものであることを自覚しつつ、「おわりに」ではその点にも言及させていただきました。これもいま一つの特色にならうかと思ひます。また前回に比べアンケート回収数は大幅に増えましたが、自由記述部分については重複をいとわずすべて掲載いたしました。ぜひお目通しいたゞき、様々な声に耳を傾けていただゞきたいと思ひます。

以上、ささやかな内容ですが、今後のポケット・ゼミの発展さらには大学教育全体の再創造に向けた議論に少しでも役立つことを心より願ひます。調査に真剣にご回答いただいた授業担当教員ならびに 1 回生のみなさんに対し、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。また、資料

ならびに報告書の作成には、教育推進部共通教育推進課企画・調整グループのみなさんに適切かつ絶大なるご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

京都大学高等教育研究開発推進機構

全学共通教育システム委員会教養教育専門委員会少人数教育部会

部会長 野田 公夫（農学研究科）

第1章 調査の概要

平成10年度に新生向け少人数セミナー（以下、「ポケット・ゼミ」とする。）が開講されてから、既に10年が経つ。本科目は、新生に学問へのモチベーションを与えることを目的として、1回生を対象に、本学専任教員が行う少人数教育授業である。ポケット・ゼミの意義、開講に至る経緯等については、「新生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題—平成15年度アンケート調査報告—」（平成16年3月発行。全学共通教育システム委員会教養教育専門委員会少人数教育部会（子安増生部会長）編集。以下、「前回調査」とする。）において既に詳細な記述がなされており、重複を避けるためここでは省略するが、学生、教員さらには各種外部評価においても、開講以来一定して高い評価を得ており、本学の特色ある教育の1つとして確固たる地位を築いてきているといえる。

しかし一方で、年月を経るにつれ（あるいは開設当初から）、様々な問題が浮上又は顕在化してきていることも事実である。

その最たるものは、担当教員の負担に関わる問題であろう。学生・教員双方の満足度が非常に高く、担当教員からも「やりがいがある」との意見を数多くいただいている反面、様々な業務に忙殺される教員にとって「負担が大きい」との声は開講当初から寄せられてきた。このことは「ボランティア科目」としての本科目の位置づけとも大いに関係があり、部局や教員の善意に支えられている現行の体制が曲がり角に来ている感は否めない。

また、開講科目数が数年にわたり頭打ち状態であることも、大きな課題となっている。表1-4（6頁）のとおり、ここ数年受講申込者ベースで3/4、入学者ベースでは半数以下という受講許可率を考えると、何とか科目数を増やし、出来るだけ多くの新生に履修させたいと願うものの、前述の教育負担の問題とも絡み、改善には至っていない。

高等教育研究開発推進機構教養教育専門委員会少人数教育部会（以下、「少人数教育部会」とする。）では、毎年度のカリキュラムや授業内容の検討と平行して、このような長期的課題にも取り組んできた。

平成21年度から一部後期開講を試行することとしたのも、そのような対応の一環である。これまでポケット・ゼミは、新生への導入教育をその目的としていることから、1回生前期に限定して開講してきた。本件については、長年にわたる議論を経て、開講当初の趣旨を維持する—前期開講科目数は減らさない—との条件付きで、学生、教員双方の要望に応えることとしたものである。

他方、担当教員の負担に係る問題については、有効な打開策を見出せていない。一例として、ポケット・ゼミの担当を教育負担としてカウントしてはどうかとの意見は以前からあるが、そのことにより、カリキュラムの根幹をなす科目の減に繋がる虞があることから、実現には至っていない。本件は、教育への貢献をどう評価するかという大学全体の課題とも密接に関連しており、他の関係委員会等での議論の動向を踏まえつつ、今後も継続して検討を続けていきたいと考えている。

以上のように、本学の教養教育の「目玉」ともいえる科目であるにもかかわらず、それを支える体制は決して盤石とはいえず、今後、ポケット・ゼミを改善していくためには、更なる検討が必要であることは、いうまでもない。

今回のアンケート調査は、開講後10年の節目に当たって、今後の議論に資するため実施したものである。これまでポケット・ゼミに関しては、「京都大学における早期少人数教育の現状と課題—教員・学生の意識調査—」（平成10年度）、平成11～12年度ポケット・ゼミ担当教員に対しカリキュラム専門委員会が実施した調査、「新生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題—第1回ゼミ受講生の意識追跡調査報告—」（平成15年3月発

行。カリキュラム専門委員会少人数教育・教養教育の在り方委員会（田中克委員長）編集）、及び「前回調査」等のアンケート調査が実施されてきた。

特に今回の調査においては、当該調査結果の分析のみならず、5年前の前回調査との比較・検討を行うべく、調査項目を前回と同様とするとともに、前回調査で得られた結果を併せて掲載している。

前回の調査と比較した最大の相違点は、回収率の差である。（表 1-1 参照）

受講学生における回答者数は、前回調査 235 人に対し今回 755 人と、約 3 倍となっており、学生数増（2,822 人→2,958 人）に比しての大幅増と 5 年の歳月がどのような変化をもたらすか、興味深い。

逆に、非受講学生の回収率が下がってしまったのは、非常に残念であった。今後「何故受講しなかったのか。」「どうすれば受講するか。」を検討する材料として、非受講学生の意見は大変貴重であると思われ、学生全員に調査用紙を配布したものの、当方の希望どおりには回答が得られなかった。将来、同様の調査を実施する際には、回収率を上げるためにはどうすべきか、検討すべき課題であると考えられる。

以下、今回調査の概要を記す。

1. 調査対象 受講生（1,279 名）、非受講生（1,679 名）、担当教員（144 名）
2. 調査時期 担当教員及び受講学生：平成 20 年 7 月（ただし、集中講義は終了後）
非受講生：平成 20 年 10 月
3. 調査方法
 - ① 受講生：ポケット・ゼミの授業担当者または授業責任者（複数教員担当科目の場合）に、受講人数分のアンケート用紙及び密封用封筒を送付し、授業の際に配付、回収（封筒に密封）の上、共通教育推進課に返送してもらった。
なお、授業時間中に回答時間が取れない場合も考えられるため、全学共通科目学生窓口に回収箱を設置し、後日学生に投函させる方法も選択できるようにした。
 - ② 非受講生：各学部において前期の成績表を配布する際（9 月下旬～10 月上旬）に、アンケート用紙を同時に配布し、各自で記入後全学共通科目学生窓口に設置した回収箱に提出してもらった。
※ 理学部は少人数クラス担任教員が成績表を交付するため、「英語 I」の授業で配布した。
 - ③ 担当教員：不開講科目を除く 144 科目の授業担当者または授業責任者（複数教員担当科目の場合）に①とあわせて学内便で送付し、共通教育推進課に返送してもらった。

表 1-1 新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）に関する調査回収率

	該当者数	提出者数	回収率
受講学生	1,279	755	59.0%
非受講学生	1,679	159	9.5%
担当教員	144	112	77.8%

今 回 調 査

対象学生数 (H15.5.1 現在在籍者数)	配付数	回収数		回収率
		受講学生	非受講学生	
2,822 人	2,492	235	205	17.7%

対象教官数	配付数	回収数	回収率
133 人	133	91	68.4%

平成 15 年度調査

表 1-2-1 平成 20 年度 1 回生 (学部・男女別)

学部	男子		女子		計	割合
	人数	%	人数	%		
総合人間学部	84	68.9%	38	31.1%	122	4.1%
文学部	121	53.8%	104	46.2%	225	7.6%
教育学部	36	59.0%	25	41.0%	61	2.1%
法学部	261	77.7%	75	22.3%	336	11.4%
経済学部	219	85.5%	37	14.5%	256	8.7%
理学部	280	89.5%	33	10.5%	313	10.6%
医学部	123	47.9%	134	52.1%	257	8.7%
薬学部	50	60.2%	33	39.8%	83	2.8%
工学部	903	91.6%	83	8.4%	986	33.3%
農学部	209	65.5%	110	34.5%	319	10.8%
総計	2,286	77.3%	672	22.7%	2,958	100.0%

表 1-2-2 平成 15 年度 1 回生 (学部・男女別)

学部	男子		女子		計	割合
	人数	%	人数	%		
総合人間学部	95	70.4%	40	29.6%	135	4.8%
文学部	121	54.0%	103	46.0%	224	7.9%
教育学部	28	45.2%	34	54.8%	62	2.2%
法学部	256	69.9%	110	30.1%	366	13.0%
経済学部	197	77.9%	56	22.1%	253	9.0%
理学部	274	91.0%	27	9.0%	301	10.7%
医学部	80	80.0%	20	20.0%	100	3.5%
薬学部	56	66.7%	28	33.3%	84	3.0%
工学部	915	93.2%	67	6.8%	982	34.8%
農学部	221	70.2%	94	29.8%	315	11.2%
総計	2,243	79.5%	579	20.5%	2,822	100%

表 1-3 ポケット・ゼミの開講状況

	開設科目数	受講科目数	受講者定員
10年度	96	89	783
11年度	121	119	1,099
12年度	118	118	1,069
13年度	134	133	1,194
14年度	136	134	1,239
15年度	134	133	1,237
16年度	138	133	1,326
17年度	146	144	1,392
18年度	149	145	1,457
19年度	147	146	1,384
20年度	148	144	1,452

表 1-4 ポケット・ゼミの受講許可状況

入学年度	入学者数	受講申込者数	受講許可者数	決定率	入学者に対する	
					受講申込率	受講許可率
10年度	2,948	1,135	657	57.9%	38.5%	22.3%
11年度	2,882	1,315	1,010	76.8%	45.6%	35.0%
12年度	2,837	1,615	1,134	70.2%	56.9%	40.0%
13年度	2,825	1,532	1,172	76.5%	54.2%	41.5%
14年度	2,781	1,639	1,170	71.4%	58.9%	42.1%
15年度	2,822	1,660	1,136	68.4%	58.8%	40.3%
16年度	2,936	1,563	1,106	70.8%	53.2%	37.7%
17年度	2,939	1,606	1,226	76.3%	54.6%	41.7%
18年度	2,949	1,721	1,281	74.4%	58.4%	43.4%
19年度	2,958	1,765	1,341	76.0%	59.7%	45.3%
20年度	2,959	1,765	1,352	76.6%	59.6%	45.7%

第2章 受講学生調査の結果

1. 設問別の結果

平成20年度ポケット・ゼミ受講学生の調査は、前回調査と同様、11の設問からなっている。回答者数は、前回調査235人に対し今回755人と、約3倍強の増となっている。以下、設問ごとに結果を見ていく。原則として設問ごとに集計結果をグラフで表示し、小数点以下1桁まで（2桁目を四捨五入）の百分率を添えた。百分率の数字はいずれも有効回答数中のものであり、無答などを除いている。

Q1 あなたの性別を教えてください。

図2-1に示されるように、男72.2%、女27.8%であった。1回生の性別人数は男2,286人（77.3%）、女672人（22.7%）であるから、回答者は女性の比率が少し高い。平成20年度のポケット・ゼミの履修者数は男942人（73.6%）、女337人（26.4%）であり、回答者の男女比と履修者数の男女比はほぼ同じであったと見てよい。

以上の結果は、前回調査とほぼ同様である。

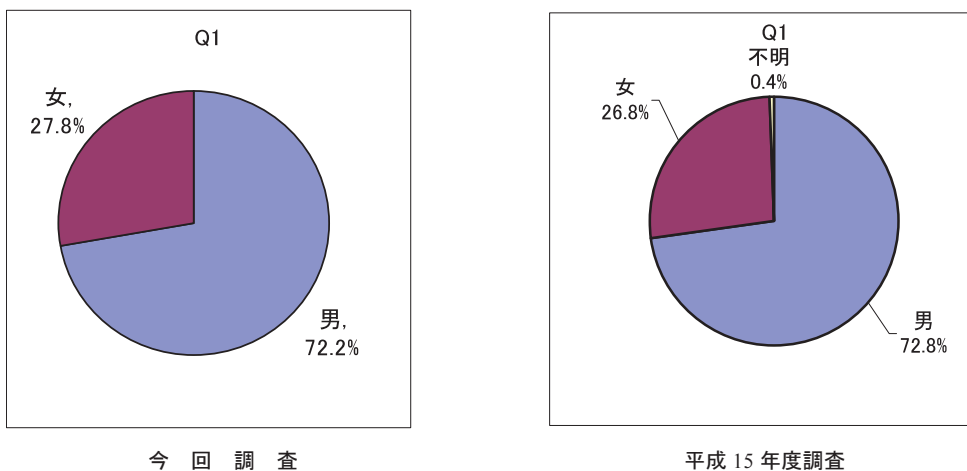


図2-1 回答者の性別分布

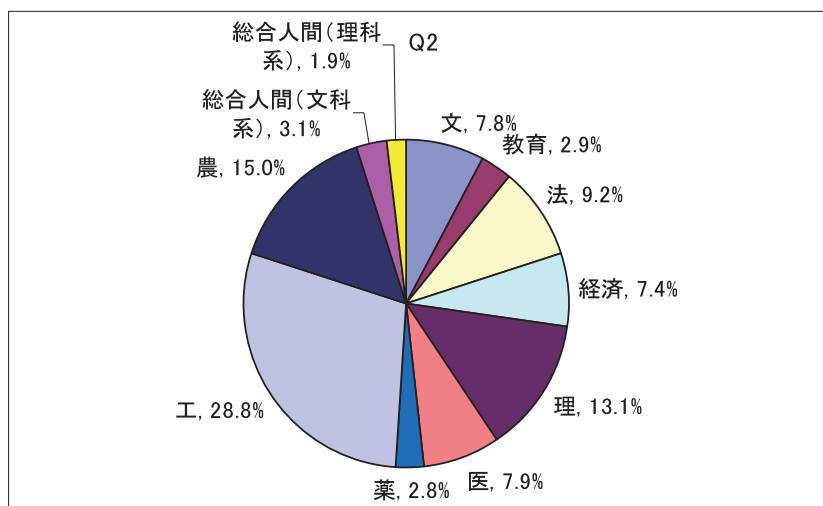
Q2 あなたの所属学部を教えてください。

総合人間学部は文科系と理科系に分かれるが、所属専攻がまだ決まっていないので、現在の時点での志望を答えるよう求めた。学部別分布は、図2-2に示される。

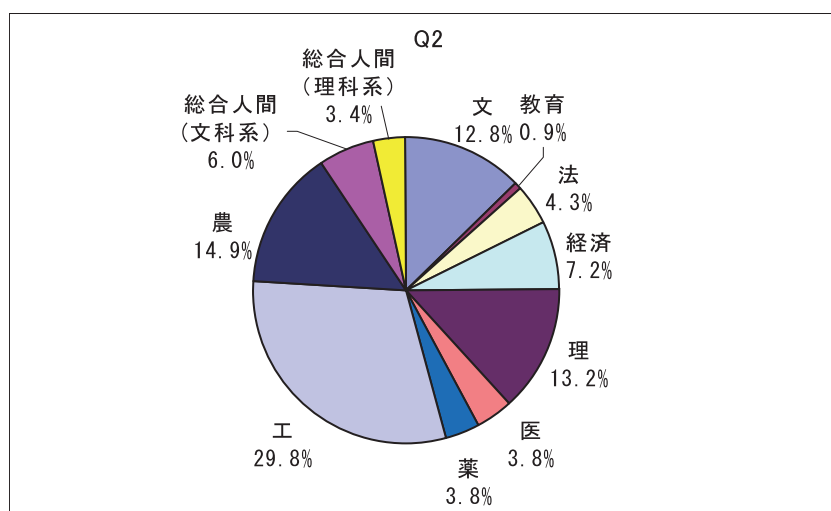
1回生全体の比率は、文7.6%、教育2.1%、法11.4%、経済8.7%、理10.6%、医8.7%、薬2.8%、工33.3%、農10.8%、総人4.1%である（表1-2）。

全体との比較では、理学部、農学部は学生数に比例しているが少し多く、工学部は少し少ない。

回答者数が大きく異なるため、一概に比較は出来ないが、前回調査と比較すると、構成比で文学部、総合人間学部の占める割合が下がり、教育学部、法学部、医学部の占める割合が上がっている。



今回調査



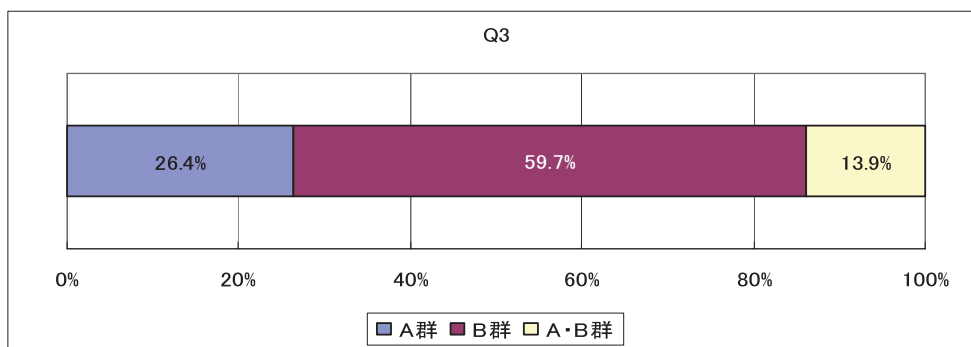
平成15年度調査

図2-2 回答者の学部別分布

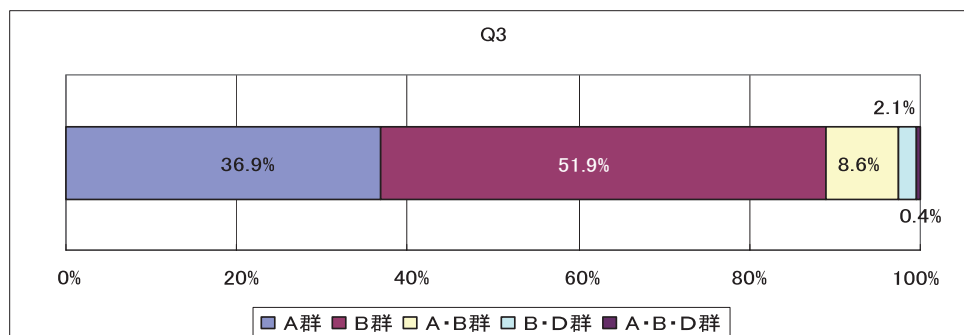
Q3 あなたが受講したポケット・ゼミが属している群を選んでください。

京都大学の全学共通科目は、A群（人文社会及び社会科学系科目）、B群（数学、物理学、化学、生物学、地球科学、情報科学などの自然科学系科目）、C群（外国語科目）、D群（保健体育科目）に分かれている。ポケット・ゼミは、A群、B群、A・B群、B・D群のいずれかに属している。結果は、図2-3に示される。

前回調査と比較すると、開講科目総数が増加していることを考慮しても、A群科目の減少が見て取れる。



今回調査

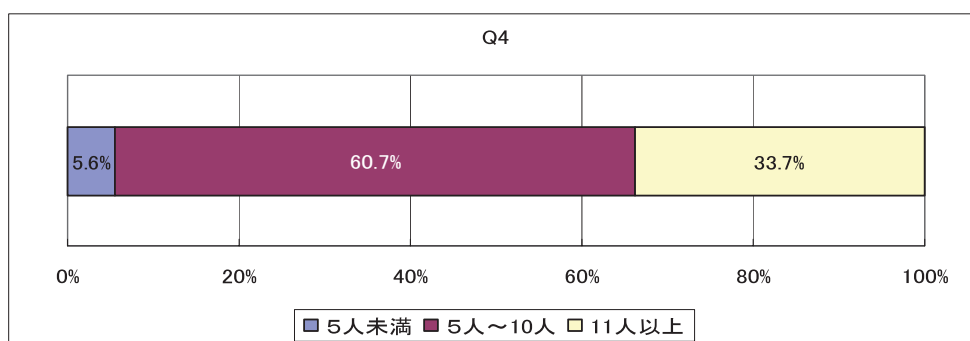


平成15年度調査

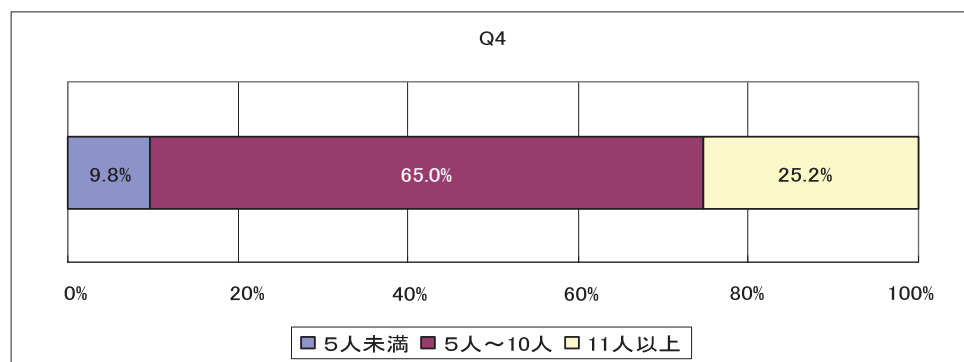
図2-3 ポケット・ゼミの所属群別分布

Q4 あなたが受講したポケット・ゼミの授業開始時の受講者は何人ぐらいでしたか。

結果は、図2-4に示される。受講者数「5人～10人」が60.7%と最も多い。また、「11人以上」が前回の25.2%と比較すると、やや増加している。



今回調査



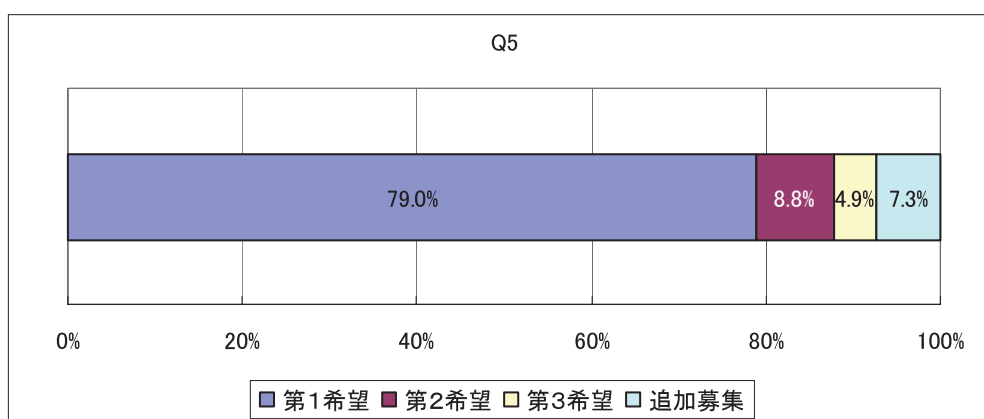
平成15年度調査

図2-4 ポケット・ゼミの授業開始時の受講者分布

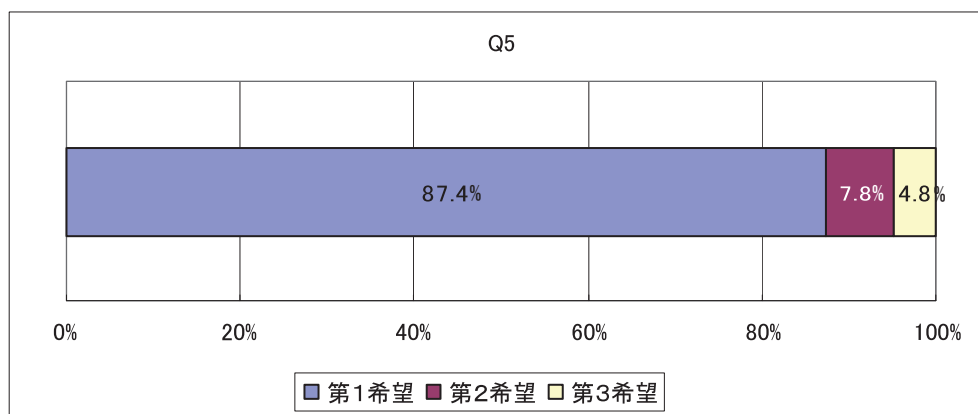
Q5 あなたが受講したポケット・ゼミの希望順位は何番目でしたか。

図 2-5 に示すように、第 1 希望が 79%、第 2 希望以下が 21%であった。自由記述欄などでの回答から、第 3 希望にも漏れた学生や、第 1 希望でなかったためにポケット・ゼミ受講をあきらめた学生も少なくないことがわかる（これらの実数は、アンケート調査結果には表れていないと思われる）。

前回調査の結果と比較すると、第 1 希望で受講できた学生は 87%から 79%に減少し、第 2 希望以下でしか受講できなかった学生は 13%から 21%に増加している。今回の方が第 1 希望で受講できた学生が減少しており、開講科目数の増（14 科目）に比して受講申込者数の増（105 人）が多かったことや、特定科目に希望者が集中する傾向が一部見られること等が原因ではないかと思われるが、今後検討が必要と考えられる。



今回調査

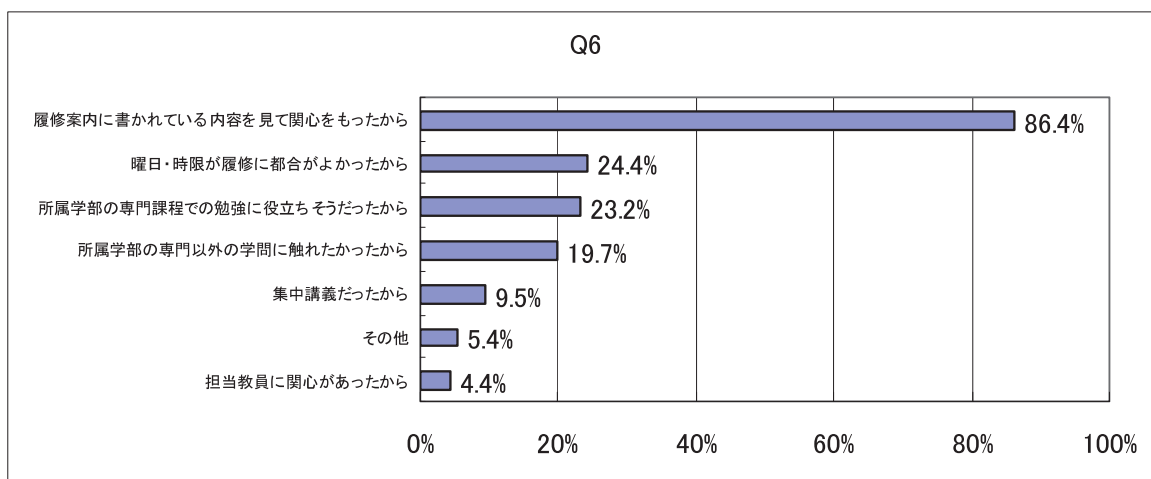


平成 15 年度調査

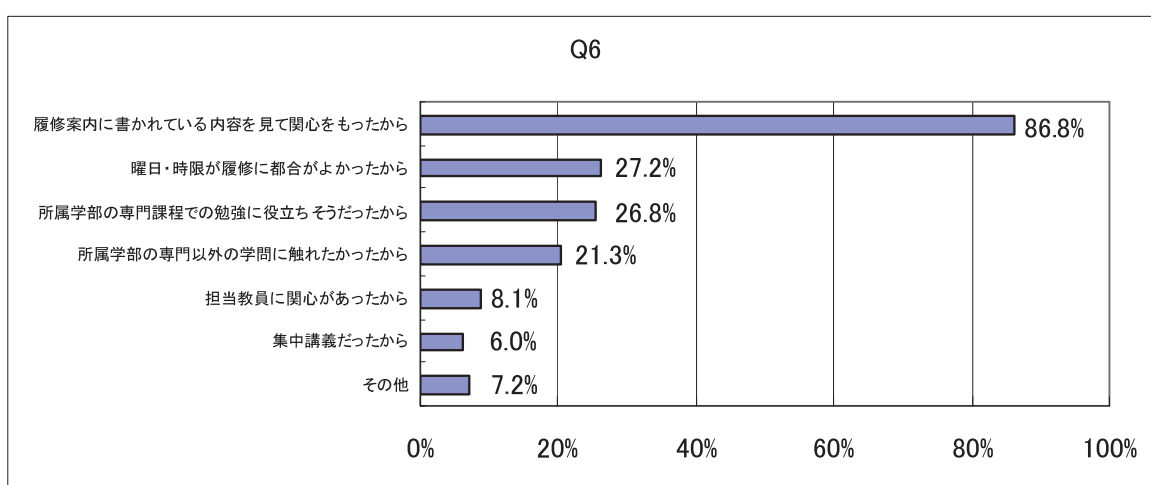
図 2-5 ポケット・ゼミの希望順位の分布

Q6 このポケット・ゼミを受講することにした理由を教えてください。（複数回答可）

結果は、図 2-6 に示される。前回調査と同様の傾向が見られ、9 割弱の学生が「履修案内に書かれている内容を見て関心を持ったから」を選んでいる。シラバスの果たす役割の重要性がうかがい知れる結果である。



今回調査



平成15年度調査

図2-6 このポケット・ゼミを受講した理由の分布（複数回答可）

Q7 ポケット・ゼミを受講しての感想をうかがいます。

(1) 全体として、ポケット・ゼミの授業内容に満足していますか。その理由も書いてください。

結果は、図2-7に示される。「満足」ないしは「どちらかといえば満足」を合わせると、94%と非常に高い支持を得ている。前回調査時は89%が「満足」ないしは「どちらかといえば満足」と答えたが、それをさらに上回る結果となった。

「満足」の理由としては、次のような内容の回答が多数寄せられた。

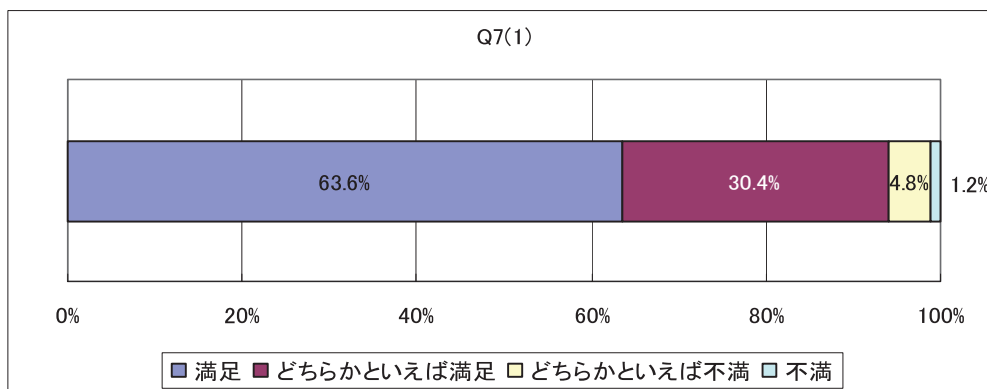
- ・貴重な知識や人との出会い
- ・生き生きとした実地経験・直接体験
- ・授業に主体的に参加できているという実感
- ・少人数で丁寧な授業方法・興味深い実習内容
- ・メンバーとの交流
- ・教員の人柄の魅力

また、「どちらかといえば満足」「不満」の理由には、次のような改善提案が挙げられた。

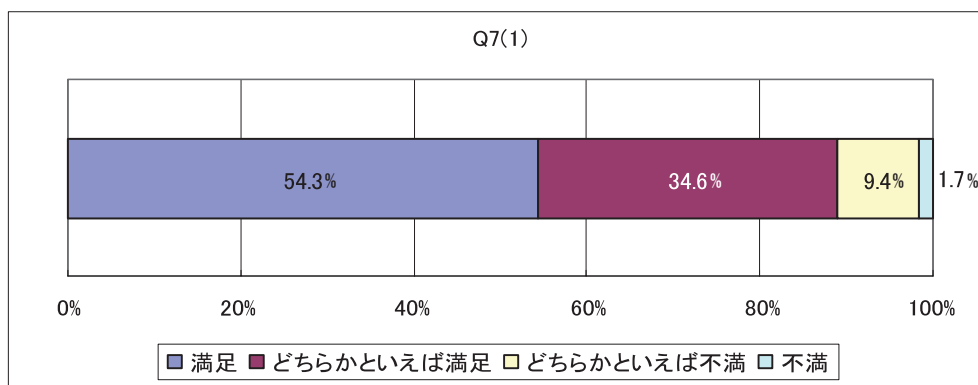
- ・先生が話してばかり。
- ・授業に工夫を
- ・ゼミらしくなかった。
- ・緊張して発言しにくかった。

- ・もう少し学生から話す機会を。
- ・内容が難しかった、など。

前回調査でも、不満足の原因として「履修案内と内容が異なる」「履修案内を見て想像したものと内容が異なった」「通常の講義形式であった」「受講生が多すぎる」等を挙げる者があり、内容や難易度に関する不満と平行して、ゼミナール形式授業への期待が実現されなかったことへの不満が見受けられる。今後、授業内容や履修案内についても、さらなる検討や改善が必要となるかもしれない。



今回調査

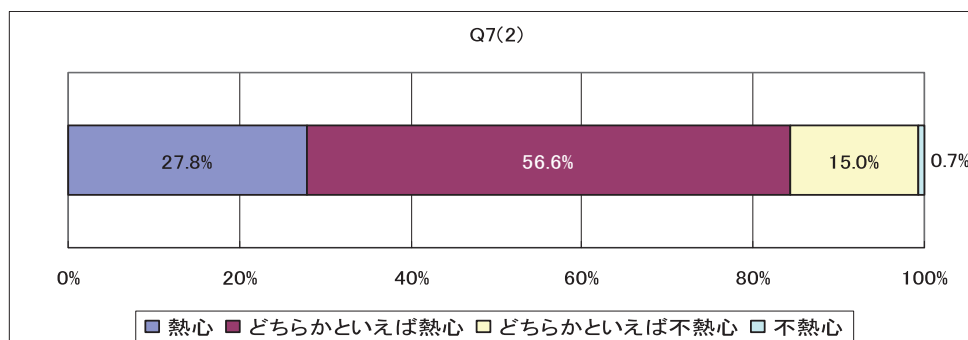


平成15年度調査

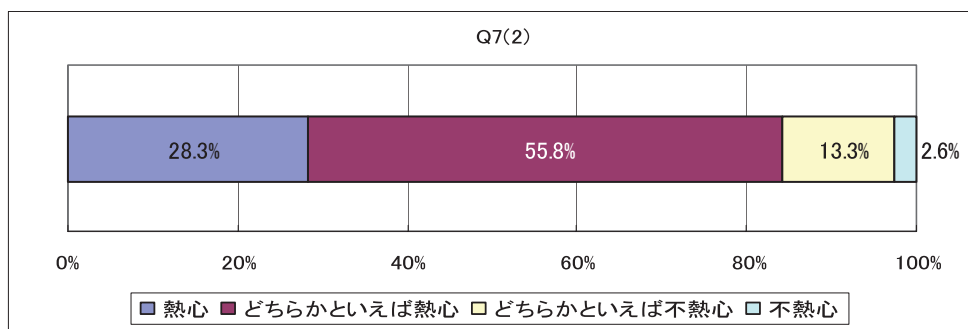
図2-7 ポケット・ゼミの満足度の分布

(2) 振り返ってみて、あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。

結果は、図2-8に示される。前回調査と同様の傾向が見られるが、約85%の回答者が「熱心」「どちらかといえば熱心」と答えていることから、ポケット・ゼミに対する熱意の高さが伺える。学ぶ事へのモチベーションを高める意味で、ポケット・ゼミは有効に作用していると言えるのではないだろうか。



今回調査

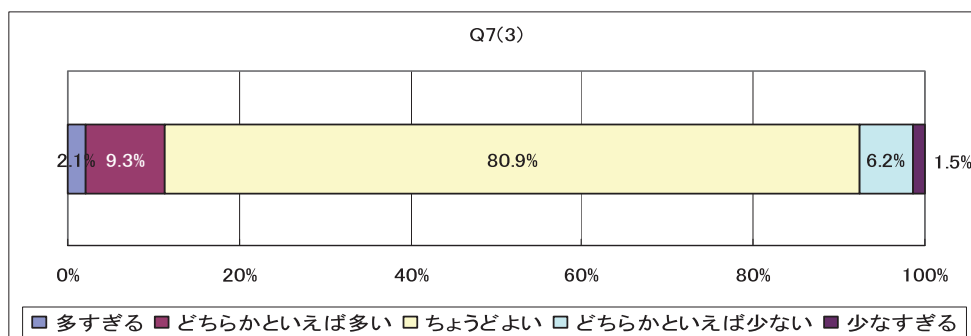


平成 15 年度調査

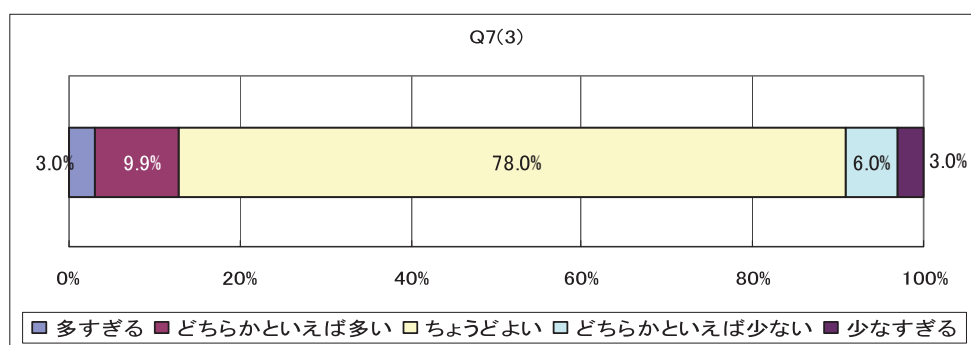
図 2-8 自身の受講姿勢についての認知度の分布

(3) あなたが受講したポケット・ゼミの学生数についてどう思いますか。

結果は、図 2-9 に示される。前回調査と同様の傾向が見られる。80.9%がちょうどよい人数であったと考えている。一方で、受講学生数が「多すぎる」「どちらかといえば多い」科目が 10%あり、改善を要する。



今 回 調 査

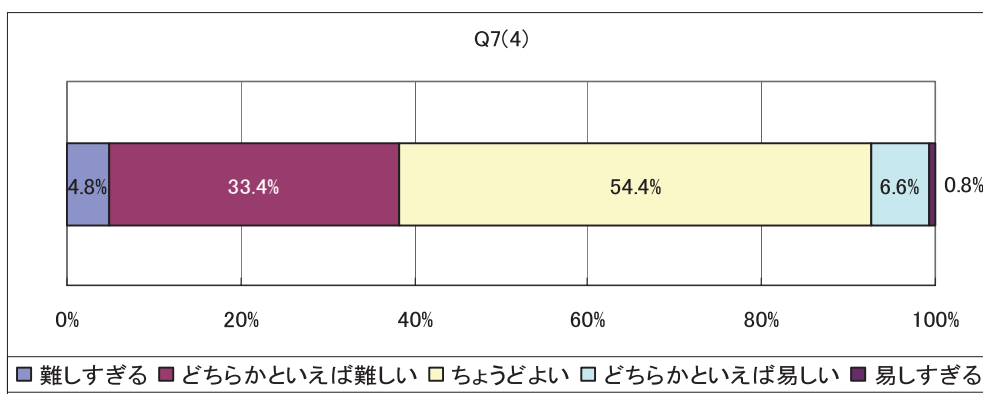


平成 15 年度調査

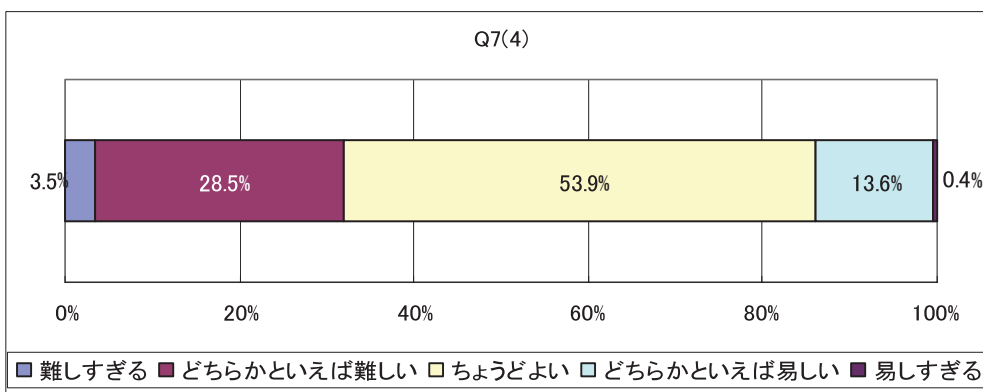
図 2-9 受講したポケット・ゼミの学生数についての認知の分布

(4) 授業内容の難易度はどうでしたか。

結果は、図 2-10 に示される。前回調査と同様の傾向が見られるが、若干「難しい」「どちらかといえば難しい」と回答する学生の比率が増加している傾向が見受けられる。



今回調査

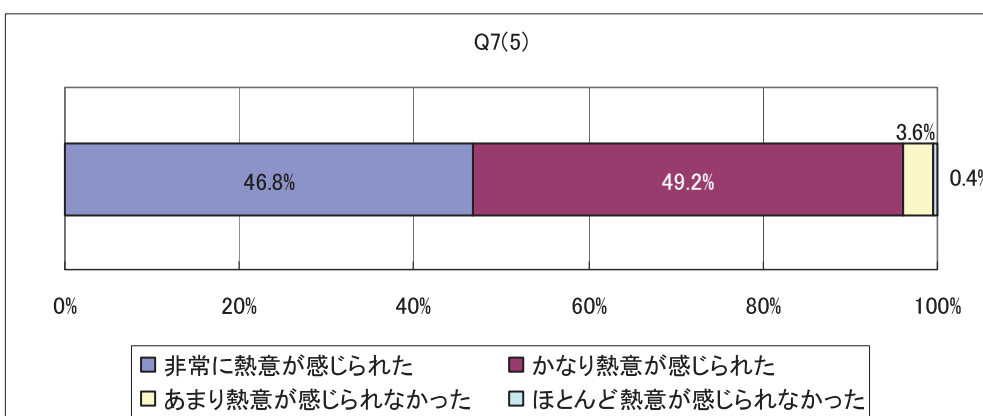


平成15年度調査

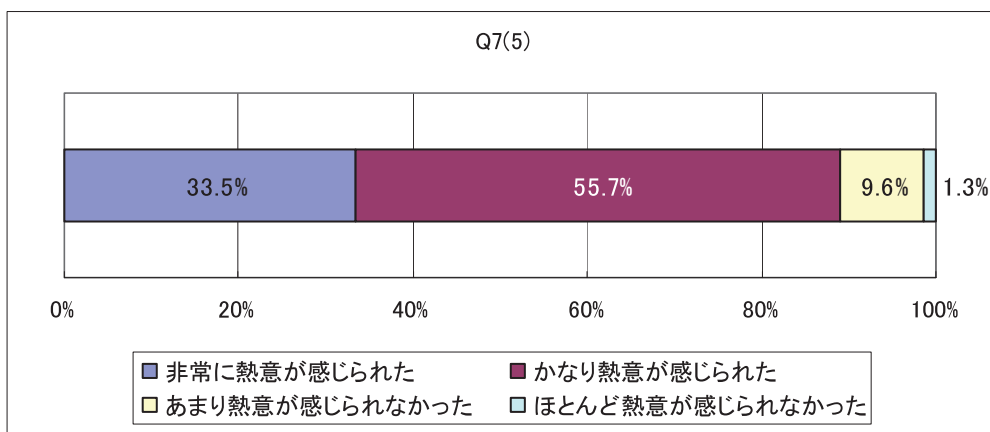
図 2-10 授業内容の難易度に関する回答の分布

(5) 担当教員の対応はどうでしたか。

結果は、図 2-11 に示される。「非常に熱意が感じられた」と「かなり熱意が感じられた」を合わせると、96%と非常に高い。前回調査の 89%をさらに上回っており、学生にとってポケット・ゼミは「先生が熱心に取り組む科目」として認知されている傾向がうかがえる。



今回調査



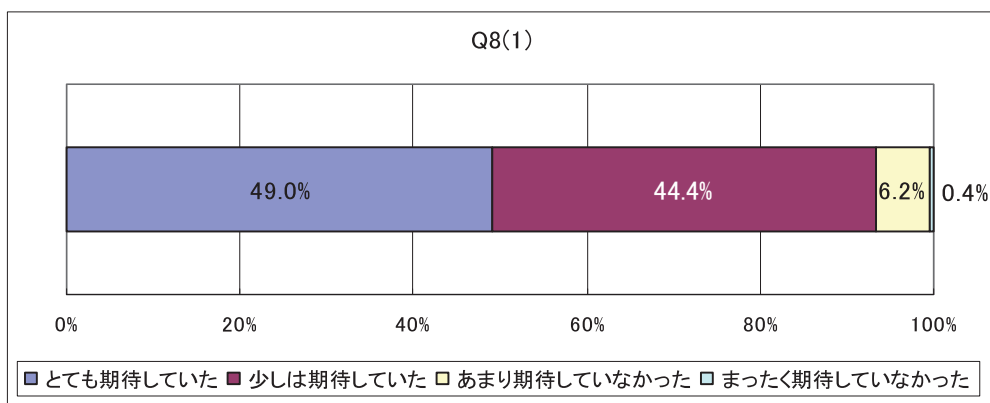
平成 15 年度調査

図 2-11 担当教員の対応に関する回答の分布

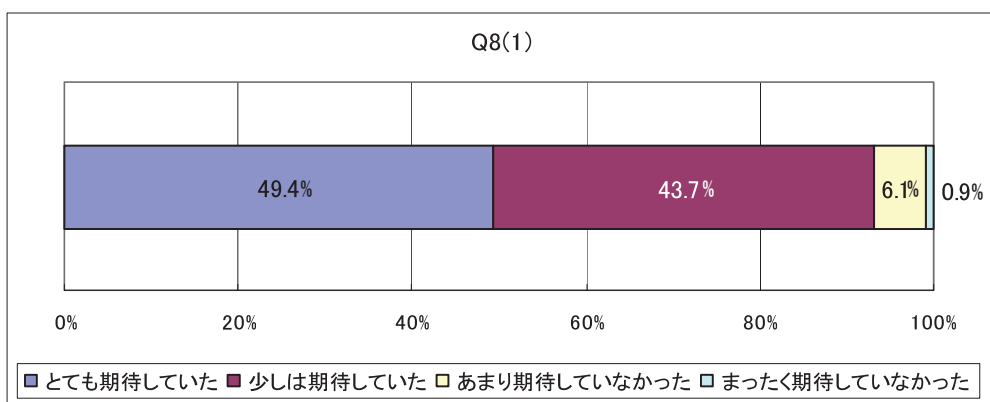
Q 8 少人数制の授業形式についてうかがいます。

(1) ポケット・ゼミを受講する前、少人数形式の授業によって、講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることをあなたは期待していましたか。

結果は、図 2-12 に示される。前回調査と同様、学生の期待度は非常に高い。



今 回 調 査

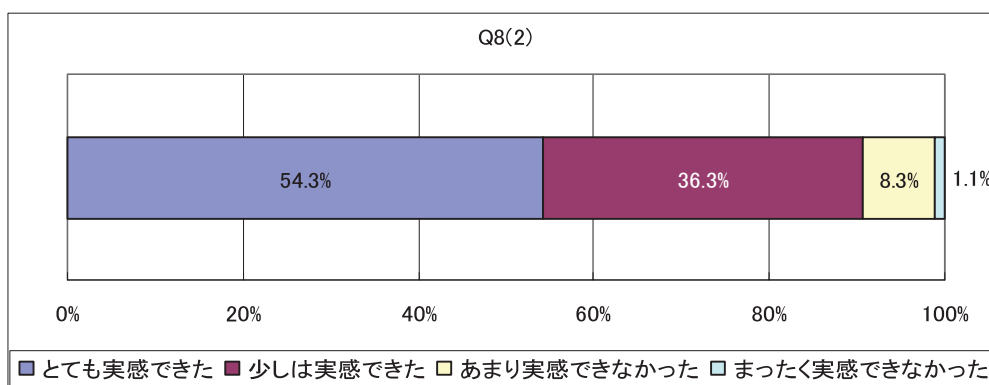


平成 15 年度調査

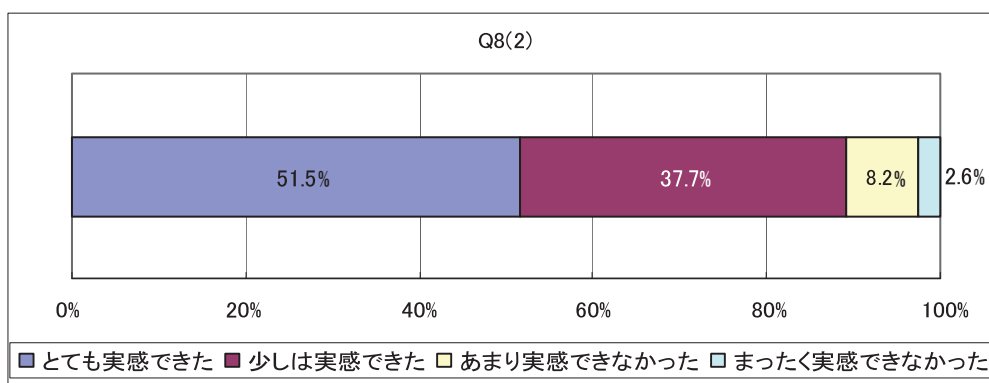
図 2-12 ポケット・ゼミを受講する前の期待度の分布

(2) では、実際にポケット・ゼミを受講してみて、少人数形式の授業でしか得られないものがあると実感できましたか。

結果は、図 2-13 に示される。ポケット・ゼミは、入学当初のモチベーションを維持向上させると同時に、少人数教育の意義や面白さを実感させる役割を担っていることがうかがえる結果となっている。



今回調査



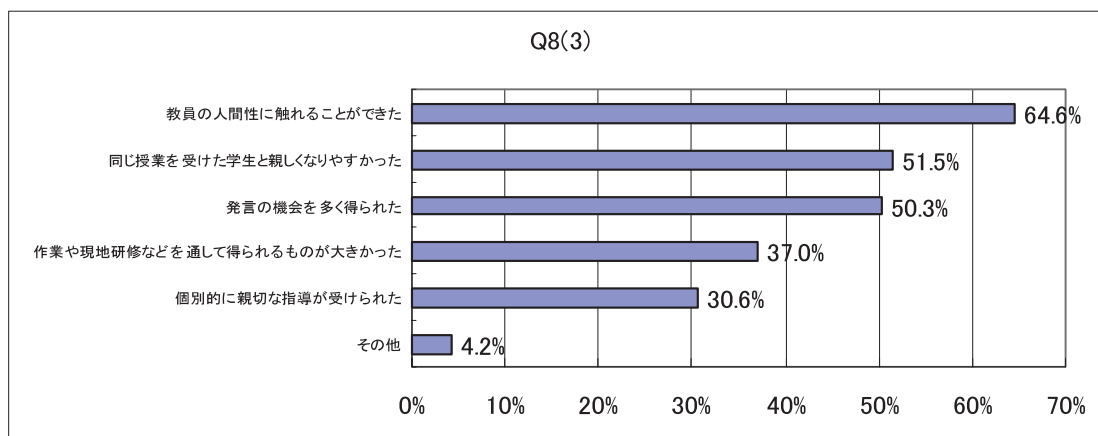
平成15年度調査

図 2-13 実際にポケット・ゼミを受講してみたの実感度の分布

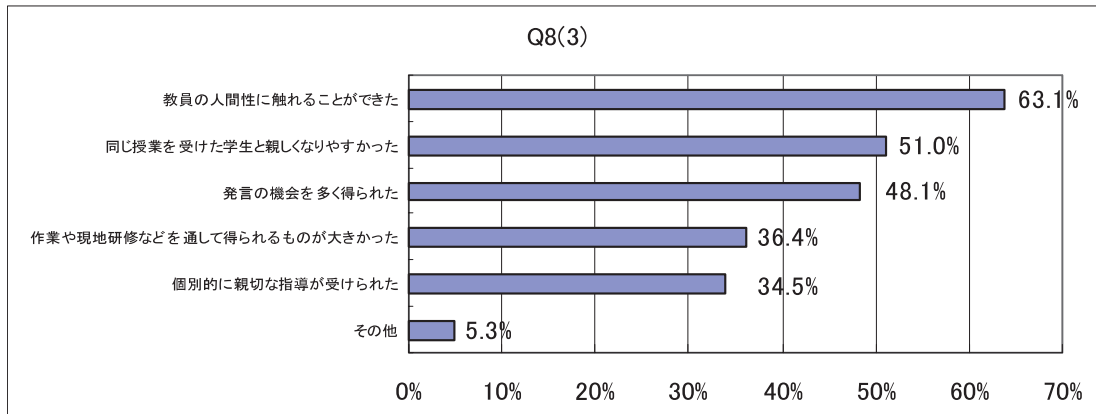
(3) 前問(2)で1または2を選んだ方にうかがいます。(3, 4を選んだ人は直接Q9へ)

少人数形式の授業のどのような点がよかったですか。(複数回答可)

結果は、図 2-14 に示される。前回調査とほぼ同様の傾向であるが、よかった点としては、教員や他の受講学生との交流、主体的な参加(発言)、直接体験など、満足理由の記述内容と対応している。



今回調査



平成 15 年度調査

図 2-14 少人数形式の授業のよかった点（複数回答可）

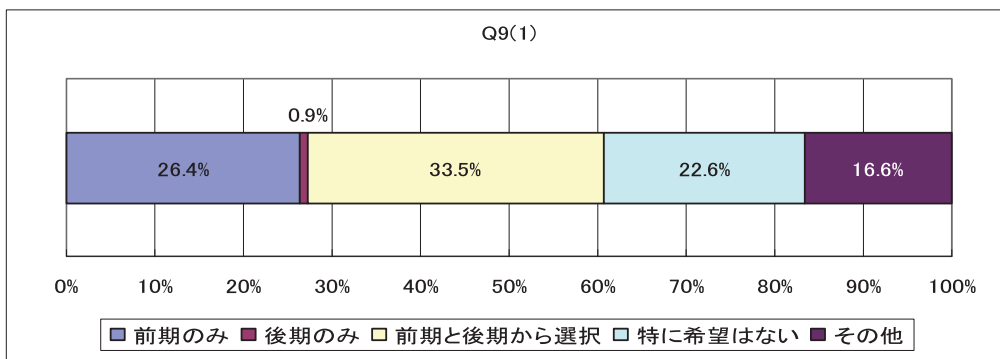
Q9 ポケット・ゼミの実施方法についてのご意見をうかがいます。

(1) ポケット・ゼミは、新入生に対して、学問へのモチベーションを与えるという趣旨から、前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思いますか。2 または 3 を選択された場合、その理由も書いてください。

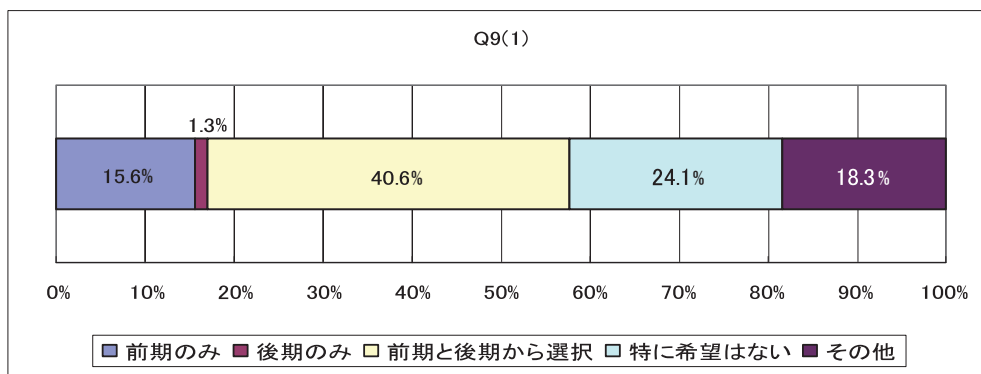
結果は、図 2-15 に示される。

前回調査に比べ、「前期のみでよい」とする回答が増え、後期開講を望む声は減少しているようにも受け取れるが、本調査は実際に前期に受講した学生を対象とした調査である点を加味する必要がある。事実、「その他」（16.6%）の回答の中には、「前期、後期ともに開講してほしい」、「前期、後期両方受講したい」というように、前期受講を前提とした上で、後期の受講を望む声も多く聞かれた。

その他、通年科目の開講を望む意見、2 回生以上でも受講したいという意見が見られた。



今回調査

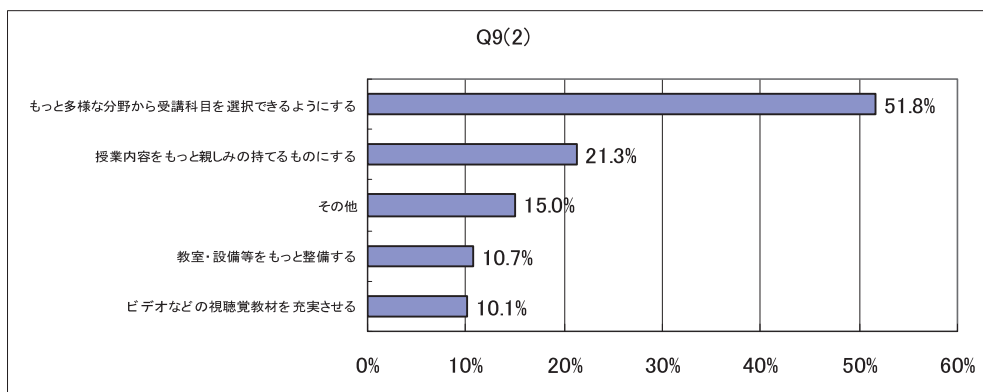


平成 15 年度調査

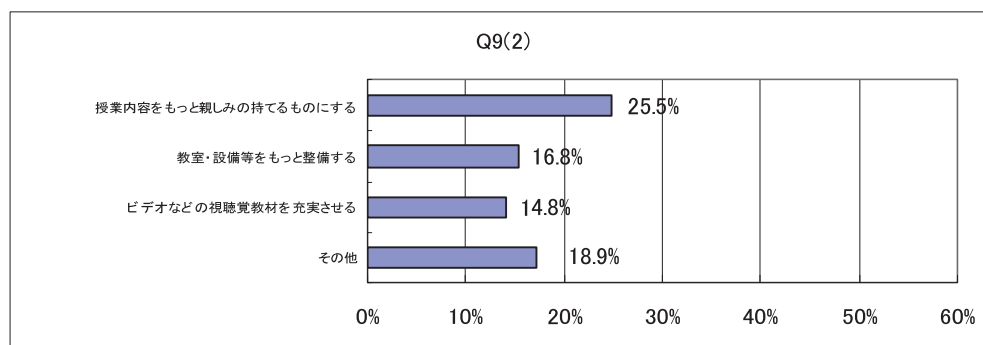
図 2-15 ポケット・ゼミの開講時期についての意見分布

(2) 今後、ポケット・ゼミの内容をさらに充実させるためには、どのようにすればいいと思いますか。(複数回答可)

結果は、図 2-16 に示される。



今回調査

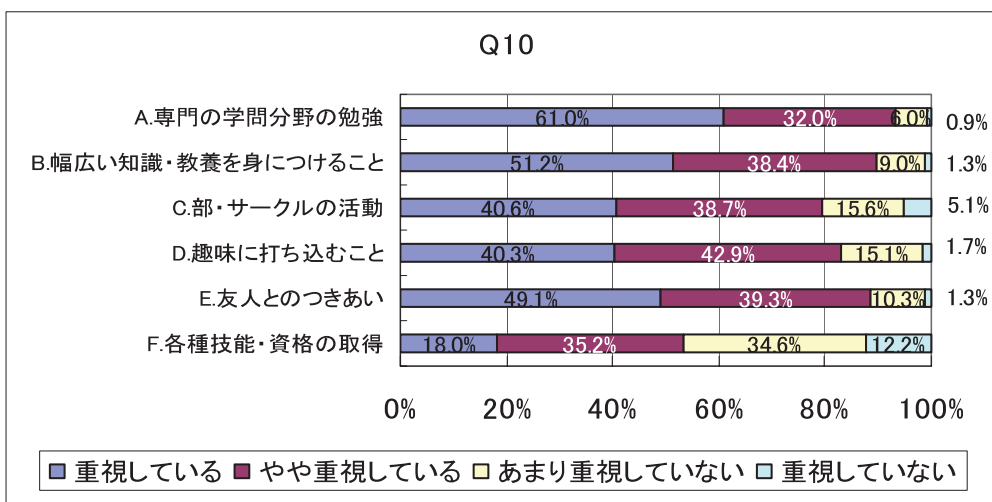


平成 15 年度調査

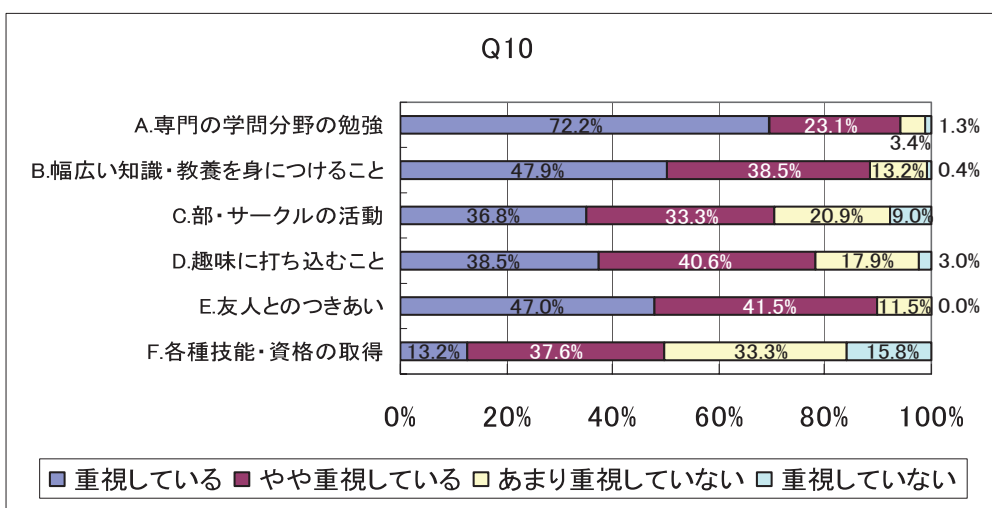
図 2-16 ポケット・ゼミを充実させるための意見分布 (複数回答可)

Q10 大学生活に関する A～F の各項目について、あなたはそれぞれの程度重視していますか。

結果は、図 2-17 に示される。「専門の勉強」を重視する割合が減り、「サークル活動」「趣味」「友人つきあい」を重視する割合が増えているのは、昨今の傾向といえるだろうか。



今 回 調 査

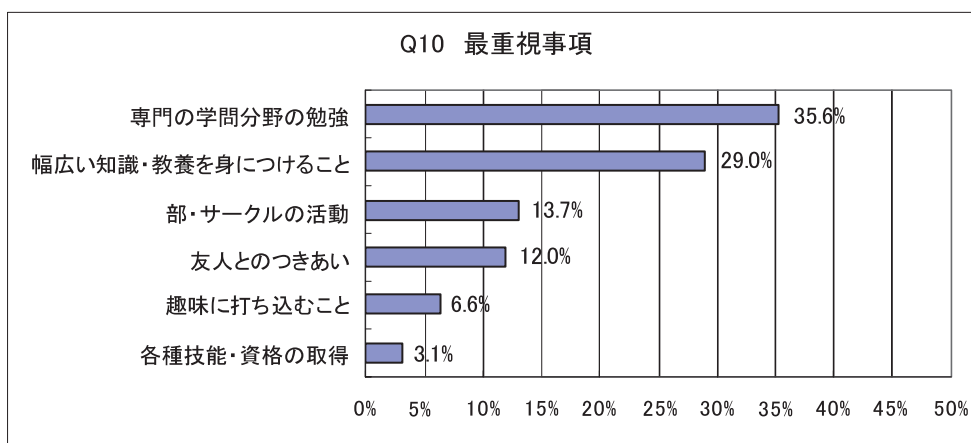


平成 15 年度調査

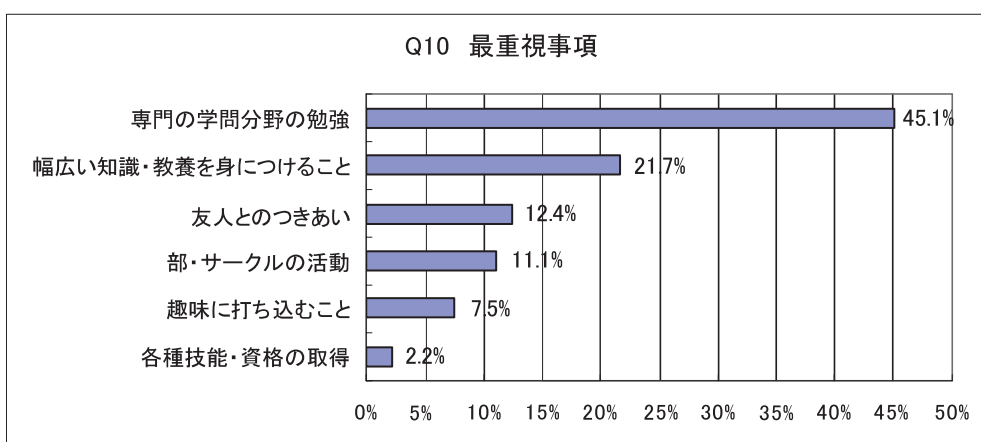
図 2-17 大学生活に関して重視していること

Q10 その中であなたが最も重視していることは何ですか。上のA～Fの記号で1つだけお答えください。

結果は、図 2-18 に示される。上記設問とも関連して、注目すべきは、前回調査と比べ最近の学生が「幅広い知識・教養の修得」を重視する傾向が見受けられる点である。専門外の分野で最先端の研究に触れる機会が得られるポケット・ゼミが歓迎される下地には、このような点が影響を与えているのかもしれない。



今回調査



平成15年度調査

図 2-18 大学生活に関する最重視事項（択一）

2. 自由記述のまとめ

Q11 ポケット・ゼミについて、何かご意見やご希望があれば自由に記入してください。

ポケット・ゼミそのものへの非常に肯定的な評価をもとに、後期も開講して受講機会を増やしてほしいなど、ポケット・ゼミ充実への希望が多い。また全回生対象とする案などを含めた拡充案が提案されている。

以下に、Q11 に対する自由記述の意見を全て記す。便宜上、①肯定的意見、②拡充を求める意見、③改善を求める意見、④その他に分けて記載した。一人の回答者が複数の意見を書いている場合は、中心的意見と思われるものにより、分類した。なお、「特になし」に類する意見は除いた。

① 肯定的意見

- ・私は森林科学科専攻なのですが、このポケゼミは専門の内容と通じる部分が多くあったので、履修して良かったと思いました。
- ・早い段階で大学の研究室の“雰囲気”を実感できたということでも有意義にうちこむことができました。今後、つづけていくべきだと思います。
- ・学部の大枠を超えて、様々な人達が集まってくるというのが、魅力の1つかもしれない。

- ・思考が深まり非常にいい経験ができた。
- ・これからも続けていくとよいと思う。
- ・ポケゼミは期待していた以上でした。
- ・自分の専門分野とは全く関係のない分野でしたが、貴重な体験ができてよかったです。
- ・普段見られない建築の内部を見学できてとても勉強になりました。また、これから自分が学んでいく建築という学問についての興味が深まり、楽しみになりました。
- ・講義形式ではなく、同じ目線で教授の話を伺い、また討論できとても良かった。
- ・とても楽しかったです。
- ・他のポケゼミを受講している人に比べると、だいぶ活動が活発（？）というか、作業が大変だと感じましたが、その分（原文ママ）
- ・すごく楽しかったので。
- ・一日集中と隔週を交互にやれば2つの利点が見られると思う。
- ・追加募集で入ったが2回目の授業からでも良い雰囲気できて良かった。プレゼンの予定が英訳になってしまったがマウスの体外受精の実験がやれたのは非常に良い体験になった。
- ・ポケゼミには相当な時間を費やし、深夜まで活動することも多くありましたが、その分大きな成果が得られたように思います。いい制度だと思います。
- ・とても良い経験になりました。
- ・とてもたのしく、興味深いものでした。受講してよかったと思います。
- ・とても楽しかったです。
- ・この現状がいちばんいいと思う。
- ・講義形式とは違ったものを得られてよかった。いつもは教授と話す機会なんてほとんど無いけど、教授と語り合えるってところがとても良い経験になる。それにゼミの仲間とも仲良くなれるし、これからはずっと続けていってほしい。
- ・このポケット・ゼミで得られたものは、本当に多かったと思います。他の授業は基本的に大人数で受身にしか参加できませんでした。このポケット・ゼミは受身でなく参加でき、自分の頭で考える、ということがしっかりできました。経済学部としてのこれからの学びの中で、この財産を生かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・このゼミはとても有意義だと思うので、今後も改善すべきは改善して続けていって欲しい。むしろ上回生になって、より広く教養を得てからやっても良かったかもしれないが、1回生のこの時期に、こういう勉強が出来たことは非常に良かった。
- ・ありがとうございます
- ・楽しかったです。
- ・とてもよかった。
- ・非常に興味深い話ばかりで良かったです。
- ・追加募集のポケゼミでしたが、本当にとれてよかったと思えました。自分の知らない企業の現状など、勉強になりました。
- ・様々な考え方に触れることができとてもためになったと思います。
- ・とてもおもしろかったので、ずっと存続してほしい。
- ・楽しかったです
- ・1回生のこの時期にゼミ形式の授業が受けられるのは、とても良い経験になりました。
- ・とてもこの授業は充実していました。来年もぜひ開講して下さい。
- ・教授と直に触れる機会を持てたのが良かったです。来年もぜひ開講してほしいです。
- ・受講してよかったと思います。学生も先生も非常に熱心で面白かったです。
- ・すばらしい！！
- ・自分の希望しているコースの系列の講義だったので非常にいい経験になった。そのコースに進んでもっと学びたい。
- ・通常授業では得られない、専門的な実習を体験することができ、とても有意義でした。

- ・楽しい。
- ・とても得るものが多かったので、参加してとてもよかったです。
- ・楽しかった。
- ・期待通りの満足度でした。
- ・おもしろかった。
- ・楽しかったです。
- ・とても面白かったです。とって良かった。
- ・楽しめました。大変ではあったけど…。
- ・ポケゼミもっとやってほしいです。いろんな学部の人と意見交換するのはよい刺激になります。
- ・良い授業だと思います。
- ・何か、ここでしか得られないものが得られた気がした。
- ・具体的な大学の研究室の感じとかが分かって良かった。
- ・今後も続けて下さい。
- ・とても楽しかったので今後もつづけてください！
- ・すごくいい制度だと思います。普段自分の考えていることを話したり、新しい知識を身につけることができるので良かったです！
- ・良い。
- ・大学の授業ではめったに少人数の授業がないのでいい経験になりました。
- ・関心のある分野のポケット・ゼミを受けて、とてもよかったです。
- ・ラスト2週間がかなり過酷でしたが、調査を通じていろんな方と知り合うことができ、また同じ授業を受けた学生と強い絆を深めることができました。楽しかったです!!!手助けしてくれたみなさんに感謝します。
- ・受講できてよかったです。ありがとうございました。
- ・自分の専門分野の学習にもつながるとも興味深い講義を受けることができ、よかったです。ありがとうございました。
- ・新生が先端的な研究に触れるという点で、良いものだった。
- ・とても満足してます。1週間の中でポケゼミが一番楽しみでした。良い友達や優しい先生に出会えて良かったです。
- ・内容は素人でも参加しやすかったし、先生にも親切に対応していただいて、毎回楽しく参加出来ました。参加している学生も皆熱心でやりやすかった。ぜひ続けてほしいと思う。
- ・難しかったけれど面白かったです。
- ・しんどいけどおもしろかったです。
- ・楽しかった。本当に楽しかった。
- ・他の学部生とディスカッションしたりできるのは、なかなかない機会なのでよいと思う。
- ・プレゼンテーションという貴重な体験をさせていただき、感謝しています
- ・とてもためになりました。ぜひ存続して下さい。
- ・先生をはじめ、上田さん、実習林の職員の方々、一緒に参加した方々、みなさんととても親切で楽しくておもしろくて大変お世話になりました。本当にありがとうございました。
- ・いろいろな学部、学科の人がいて良かった。
- ・今後も新生生の大学での学問の入り口としての役割りを果たし、新たな発見の喜びに触れられるような授業作りに取り組んでください
- ・通常授業とは一味違ったポケゼミを、是非続けて頂きたい。
- ・取って良かった。
- ・あまり話をきくことのできない教授の話を直接きくことができ、良かったと思います。貴重な体験でした。
- ・楽しかったです。
- ・とても貴重で、得がたいものを得ることができました。ありがとうございました。

- ・たのしかった
- ・好きです。
- ・「ブラックボックス…」はとてもおもしろいポケット・ゼミなので、続けた方がいいと思います。
- ・1回生の段階でここまでさせてもらえるとは思っていなかった。大満足。
- ・とてもいい企画であると思うので、このまま存続して欲しい。
- ・とても良かったです。
- ・様々な経験ができてとてもよかったです。本当にありがとうございました。
- ・あってよかった。また今度は違うのに行きたい。今のところ再入学しか方法はないだろうが。
- ・良い制度だと思う。
- ・みんなが発言できるコーナーがあったり、というか少人数なんで、いつでも発言できるのはとてもいいことだと思います。
- ・とても貴重な体験をありがとうございました。今後の勉学の励みになったと思います。
- ・教室の授業ではもちろんのこと、普段の生活の中でもまず経験できないことが体験できたことがよかったです。また、自分が将来進むであろう道とは違う分野をのぞくことができたことも貴重な経験になりました。
- ・ポケゼミによってすばらしい経験をすることができました。少人数による集中講義はもっと増やしても良いと思います。また、勉強になることも多く、多分野での交流が求められるので、学生にとってはこれほど良い授業はないと思います。
- ・続けるべきである。
- ・とてもいいものだと思うから、これからもポケゼミは続けていったほうがいいと思う。
- ・選択の幅が多く良いと思う。ただ、第3志望までも落ちてしまった友人がいたのが少し気になった。(抽選なのでどうしようもないのですが。)

② 拡充を希望する意見

- ・後期も来年もしたいです。
- ・前期だけでなく、後期にも、あったらいいと思いました。
- ・人気のある分野は教員を変えたりして講座数を増やして欲しい。
- ・よい試みだと思う。さらに拡充させて、希望者が漏れなく受講できるようにしてほしい。
- ・哲学分野の講座は、少人数のを沢山、あるといいと思う。
- ・受講科目を増やしてほしいです。
- ・すべての回生においてやってもいいと思う。
- ・後期もつづけて受講できるようにしてほしい
- ・とてもおもしろいし、今後学ぶことがないであろう分野のことを学ぶことができてよかった。1回生の前期だけだと他に興味があった分野ができないので、後期も実施してほしい。
- ・受講したいものがたくさんあったので2つ以上受講できる形が良かった
- ・前後期ともに開講して下さったら嬉しいです。
- ・1つではなくいくつも受講できると、さらによいと思います。
- ・すばらしいと思います。後期にもあると、専門と専門以外の両方がとれて良いと思います
- ・半期だけでしたが、非常に楽しむことができました。学部によってはゼミがない所もあるので、皆が受けれる機会を持てるよう、講座を増やして欲しいです。
- ・面白かったので、もっと長い期間開講してほしい。
- ・もっと化学に通じる講座が増えてもいいと思う。
- ・後期にポケゼミ・マニアック編を
- ・一回のみ(一年前期)では少ない二年でも開講すべき
- ・受講の機会を増やしてほしい。
- ・もっと多岐にわたってやってほしい

- ・開講科目をもう少し増やして欲しい。
- ・後期も何かとりたいです。
- ・ずっと受けていられるようにしてもらいたい。
- ・ポケゼミでしか得られない事（教養以外の面でも）は多くあるので前期のみという開講期間ではなくもっと多く開講してほしいと思った。
- ・更に専門的な実験などを取り入れて欲しい。
- ・Q9（1）で答えた通り、楽しく勉強できるように全学向けで、前・後期とも開講してもらえると、学生の学習意欲も上がると思います。
- ・1人で2つとか、前期も後期もとか受講できる機会をふやしてほしい。
- ・できれば、一人がもっと多くの授業を履修できるようにしてほしい。（例えば、専門とそれ以外1つずつなど）
- ・もっと数をふやしてほしいし1年後期や2年でもとれるようにしてほしい。かなり効果がある計画であるのは間違いないと思います。
- ・もっと長期間やるべき
- ・もっとさまざまな分野のものがある方が良い
- ・後期もやりたいです
- ・後期も受けてたい。
- ・前期だけではなく、ずっとやってほしい
- ・後期も開講して欲しいです。
- ・前・後2回とれたらよいと思った。
- ・ぜひ通年にしてください。
- ・後期もぜひやりたいです。
- ・「1回生の前期のみしか受講できない」「1人1講座まで」という制約が非常に残念。私自身、このポケット・ゼミは第1希望として選んだが、第2希望の講座にもとても興味が有り、もし2講座以上受けられるのなら絶対受講したと思う。また、前期に受講したこのポケゼミがとてもよい経験になったので、後期にも受講できたなら、きっと受講するのに、とも思う。他学部の友人と交流し、教授から直接いろいろな話をききながら見聞を広めることのできるすばらしい機会だと思うので、もっと機会を増やしてほしい。
- ・もっと色々なポケット・ゼミに参加したいです。
- ・2回生以上にもしてほしい。
- ・複数受講できるようにして欲しい。
- ・開講科目を増加すること

③ 改善を希望する意見

- ・ポケット・ゼミを選ぶさいにもっと内容がわかるようにしてほしい
- ・第3希望まで全部落ちたという人が減らせるように対策をして下さると嬉しいです。知り合いにも何人かそういう人がいたので、やはり気の毒です。
- ・A群系が少ない気がします。
- ・僕が受講したポケット・ゼミは僕にとっては非常に面白く、大変意義深いものでした。だからこそ、他のポケット・ゼミも受けてみたかったという気持ちも残ります。しかし、先生方の負担を考えるとなかなか難しいでしょう。だから、少なくとも、ポケット・ゼミは継続の方向でお願いしたいです。それから、僕は全くそんなことはありませんでしたが、講義中に毎回のように舟を漕いでいる者が数名見受けられました。こうした人たちは不幸にも、自らの望むような講義を受けられなかったということなのではないのでしょうか。言いたい事は、ポケット・ゼミは普通の講義と違い受講申請前に下見をすることができない分、KULASIS上の講義概要を分厚いものにしてはどうかということです。例えば、講義中の写真や前年度選択者のレビューを載せるなどして、受講者の選択ミスをできる限り防げないかと思うのです。せつかくの貴重なポケゼミなのだから、皆が思ったとおり講

義を受けられるのが理想です。「期待していた講義と違う・・・」というのでは勿体ないですからね。

- ・ポケゼミの内容は案内の文章でしかわからないので決めるときの資料が少ない。もっと具体的に内容がわかり易いようにすると思う。
- ・取りたくても取れなかった講義があったので、(時間的に)余裕がもしあるのなら、週に数回あると、選べる範囲が広がるかなと思いました。
- ・もう少し話し合えた方が...よかったかな？
- ・毎年傾向を考えて人気の分野のゼミをより増やしてほしい。講師の意図、なぜこの分野を学んでほしいのかを、選ぶさいに伝わりやすいようにするとよいと思う。
- ・ポケゼミなのに、大人数と同じようにスライドを使って説明して終わり、という授業も少なくなかったので、それが少し残念でした。
- ・もう少し難易度を下げてほしかった。
- ・研究施設見学を試みたかった。
- ・授業をとる前に内容がもう少し知りたい。
- ・第1志望のものが取りやすくなると思う。
- ・過去にどのようなポケット・ゼミがあり、実際にどのような内容であったかを知る事ができれば選択の参考になると思う。
- ・もう少し選ぶ時間がほしかった。配布された資料だけでは内容がわかりにくい。
- ・みっちりしたものを期待していたが、後半2/3はリレー講義だったので期待はずれだった。ポケゼミであるからには実習や討論を充実してほしい。
- ・少人数でも15人は多すぎかと...
- ・もっと楽しいのがある。つまらなかった。
- ・もっと学生のためになる授業をしてほしかった
- ・せっかくのゼミ形式なのだから様々なことができると思うし、やるべきだ。例えば教室外での講義とか。
- ・建築の用語で先生がたがあたりまえのように使う語についてずぶの素人の私は知識がなく、それが少し残念だった。それ以外は楽しかったです。
- ・もう少し計画性をもってほしい。
- ・開講日をもっと伝わりやすくしてほしい
- ・ポケゼミ間の充実度の差異をなくしてほしい。
- ・前期でとれなくても後期でまたそのような人がチャンスを得られるようなしくみがあればいいなと思います。
- ・A・B群のポケット・ゼミを選び、とても良かったと思っているが、自分の学科はB群のポケット・ゼミは卒業単位に入らないということがあって、B群から選ぶということは全く考えなかった。群という区別はなくしたらいいと思う。
- ・少人数ディベート、環境問題をもっととりあげてほしい、京都についてもっとしりたい。
- ・せっかく少人数の講義なので、教員が前で自分の専門を話すだけでなく、分かりやすいような説明がもっとあれば良かったと思う。
- ・特に希望はないが、入学してすぐは、いろいろ忙しかったので、予備登録の期限をもう少し遅くしてもいいと思う。
- ・やっぱりもう少し意見の交換が多い方が良かった
- ・集中講義で一気にはできるのは良かったのですが、開講時期がテスト勉強の時期とかぶっていたのがつらかったです。5、6月にあれば良かったかもしれません。
- ・ポケット・ゼミも普通の講義と同様に正式に受講する前に教員から授業内容の説明を受ける機会があればもっと積極的にとりこんでくれる人数が増えるかもしれないと思った。
- ・受講前にもっと内容を詳しく紹介してくれたらもっと考えられたと思います。なのでもっと紹介を充実させるべきだと思います。
- ・もっとディスカッションがしたかったです。

- ・他学部のポケゼミは少し敷居が高いように感じるので、もっと受講しやすくしてほしい。
- ・できるだけ多くの人がポケゼミを履修できるとよいと思います。落ちてしまった人も結構いるようなので。
- ・シラバスだけで授業の形式を具体的に予想するのが難しいので、何か他の方法があるとよかったですと思う。
- ・全てのゼミを15名以下（できれば10名以下）に限定すること
- ・実験やフィールドワークを全面的に導入すること。または学生の発表機会を増やし、積極的な授業参加を促すことを追求すべきではないかなと思います。
- ・なるべく第一希望で通るようにしてほしい
- ・ポケゼミのシラバスをもっと充実してもらいたいです。具体的な内容を（例えば全科目共通のように）書きこんだり、あるいは教員の方の都合に応じて内容をかえるのならば、その旨を記すなどしてもらえると、選ぶときの参考になります。
- ・留学生や外国人になりのポケット・ゼミがあればよりよいと思う
- ・夏とかはととも外に出れない。冬がいい。
- ・少人数でのフィールドワークは機材などを扱う機会も増え、とても有意義だったので、フィールドワークは是非講義計画に取り入れるべきだと思います。
- ・抽選による落選が発生しないようなシステムにするべきだと思います。
- ・実習旅行があったので、もう少し人数が多くても良かったかもしれない。
- ・もう少しポケゼミに関する説明をしてほしかった。

④ その他

- ・興味がある講座が学部と関係しているものだと思うのに専門とかぶって取れなかったものがある。
- ・現行のままで良いと思う。ポケゼミを選択するとき、数が多くて迷った。
- ・他のポケゼミの中には、ほとんど授業がなかったりのものがあるそうなので、やる気のない教員はやらなければいいと思う。
- ・クラス指定科目のせいでとれない科目があるのはくやしかったです。
- ・B群の単位が認められることを教えてほしかった。
- ・ないです
- ・教授と飲みに行きたい
- ・初日だけでなく連日歓迎会みたいなのでして下さい。

第3章 非受講学生調査の結果

1. 設問別の結果

平成20年度ポケット・ゼミの非受講生の調査は、8つの設問からなっている。受講学生のアンケート回収率が59.0%であったのに対し、非受講学生の回収率は9.4%と相対的に低いことから、後者のアンケート結果には、多少なりともバイアスがかかっている可能性を考慮しつつ結果を見ていく必要がある。以下、設問ごとに結果を見ていく。原則として設問ごとに集計結果をグラフで表示し、小数点以下1桁まで（2桁目を四捨五入）の百分率を添えた。百分率の数字はいずれも有効回答数中のものであり、無答などを除いている。

Q1 あなたの性別を教えてください。

回答者の男女比は、受講学生において男女比72.2対27.8であったのに対し、非受講生では64.6対35.4と女性の割合が高くなっている（図3-1）。これは、履修していない授業科目についてのアンケートに協力しようという真面目な学生が、女子学生には多いことを反映している可能性がある。

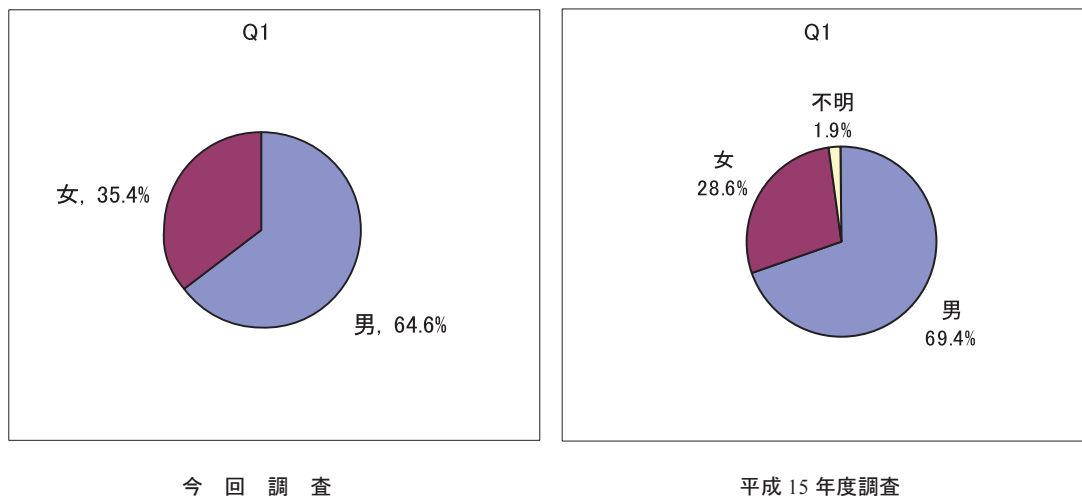
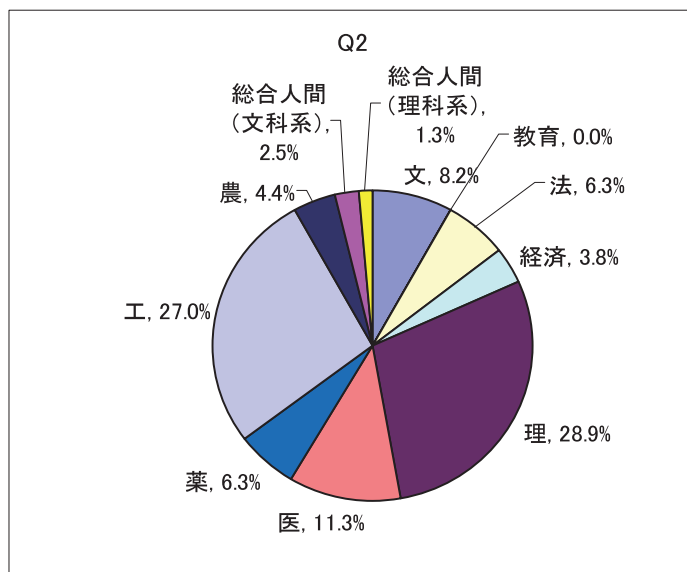


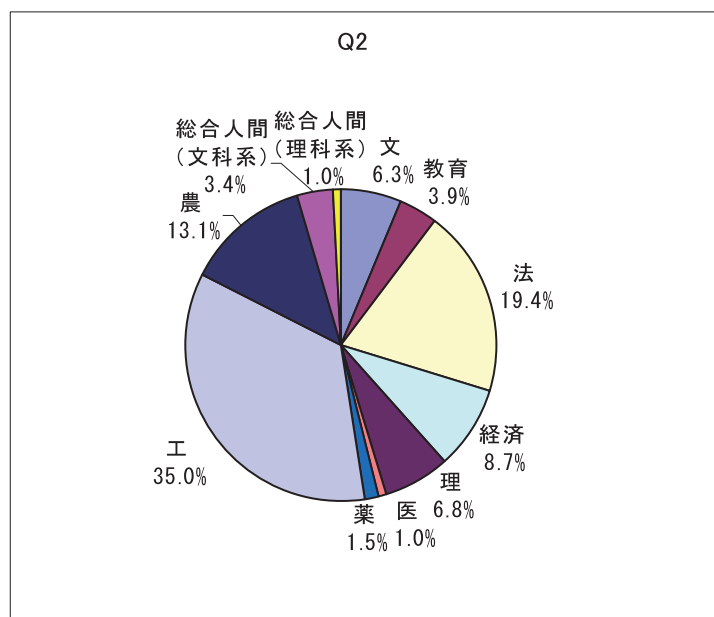
図3-1 回答者の性別分布

Q2 あなたの所属学部を教えてください。

非受講学生回答者の所属学部が受講学生と異なる点として、1. 農学部が少ない、2. 理学部が多い、の二点が挙げられる（図3-2）。理学部の回答者が多いのは、他の学部とアンケートの回収方法が異なることに起因している可能性がある。すなわち、他の学部では成績表の配布時にアンケート用紙を配り、各自で記入後全学共通科目学生窓口に設置した回収箱に提出してもらったのに対し、理学部では英語の授業でアンケート用紙を配布し回収しているため、非受講学生について回収率が高くなっていると思われる。一方で、提供科目数の学部間の不均衡を反映している可能性もある。全学共通科目であるとはいえ、学生の立場としては、多少なりとも自分の専門分野に近いポケット・ゼミを希望する傾向があるのは当然である。そこで、提供科目の比較的多い農学部ではポケット・ゼミを受講しなかったおよび受講できなかった学生は少なく、逆に提供科目の比較的小さい理学部では、ポケット・ゼミを選択しない、あるいはできない学生が多かったとの解釈である。いずれにしても学部間の提供科目数に不均衡が生じていることについては今後検討が必要である。



今回調査

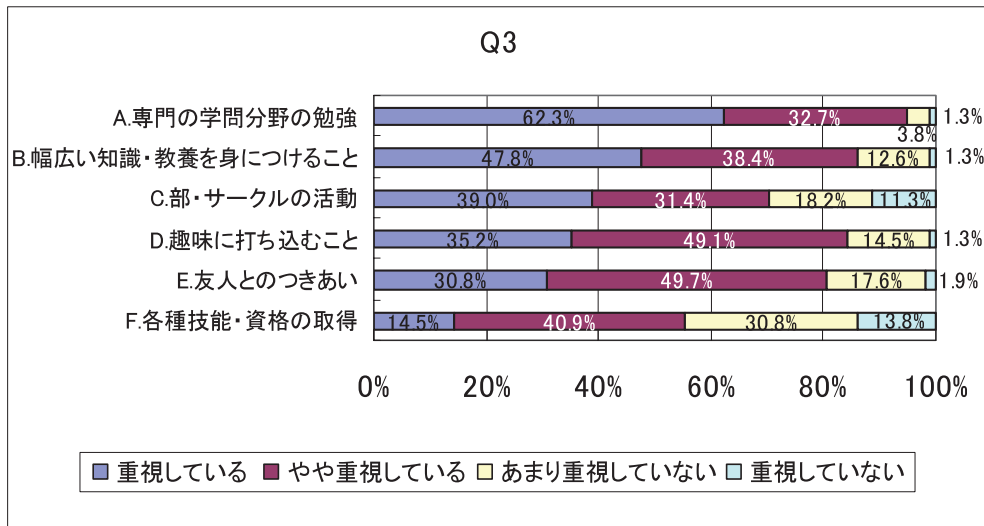


平成15年度調査

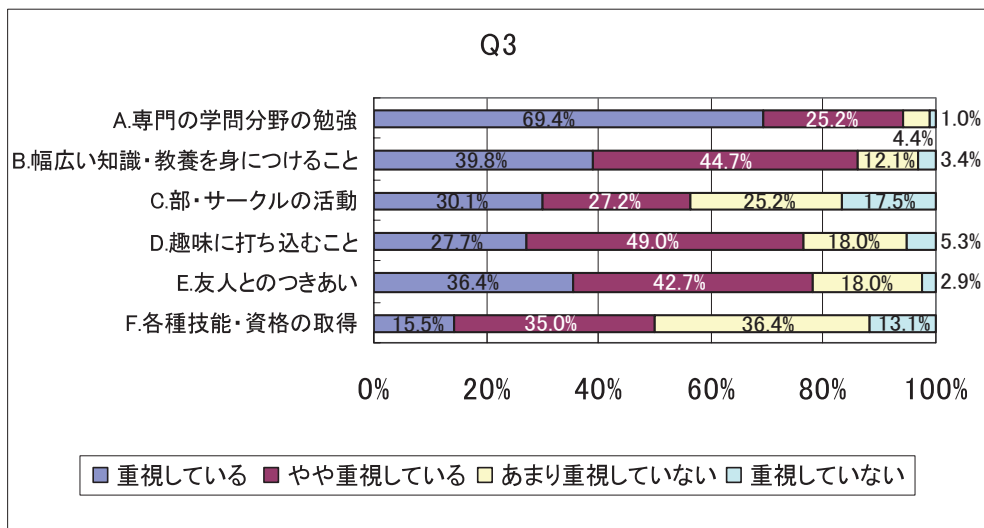
図 3-2 回答者の学部別分布

Q3 大学生活に関するA～Fの各項目について、あなたはそれぞれの程度重視していますか。

受講学生も非受講学生も「専門の学問分野の勉強」を重視する学生の割合が最も多く、これは平均的な京大生のスタンスをある程度反映していると考えられる（図 3-3）。今回調査における非受講学生の特徴として、「友人とのつきあい」を重視している学生の割合が目立って少ない。これは、ゼミといういわば社会的な授業形式を好まない学生がポケット・ゼミをとらなかった、という可能性に加えて、あまり社会的でない学生はポケット・ゼミに関する情報を得にくかったという可能性を考える必要がある。実際、受講学生にポケット・ゼミの選択理由を尋ねると、学科やサークルの友人・先輩、京大に通う兄弟からの口コミという答えをしばしば耳にする。ポケット・ゼミの意義についてのより一層の周知が望まれる。



今 回 調 査

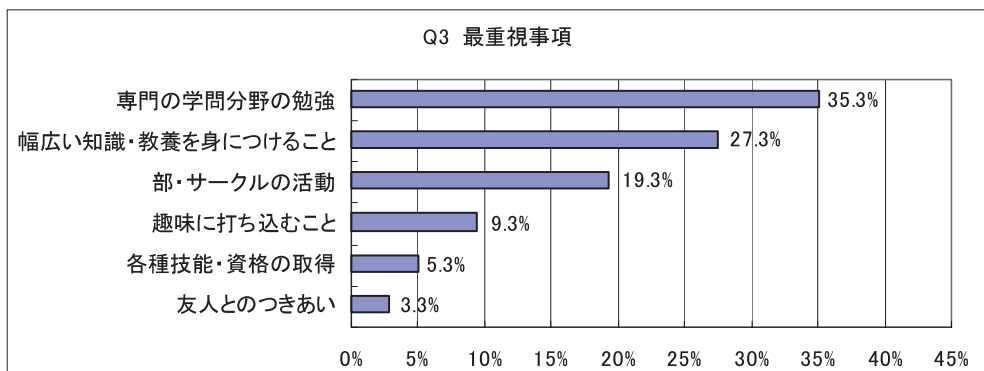


平成 15 年度調査

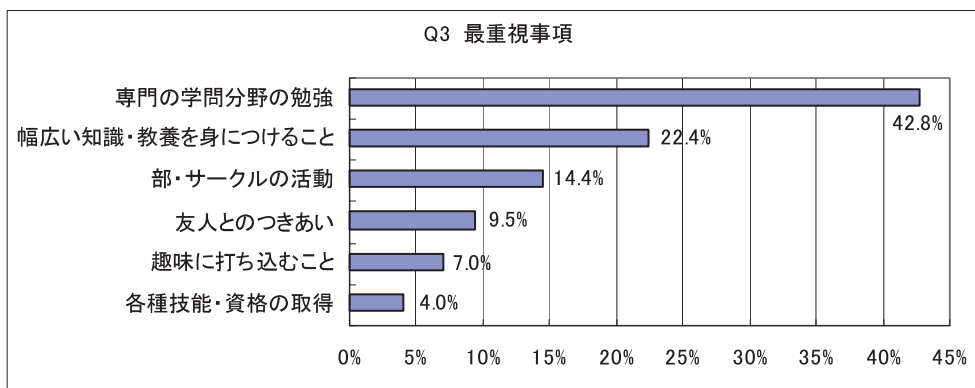
図 3-3 大学生活における重要事項（複数回答可）

Q3 その中であなたが最も重視していることは何ですか。上のA～Fの記号で1つだけお答えください。

結果は、図 3-4 に示される。受講学生に対する調査と同様、前回調査よりも「幅広い知識・教養の取得」を重視する傾向がここでも見受けられる。



今 回 調 査

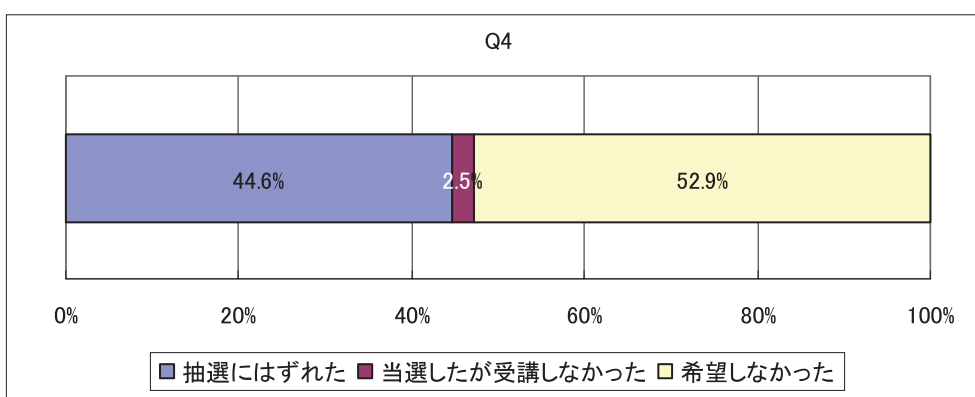


平成 15 年度調査

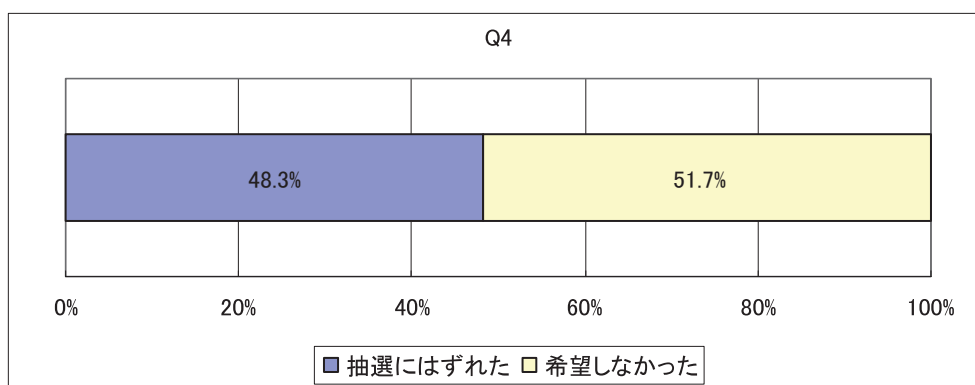
図 3-4 大学生活における最重視事項（択一）

Q 4 ポケット・ゼミの受講に関して教えてください。

非受講学生のうち、抽選にはずれた学生は 44.6%、希望しなかった学生と当選したが受講しなかった学生の合計は残りの 55.4%である（図 3-5）。前回調査では、抽選にはずれた学生は 48.3%であった。ポケット・ゼミの開設科目数が 5 年間で 133 から 148 へと 1 割程度増えたことにより、抽選落ちの学生はわずかながら減少していることがうかがえる。



今 回 調 査



平成 15 年度調査

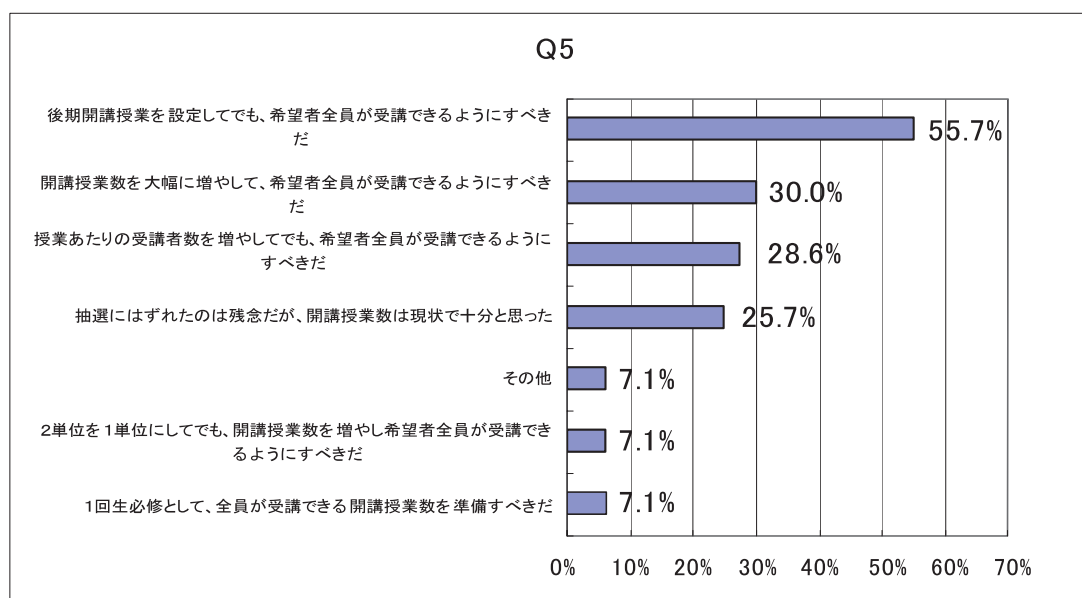
図 3-5 ポケット・ゼミの受講動向

Q 4 の設問で「受講を希望したが抽選にはずれた」を選択した者は Q 5 に、「受講を希望し、当選したが受講しなかった」を選択した者は Q 6 に、「受講を希望しなかった」を選択

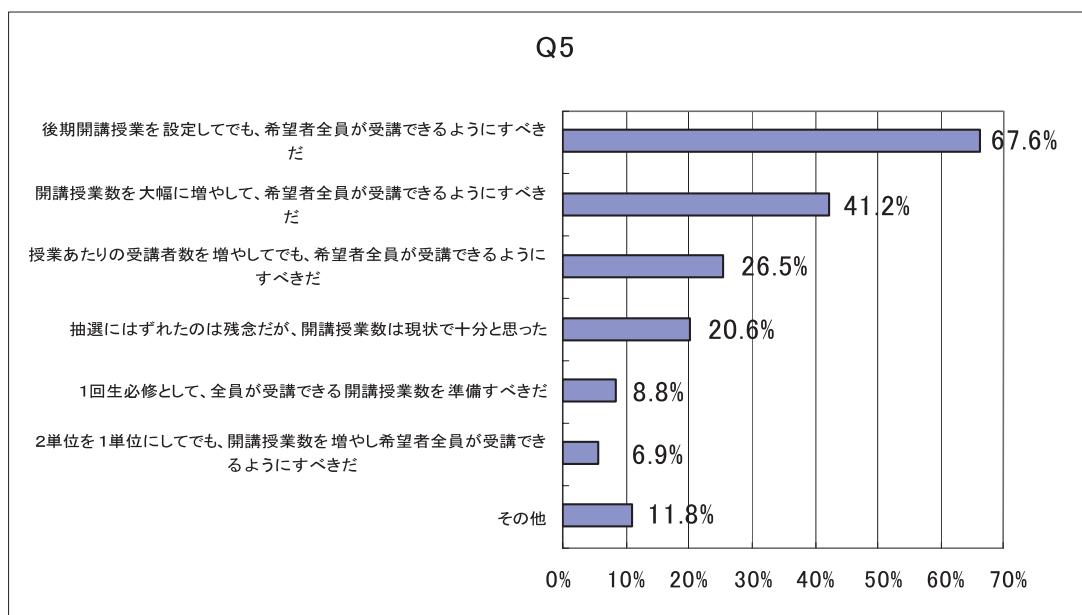
した者はQ7に進むように指示された。

Q5 ポケット・ゼミを受講できなかったことについてどう思いましたか。（複数回答可）

受講できなかったことについての意見として、「後期開講授業を設定してでも、希望者全員が受講できるようにすべきだ」との意見が55.7%と最も多い（図3-6）。これに対して「開講授業数は現状で十分」との意見は25.7%である。なお、前回調査では、「後期開講授業を設定してでも」との意見は67.6%、「現状で十分」は20.6%である。こうした変化も、開講科目数の増加をある程度反映していると考えられる。



今 回 調 査



平成15年度調査

図3-6 ポケット・ゼミを受講できなかったことについての意見（複数回答可）

「その他」を選択して自由記述に回答した5名の記述は下記のとおりである。

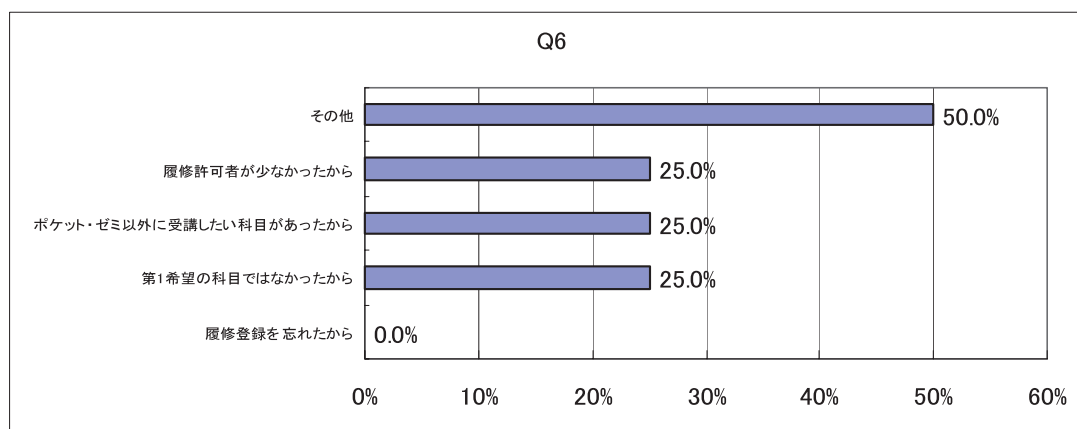
- ・受講したくてもできない人がいる中で、当選したのに受講しない人がいるようである。

当選したら必ず受講しなければならないシステムなら希望者が多く受講できるようになるのではないかと思う。

- ・3つともはずれて残念だったが、3つも受講できた学生がいて、このようなシステムは改善すべきだと思う。
- ・希望者全員が受講できるようにする必要はないが、後期にも開講してほしい。
- ・ポケゼミの取り扱う分野の学科に属する学生用の特別枠を作るべき。
- ・ムカついた。やる気を削がれた。

Q6 当選した科目を受講しなかった理由を教えてください。（複数回答可）

この設問に関しては、回答者数が4名と少なく、また今回は調査項目としていなかったため、傾向を読み取ることは難しい（図 3-7）。ただ、本回答にもあるとおり、希望者が極端に少ない（1～2名）ことを理由に、学生が教員とのマンツーマンの授業を敬遠して履修を諦めたため、せっかく提供していただいたにもかかわらず不開講となる授業が毎年存在する。科目提供を要請する立場としては非常に残念な状況であり、この問題についての検討も、今後必要になるかもしれない。



今回調査

図 3-7 ポケット・ゼミを当選したが受講しなかったことについての意見（複数回答可）

Q7 ポケット・ゼミの受講を希望しなかった理由を教えてください。（複数回答可）

結果は、図 3-8 に示される。上記の設問に対しては、「履修に都合がよい曜日・時限になかった」「すでに過密なスケジュールだった」といった学生のスケジュール上の問題に帰せられる理由が、それぞれ 50.6% および 33.7% と大半である。この点は、前回調査とほぼ同様である（それぞれ 44.3% および 23.6%）。興味深いのは、「履修案内に書かれている内容を見て関心が持てなかったから」と回答した学生が 32.5%（50 名）もいたことである。同様のアンケートで同じ項目を選んだ学生は 5 年前には 13.2% であった。わずか 5 年の期間で、学問の体系が大幅に変化することは考えにくい。しかし、学生の興味は年々変化する。より多くの学生に興味を持ってもらえるよう、担当教員が履修案内を随時更新してゆく必要がある。

「その他」を選択して、自由記述に回答したのは 13 名であった。

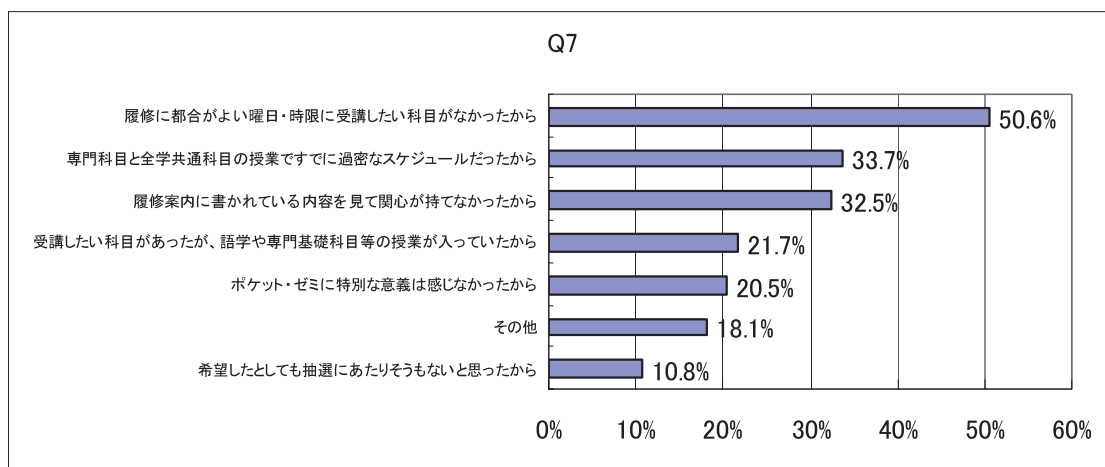
そのうち 3 名は、卒業単位として認定されていないことを理由にしている。この問題は各学部において検討の必要がある。以下に 3 名の理由を挙げる。

- ・受講したいと思った科目は単位に認められなかったから。
- ・B 群の科目が単位に認定されなかったから。
- ・卒業に必要な単位にならないから。

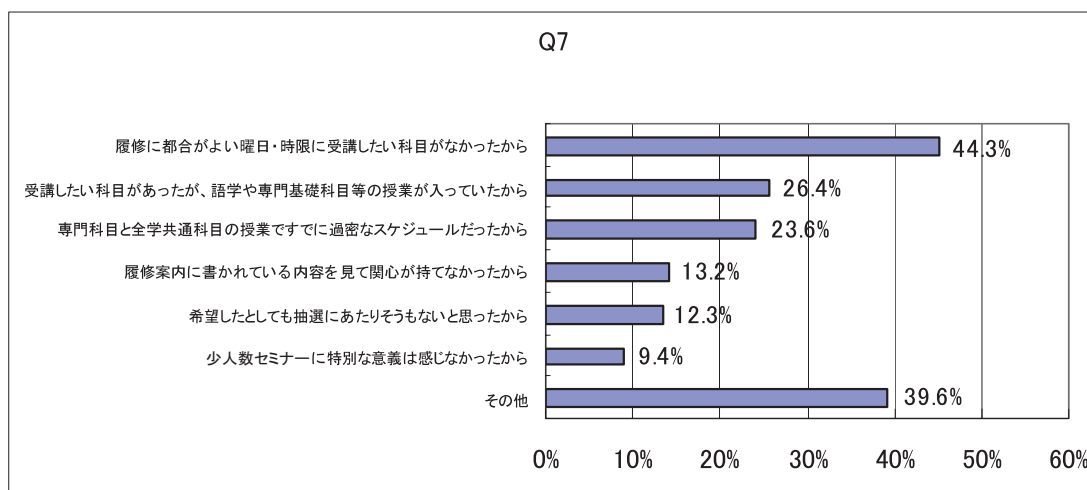
次の 10 名の理由は、「存在をしらなかった」「タイミングを逃した」など、本人の責任もあるが、ポケゼミに関する広報をより工夫することによって、改善することのできるもの

である。以下に 10 名の理由を挙げる。

- ・存在を知らなかった。
- ・存在がよく分からなかったから。
- ・入学前後は状況が把握できず、ポケット・ゼミ受講を検討する余裕がなかった。
- ・一般教養科目になるということを見落としていて、もう B 群はもう増加単位 (B 群はもう増加単位)
- ・実は希望したが、抽選を忘れていた。
- ・登録したつもりでできてなかった。
- ・申込みが早すぎる。
- ・タイミングを逃した。
- ・いつの間にかポケゼミの申込みの期間が終わっていたから。
- ・難しそうに感じたから。



今回調査



平成 15 年度調査

図 3-8 ポケット・ゼミの受講を希望しなかった理由

2. 自由記述のまとめ

Q8 ポケット・ゼミについて、何かご意見やご希望があれば自由に記入してください。

以下に Q8 に対する自由記述の意見を全て記す。大きく分けると、①ポケット・ゼミへの肯定的意見と受講機会が得られなかったので拡充を求める意見（13名）、②単位認定を求める意見（2名）、③ゼミの内容に関する意見（3名）、④広報の充実を求める意見（2名）に分かれた。前回調査同様①の制度拡充を求める意見が多かった。以下全員の理由を挙げる。

① ポケット・ゼミへの肯定的意見と受講機会が得られなかったので拡充を求める意見（13名）

- ・ 抽選にはずれてとても悲しいです。それだけです・・・
- ・ ポケット・ゼミの存在は入学前から知っており、楽しみにしていたが、抽選だとは知らなかった。抽選にはずれてとても残念だった。
- ・ 入学前にいただいた大学案内の中で、ポケゼミについて紹介されていて、入学したらぜひ受講したいと思っていたのですが、抽選にはずれ受講できなかったのが残念でした。希望者には受講できるようにして欲しいです。
- ・ 受講したかった。とてもくやしい。
- ・ 受講できなくて残念でした。
- ・ 定員がすくないとおもいました。
- ・ 開講授業はもっと増やせばいいと思います。
- ・ 開講数は十分と答えたが、面白いものならいくら増えてもいいと思う。
- ・ ポケット・ゼミのような授業形式がとてもいいと思う。
- ・ 後期にもポケット・ゼミが欲しい
- ・ 後期のほうが、授業の空きコマが増えるので、もし可能なら、1回生の後期にも実施してほしい。
- ・ 2回生とかのために来年実施してもよろしくて？
- ・ 2回生以上も受講できるようにするべきだ。

② 単位認定を求める意見（2名）

- ・ 卒業に必要な単位になるポケット・ゼミを増やしてほしい。
- ・ 私は工学部なのですが、B群科目のポケット・ゼミについても単位が認められれば良かったのと思います。履修のノウハウをあまり知らない1年前期のうちから、単位にならない科目を受講しようという気にはなれませんでした。

③ ゼミ内容に関する意見（3名）

- ・ 数学系のゼミが少なかったように思います。
- ・ 国文学に関するポケゼミがあればうれしいです。
- ・ 京都の建築物を巡るポケゼミがあれば良いと思う。

④ 広報の充実を求める意見（2名）

- ・ 普通の授業でもどんな感じが分からなかったのが、もっと詳しい説明をしてほしい。
- ・ 申込みの方法をもっとわかりやすく説明してほしい。

第4章 担当教員調査の結果

1. 設問別の結果

平成20年度ポケット・ゼミ担当教員の調査は、20年度に開講されたポケット・ゼミ144科目の授業担当者または授業担当責任者（複数教員担当科目の場合）を対象とするもので、112人の教員から回答があった（回収率77.8%。前回調査の回収率は68.4%）。設問は全部で11問からなっている。以下、設問ごとに結果を見ていく。原則として設問ごとに集計結果をグラフで表示し、小数点以下1桁まで（2桁目を四捨五入）の百分率を添えた。百分率の数字はいずれも有効回答数中のものであり、無答などを除いている。

Q1 先生が担当されたポケット・ゼミが属している群をお選びください。

平成15年度に行った前回調査と比べると、A群科目（人文科学及び社会科学系科目）が比率・人数ともに減少している。

逆に、B群科目（自然科学系科目）は、前回調査と比べると比率・人数ともに増加し、理系の教員が回答者の3分の2以上を占めている。

B群科目が多いことが、京都大学の文系・理系の学生数を反映していれば良いが、そうでないなら、今後は文系のゼミを増やすなどバランスをとる必要がある。

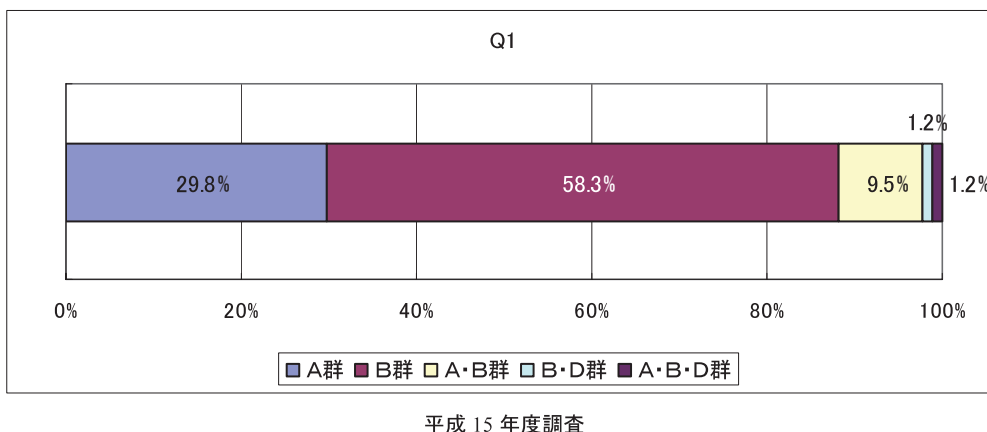
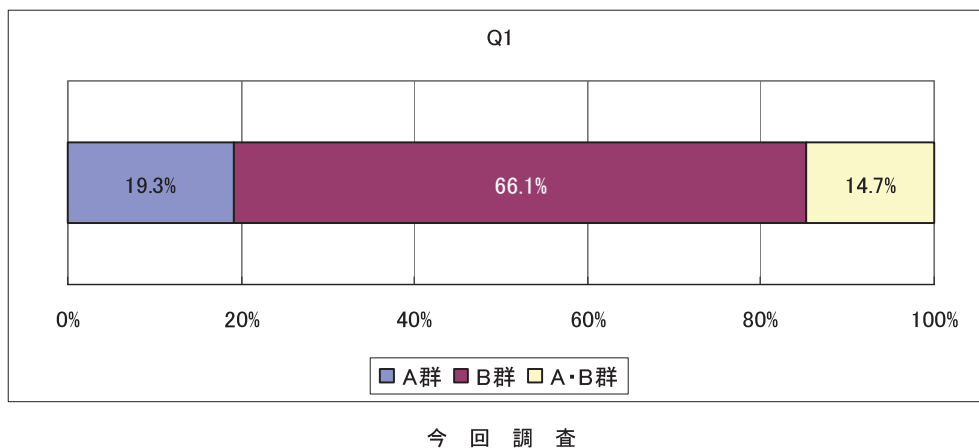
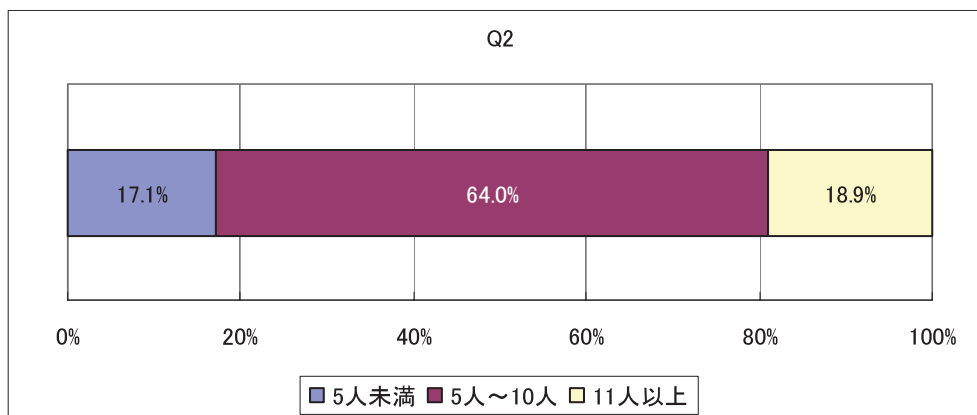


図4-1 担当ポケット・ゼミの所属群

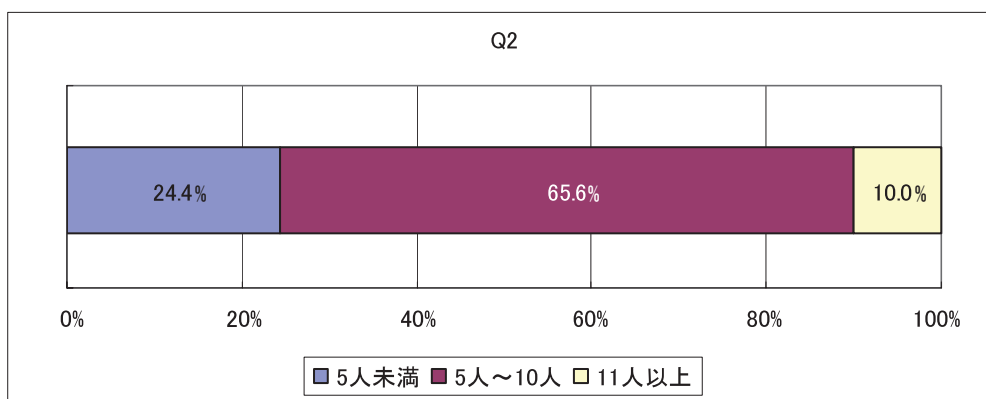
Q2 先生が担当されたポケット・ゼミの受講学生は何人ぐらいでしたか。

全体の3分の2が適正数（5-10名）であるのに対して5名以下の受講生しかいない授業も少なくない。追加募集について工夫はできないか検討する必要がある。あとのアンケート質問とも関連して、受講生数が少ないと教員側の満足度が低い傾向が見られる。

また、前回調査と比べて、1クラス当たりの受講生数が増えている傾向がある。



今回調査



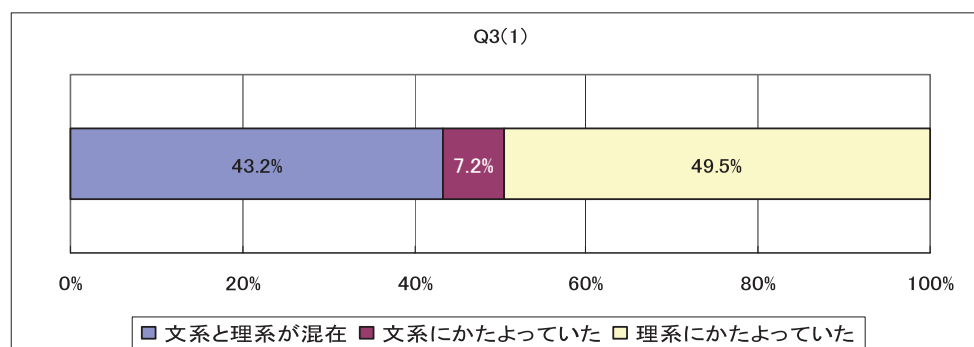
平成15年度調査

図4-2 担当ポケット・ゼミの受講学生数

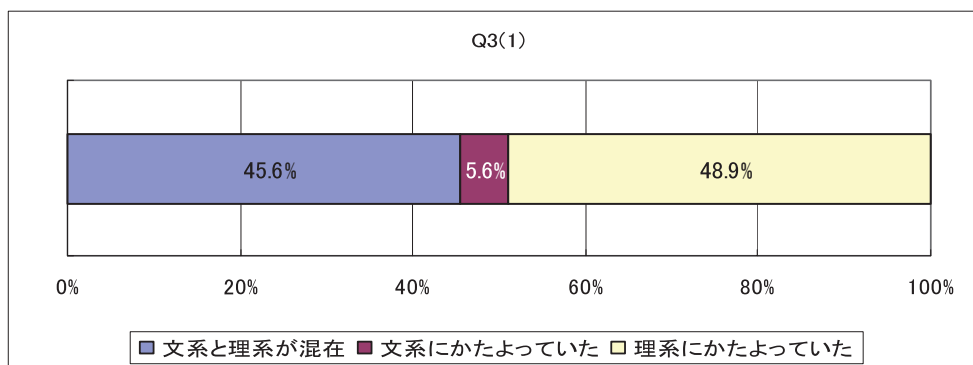
Q3 受講学生の所属（文系・理系）についてうかがいます。

(1) 受講学生の所属分布はどうでしたか。

提供科目のうち、B群科目、A・B群科目が約8割を占めているせいか、理系学生が多く受講している。これが京都大学の文系・理系学生の割合と相関していればよいが、そうでないなら是正の必要がある。文系学生に不満はないのだろうか？



今回調査



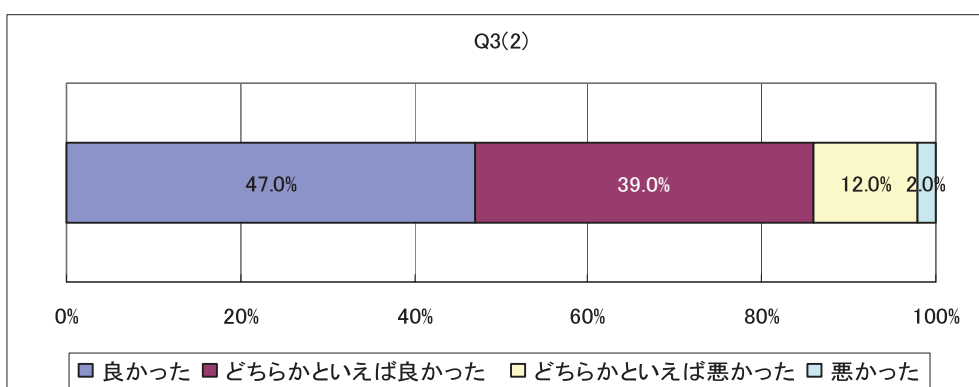
平成 15 年度調査

図 4-3 受講学生の所属（文系・理系）の分布

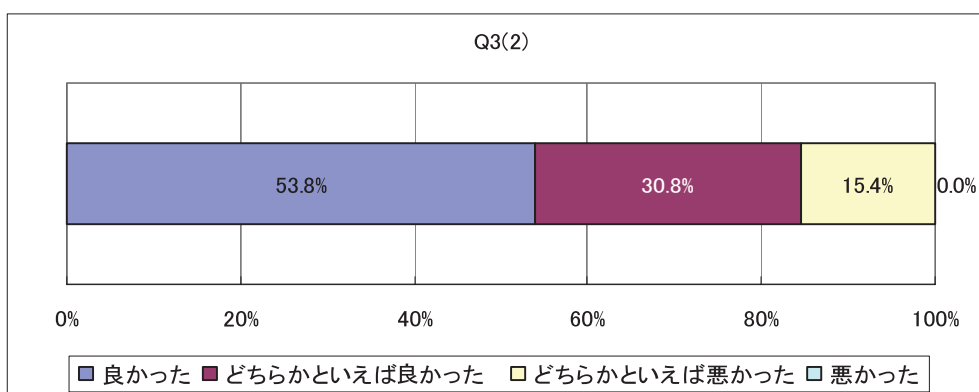
(2) このことは授業を行う上で良かったですか。その理由もお書きください。

授業担当者には、おおむね文理混合を好ましいと評価する方が多いようであるが、一部理系科目では文系学生への授業の難しさを感じた方もいるようである。一方、受講学生のアンケート結果からは、受講生のほぼ 4 割が授業を難しいと感じていることがうかがえる。

「悪かった」とした回答者は、前回調査では 0 名であったが、今回は、2%と少ないものの、ゼロではなかった。理由を書いた回答者がいなかったため、残念ながら具体的な理由は不明である。



今回調査



平成 15 年度調査

図 4-4 受講生の所属分布についての満足度

上記の設問で、理由が書かれていたものについて、その内容を Q3(1)と Q3(2)をクロスして作成したカテゴリ一別に以下に列挙する。

① 良かった（文理混在）

- ・文系と理系の学生は考え方が異なることが多いので、議論をしても興味深い。
- ・多様な意見が飛び交う。
- ・文理の考え方のちがいを交流によって認識できるようになったと考えられるので。
- ・新鮮な質問やコメントを受けることができた。
- ・教育・研究・社会貢献そして環境の問題を一元的に実施でき、私自身も刺激的な議論を満喫した。
- ・文理融合がひとつのテーマだから。
- ・多様な視点からの発言・発想があった。
- ・考え方の違いが明確に出て、ディスカッションが有意義であった。
- ・それぞれの興味関心、背景知識を前提にした多面的な議論ができた。
- ・多様な視点、意見をもった学生同士が議論することで奥行きのある理解が得られるから。
- ・様々な思考を持つ学生が交流できた。
- ・特に問題はない。多様な学生がいたほうがよい。
- ・幅広い分野の学生に講義することができた。（所属分野に関係のない講義を行っているので、どういう分布でもかまわないのですが）
- ・総合的に見る立場を教えることができた。

② 良かった（文系にかたより）

- ・「かたよっていたこと」が理由ではなく、メンバーが良い学生ばかりだったので。

③ 良かった（理系にかたより）

- ・大学の正式な授業なので、特に配慮してくれる見学先等もあるため。
- ・目的がどちらかという理系学生向けであったため。
- ・受講学生の数学の予備知識が同じである。
- ・内容が理系的思考を要する。
- ・生物・医学分野なので、少数の文系学生の混在が良い。
- ・以前、文系の学生も受け入れたことがあったが、基礎学力・知識の点で理系の学生とは明らかにレベルが異なり、ゼミについてくるのが難しかった。また、将来自分の専門には必要ないという点で、最後の一点で踏みとどまることができず、あきらめてしまう傾向がある。その点、理系の学生は、将来自分にとって必要であるという前提で勉強しているから真剣であり、追い込まれても、踏みとどまり、決してあきらめることがない。背水の陣をしいている。
- ・内容が理系

④ どちらかといえば良かった（文理混在）

- ・文系の学生の参加で、学生間の会話が促進。
- ・学生の視野が広がる。
- ・今回は生徒が皆、広い関心と優れた理解力の持ち主だったので、文理混在していることが、良い方向に作用した。
- ・将来目指している方向や得意分野が異なる学生同士がディスカッションすることで多様な内容の意見が出た。
- ・文系の学生が生物学を経験するのもよいこと。

⑤ どちらかといえば良かった（文系にかたより）

- ・歴史に関する基礎知識や関心がある学生が多かった。

⑥ どちらかといえば良かった（理系にかたより）

- ・内容が理系向きだったため、文系の人の興味を十分引き出すことが難しかった。
- ・数式を用いて説明しても理解してもらえた。
- ・基礎知識が同レベル
- ・理系を意識した講義ができた一方、文系の考え方をあまり知ることができなかった。
- ・レベルが揃っているので説明がやりやすかった。
- ・本来この分野は文系の分野だと思われがちだから。
- ・興味の方向性がある程度そろっていてやりやすい。
- ・基礎レベルが揃っていた。
- ・授業を進めやすい
- ・理系対象であり、基礎的な興味も必要なため。
- ・科学の基礎知識を有しているので説明が楽だった。
- ・理系の科目だから
- ・共通認識に立ちやすかった。
- ・メカニクスの説明を早く行える。
- ・予備知識に差が少ない。
- ・このゼミはどちらかといえば理系的な思考をするためのイントロダクションとなっているため、直接役に立つ学生が多くなるのが期待できた。

⑦ どちらかといえば悪かった（文理混在）

- ・知識と興味が不統一でやりにくい。
- ・基礎的知識レベルで興味がバラバラ。

⑧ どちらかといえば悪かった（文系にかたより）

- ・半々くらいのほうが、より多様な学生からの意見が出やすく、その結果、議論がより活発になると考えるから。

⑨ どちらかといえば悪かった（理系にかたより）

- ・文系の学生がいたら議論の幅がより広がったかもしれない。
- ・理系でも特に工学部の学生が目立ち、議論の内容に偏りが生ずるため。
- ・機械加工がテーマのゼミだったが、このようなものは、触れる機会が少ない文系の学生にこそ受けてほしい気がする。
- ・発想・考え方の異なる学生がいるほうがディスカッションには望ましい。
- ・現在、理：文=8:2程度であるが、理系・文系の交流を考える分野なので少し問題である。
- ・自然を見て感じる気持ちは様々で文系の学生もいてくれるとその感性に大いに助かる。
- ・文系の積極的な参加を望んだから。
- ・文系参加者の受講リアクションも見たかった。

Q4 ポケット・ゼミの担当は今年度で何回目ですか。

授業担当者のほぼ半数が1、2回目で、残り半数が3回目以上を担当してくれている。ポケゼミは平成10年度に始まっているので、「11回目」（0.9%）という回答は、これまで毎年欠かさず担当されたことを意味する。

また、「6回目」以上、つまりこれまでの半分以上担当された回答者も1割以上いる。

担当回数	%	人数
1回	29.1%	32
2回	22.7%	25
3回	14.5%	16
4回	13.6%	15
5回	8.2%	9
6回	3.6%	4
7回	0.9%	1
8回	3.6%	4
10回	2.7%	3
11回	0.9%	1
未回答		2
合計		112

担当回数	%	人数
1回	40.5%	36
2回	21.3%	19
3回	11.2%	10
4回	12.4%	11
5回	5.6%	5
6回	9.0%	8
未回答	—	2
合計		91

今回調査

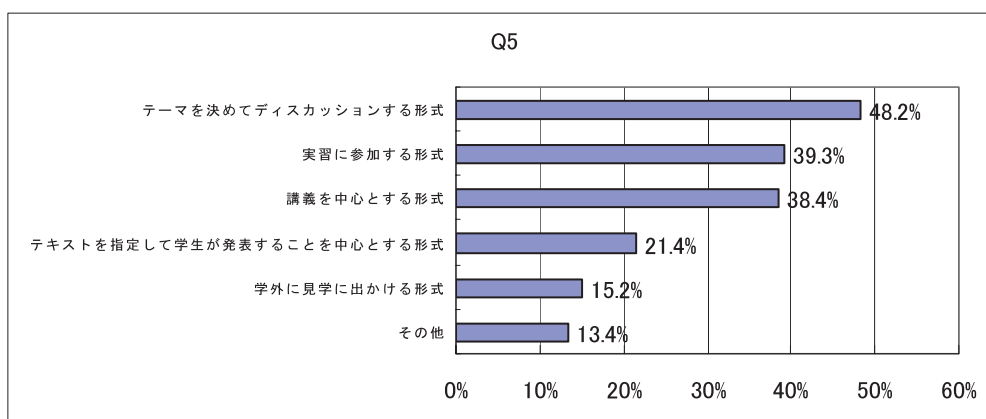
平成15年度調査

表4-1 ポケット・ゼミの担当回数

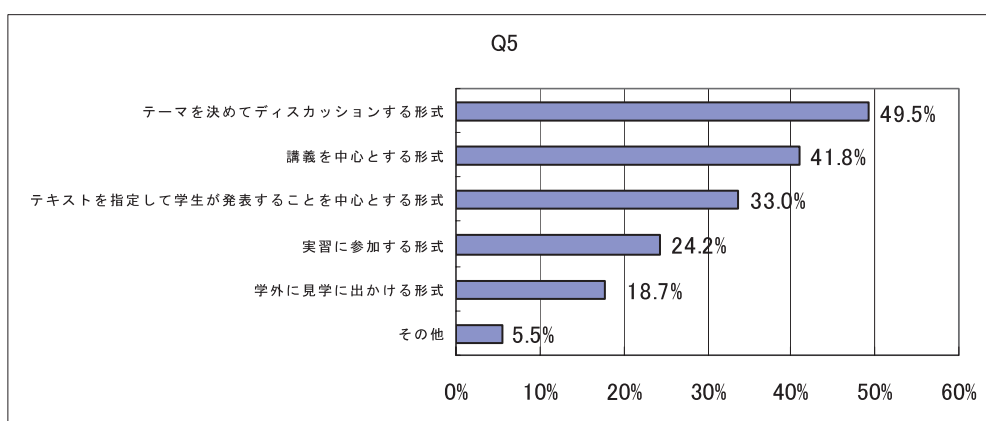
Q5 授業はどのような形式で行われましたか。（複数回答可）

結果は、図4-5に示される。単なる講義形態でなく、ディスカッションや実習参加、あるいは学生の発議を中心にするなど多様な形態で行われている。受講した学生のポケット・ゼミへの評価が高いのは、そうした授業形態にも背景があるようである。

また、学外見学の比率は前回調査と同様に高い。



今回調査



平成15年度調査

図4-5 授業形式の項目別選択率

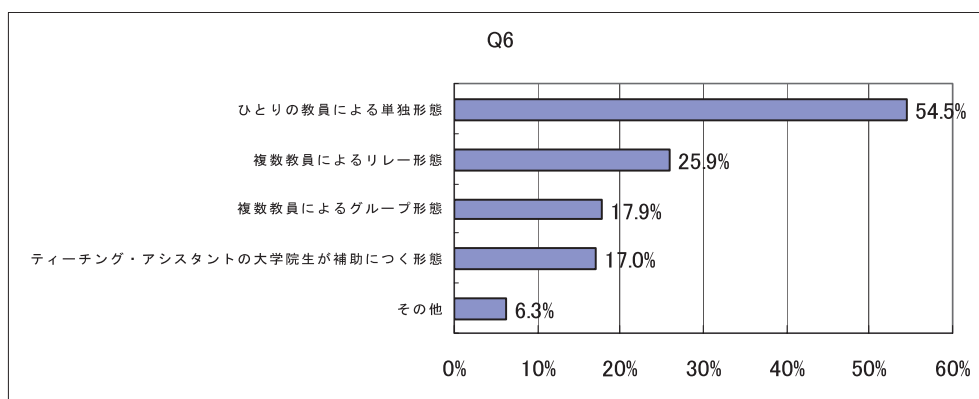
その他の内訳を以下に示す。

- ・ 学生がテキストを自ら選択し、かつ発表することを中心とする形式。
- ・ 指定した項目について学生が調べ発表する形式。
- ・ 外部講師を招いて話を聞くことも2回行った。
- ・ 前半講義、後半ディスカッション。
- ・ 学内の見学
- ・ 学生が各自選んだテーマについて調べて発表し全員で議論する。
- ・ 発表・講義・論文執筆を総合
- ・ 学外組織から講師をお招きし、フィールドの実態を話してもらい、その前後で事前学習と振り返りを行った。
- ・ 外の喫茶店を貸しきっての議論も実施。
- ・ 学生の自主レポート（問題演習）を添削し、返却することで学生の自学自習をサポート。このレポート添削に昨年度のゼミの受講生を TA として起用。彼ら自身の自学自習に役立てる。今回はじめての試みであったが、かなりうまく機能した。むしろ2回生のほうが良く勉強しているかもしれない。1回生も例年よりは encourage され、提出レポート数も多かったように思う。
- ・ 学生によるコンピュータプログラムの作成と競技。
- ・ 講義とディスカッション半々
- ・ グループによる調査実習
- ・ 担当者によってかわる。
- ・ 講義と実習

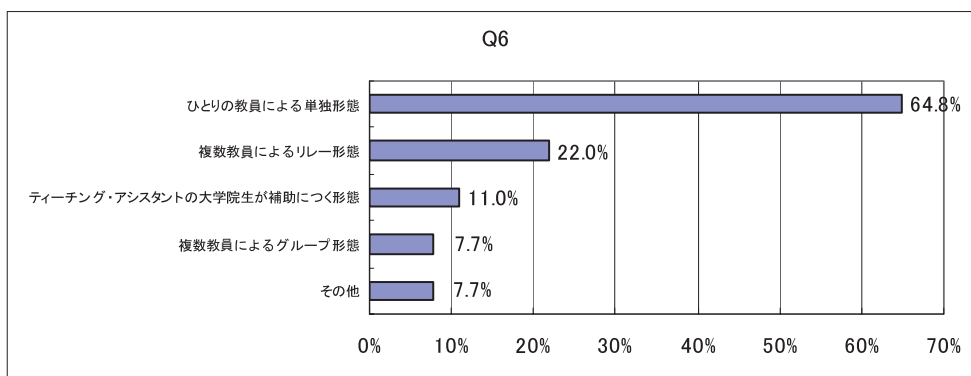
Q6 どのような担当形態で授業を行われましたか。（複数回答可）

結果は、図 4-6 に示される。約半数近くの授業が複数教員（あるいは教員+TA）で行われている。授業内容にもよると思われるが、複数教員による授業、特にリレー形式について、学生側の評価も聞いてみるとよいと思う。

また、「ひとりの教員による単独形態」が減り、グループや TA を活用する比率が上昇しており、組織的にポケゼミを提供している様子が伺える。



今回調査



平成 15 年度調査

図 4-6 授業担当の項目別選択率

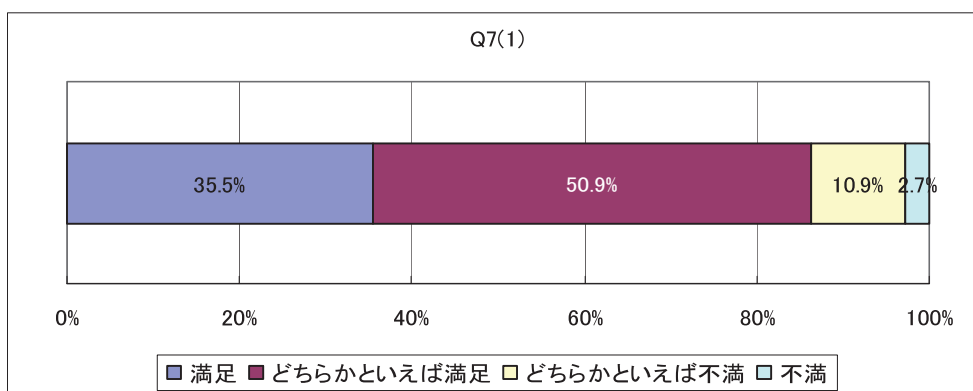
その他の内訳を以下に示す。

- ・学外組織等からの講師による授業の併用。
- ・拙著「歴史としての生命」について一回議論、また他部局の先生方を講師としてお招きし、専門について議論。
- ・実習には大学院生も TA として参加。
- ・研究室のゼミに混じった形態。
- ・教授・准教授・学振特別研究員、TA で指導
- ・実習、見学
- ・院生やポストクが補助

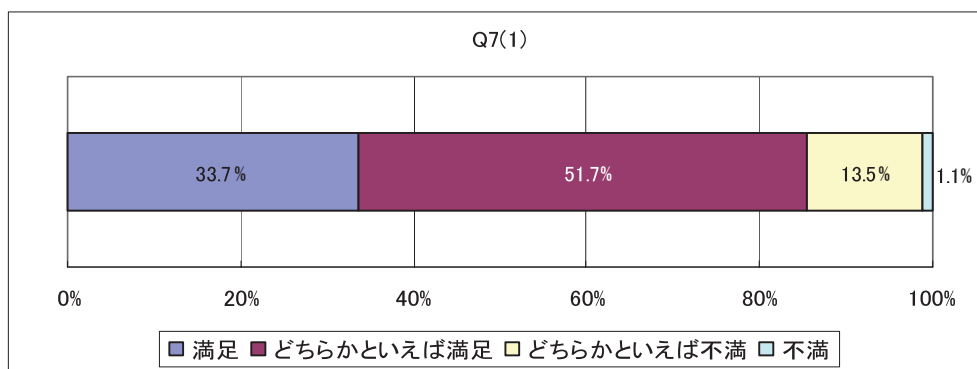
Q 7 今年度のポケット・ゼミを担当されてのご感想をうかがいます。

(1) 全体として、担当されたポケット・ゼミの教育成果に満足されていますか。その理由もお書きください。

結果は図 4-7 に示される。教員側の満足度は高い。教員が「満足する」のは学生からの反応がある場合のようである。対照的に「不満」の理由は学生からの反応がない、受講生数が少ないなどが理由となっているようである。対話形式をとるなど授業形態を工夫する必要があると考えられる。また、定員に満たなかった科目については追加募集が行われているが、さらに有効に機能するよう工夫の必要がありそうである。



今回調査



平成 15 年度調査

図 4-7 ポケット・ゼミの教育成果に関する満足度

Q7(1)の理由を満足度別に以下に示す。

① 満足

- ・大変充実した内容となり、学生のみならず、私自身が楽しかった。受講生にもタレントが揃っていた。
- ・学生の反応が良好で、熱心であった。
- ・学生の積極的な参加が見られた。
- ・学生の態度、考え方がだいぶ変わったのが成果。
- ・学生の反応も良く、回を重ねるごとに自ら考えているというような議論が増えた。
- ・それぞれの学生が毎回の課題に準備の上、自分の考えを述べた。
- ・新生生に集中的な演習をすることができた。
- ・最初から最後まで出席者が12～13人と変わらず、熱意が伺えたため。
- ・学生から分析能力、思考能力の向上に役立ったという感想があった。これは目指した目標である。
- ・過去の受講学生から、ポケット・ゼミから良い影響を受けたと聞いたから。
- ・学生さんの感想にあるように、学習の意義、意欲が向上
- ・気楽にみんなと話せた。
- ・学生による発表が充実していたから。
- ・学生が熱心。教員にとっても多くの発見があった。
- ・face to face の discussion ができた。
- ・受講生ひとりひとりの顔と名前を確実に覚え、そのレベルや個性まできちんと把握できるため、きめ細かい指導が行き届く。互いの信頼関係が深まり、質問や個人的な議論も多かった。こうした学生との関係は、場合によってはゼミ終了後も続き、ドクターコースへ進学した学生ともいまだに付き合いがある。いっしょに研究することになる予定の学生もいる。
- ・活発な議論で盛り上がった。
- ・一回生のやる気（学習意欲）とフレッシュな社交意欲とにこちらも刺激を受けた。
- ・学生が熱心に受講し、発表した。
- ・意識の高い学生と出会える。
- ・学生が積極的に参加したから。
- ・参加者の感想を書いてもらったが、いずれの参加者も喜びと満足が伺えた。
- ・学生の理解度の向上
- ・これまで持ったことのない経験をさせることができた。
- ・4ヶ月間を通じて学生の成長が顕著である。
- ・予定した学習内容がほぼ達成された。

- ・植物栽培に関する理解を深めることができた。
- ・学生の反応がよかった。
- ・もともと対象に興味を持つ学生が集まり、楽しく、かつ真剣に取り組んでもらえたと思う。

② どちらかといえば満足

- ・例年、のめり込むように熱心な学生が、本年度は残念ながらいなかったため、「どちらかといえば満足」
- ・個々の学生の質問にも答えることができる。
- ・学生からの積極的なかわりがあったことはよい。
- ・ゼミでの報告・討論のレベルがしだいに向上してきたから。
- ・「成果」を何で測るかによる。私は、意義ある見学先を認知してもらうことを重視しているので、その点では満足している。
- ・やる気のある学生であった。
- ・最初はおとなしかったが、徐々に発言するようになった点がおもしろい。
- ・興味ある人に教えられる。
- ・学生の熱意がうれしかった。
- ・自分で考えることを学ばせることができた。
- ・活発な議論ができた。
- ・テキストをはじめ古典や学問のおもしろさを理解してもらえたように思う。
- ・自分で調査すること、プレゼン能力が養われたため。
- ・専門分野の研究を一般の専門外の学生に知らせることができた。
- ・通常の授業とは異なるポケゼミができた。学生にもインパクトがあったように思う。
- ・生徒の出席率も高く、発表内容もまざまざであった。
- ・今までの経験により、小テーマの設定や学生の水準を考慮することが可能であった。
- ・実習や見学によって幅の広い教育を行うことができ、実務現場と触れ合うこともできた。講義時限を固定したため、柔軟な実習活動が行い難かったことが課題。
- ・受講生たちは概ね満足していると思われるが、こちら側の負担は大きく、得るものは少ない。
- ・もう少し時間があればもっと多様なテーマを扱えたと思うが、少なくとも生徒に普段考えないことを十分考えさせることができた。
- ・時間を気にせず、隅々まで指導。
- ・環境についての概ねの認識をしてもらうことができた。
- ・学生が内容に興味をもってくれるようになった。
- ・教員と学生に連帯感が生まれ、学生も積極的になる。
- ・通常の講義では教えられないことを知ってもらえたから。
- ・全体的に議論は活発であったが、テーマによっては教員による説明が多くなり、議論が低調になる場合もあった。
- ・少人数で全体に目が届くところがよかったが、前期だけで研究とはどういうものか理解してもらうのはなかなか難しい。
- ・物事を一面的に見て判断するのではなく、複眼的な思考・認識が必要なことを学んでもらったように思う。
- ・異なる分野の学生に異なる研究を紹介できたこと。
- ・学生が我々の研究に興味を示したこと。
- ・全員が最後まで熱心であった。
- ・学生が興味をもって熱心に受講していたので。
- ・森里海連関等をいろいろな学生に伝えた。
- ・学生が関心をもって講義に臨んでいた。
- ・文系・理系を問わず火山というあまり体験することのない場に京大の教職員が頑張ってい

るという面を見せることができた。

- ・こちらの意図を大概理解してもらえた。

③ どちらかといえば不満

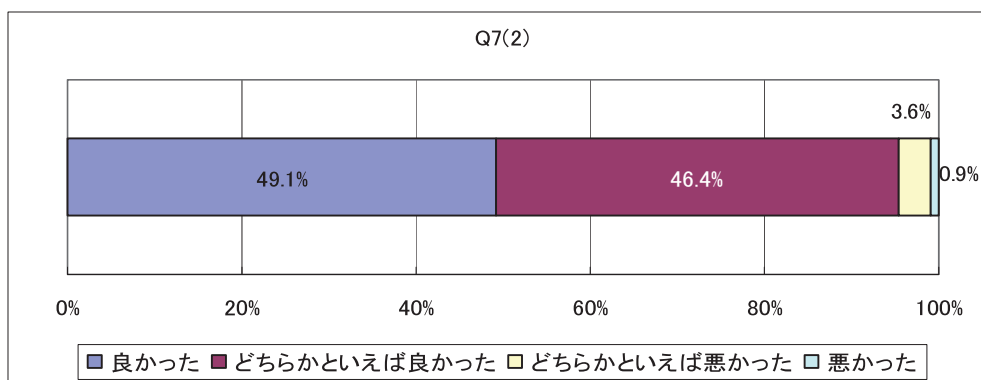
- ・もう少し基礎知識を勉強してもらってから集中的な知的訓練をするほうがよい。
- ・十分に学生と興味を共有できなかった。
- ・話が性急すぎた。
- ・人数が少なく、相互のディスカッションができなかった。
- ・学生による調査の指導が時間の関係でうまくできなかった。
- ・ポケゼミの教育目標が不明確
- ・どうしても過去の年度の人たちと比較してしまうが、今年は質問が少なく、話が発展しなかった。もう少し、授業の進め方を工夫すれば良かった。
- ・興味を持ってくれた学生もいたが、受講者が少し少なかった。
- ・受講生が一人だけであったこと。
- ・学事（試験）との関係で日程を変える必要が発生した。

④ 不満

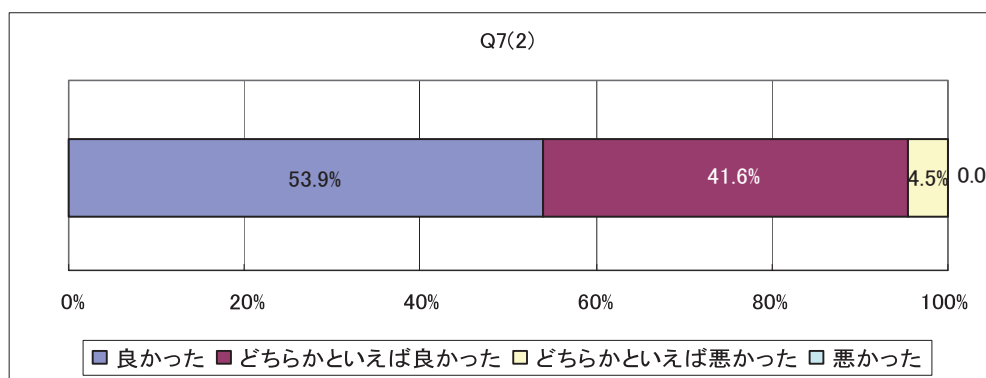
- ・良質のゼミを提供するには負担が過重であり、また、学生にとっては目標が見えにくい。
- ・集中講義の時期が不適當であった。また、課題が不明確であった。

(2) 学生の反応は全体としていかがでしたか。

結果は図 4-8 に示される。大部分は学生からの反応が良かったと感じている。講義中心の大人数授業では学生からの反応を感じるののは難しく、少人数ゼミの最大の利点であろう。上記 Q7(1)よりは満足度が高いといえる。



今回調査

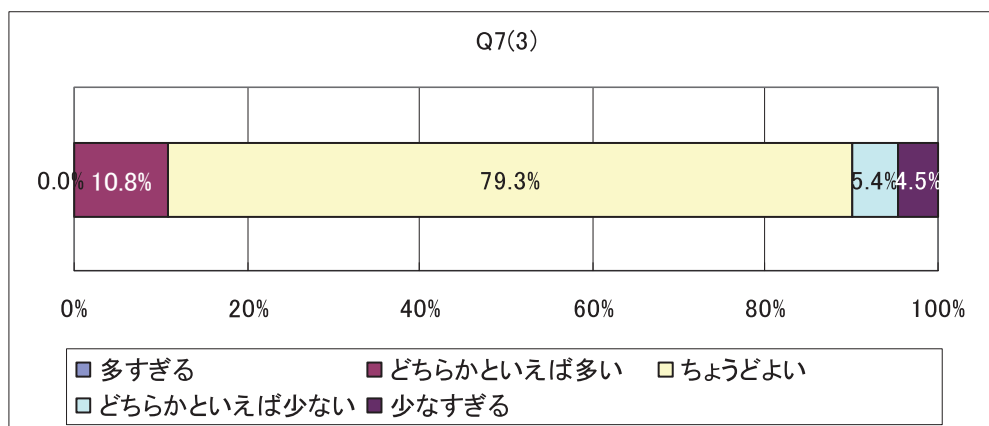


平成 15 年度調査

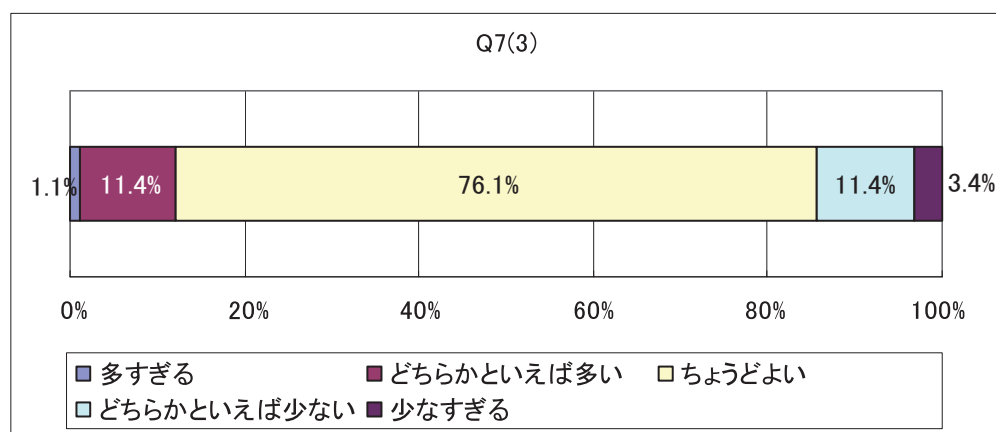
図 4-8 ポケット・ゼミの学生の反応

(3) 先生が担当されたポケット・ゼミの学生数についてはどう思われますか。

結果は図 4-9 に示される。受講調整が順調に行われているためか、今回は「多すぎる」と答えた回答者はゼロであった。逆に、「少なすぎる」と回答した教員の比率は、前回調査に比べて増加しており、「少なすぎる」「どちらかといえば少ない」を合わせると、1割は学生数が少ないと感じている。シラバスの工夫とともに、Q7(1)で述べたように、追加募集制度が十分機能するよう、改善方を講じる必要がある。



今回調査



平成15年度調査

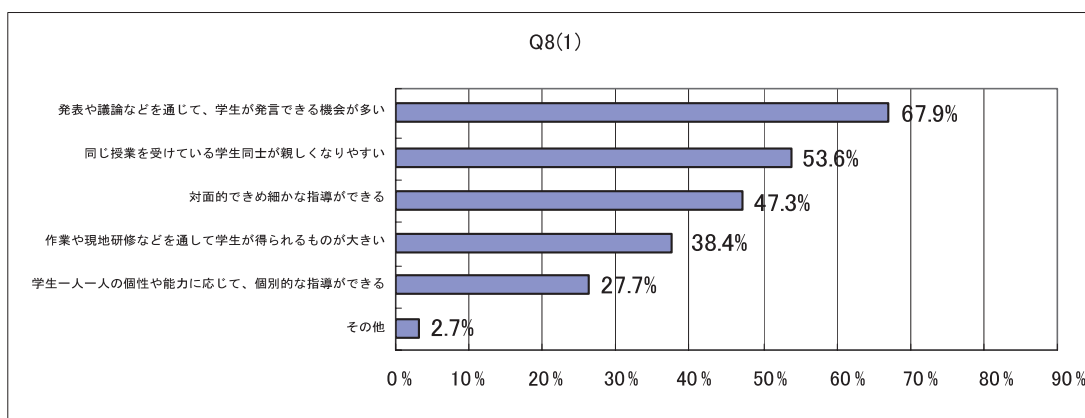
図 4-9 ポケット・ゼミの学生数

Q8 少人数制の授業形式についてうかがいます。

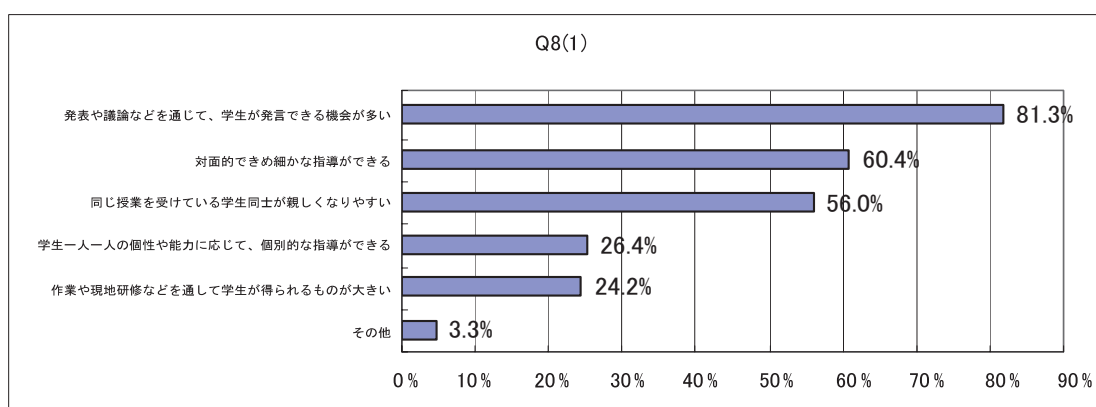
(1) 実際にポケット・ゼミを担当されてみて、学生にとって少人数の授業のどのような点がよかったですか。(複数回答可)

結果は図 4-10 に示される。授業担当者は、少人数の授業について、多様な価値を感じている。

前回調査と比べ、「発表や議論などを通じて、学生が発言できる機会が多い」と「対面式できめ細かい指導ができる」が減少し、「作業や現地研修などを通して学生が得られるものが大きい」が増えている。ポケット・ゼミの精神からいえば、前者が増えてほしいところである。



今回調査



平成15年度調査

図4-10 少人数授業の良い点についての項目別選択率

その他の内訳を以下に示す。

- ・学生が普段の大学の授業ではできない種類の発言（ふつうの意味でのアカデミックな言論からはみ出してしまうような領域での発言。）ができる。
- ・異なる専門（理系・文系問わず）を勉強するものが会える機会ができる。
- ・実験を行うことができる。

(2) ポケット・ゼミの中で、指導上特に留意されたことがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・自ら調べ、自らの言葉で報告すること。ネットや文献の引用情報の引用ルールを守ること。
- ・高校レベルでの知識に関連付けながら、話題を選択した。
- ・テーマを通して自然に親しみ、身の回りの環境の変化を認識させる。
- ・ルールと枠組みを明確に設定し、伝達すること。
- ・学生の知識（専門的興味）レベルを念頭に、共通的な部分での議論や意見を出やすくすること。
- ・学生の自主的取り組みを重んじるように努めた。
- ・学生にできるだけ発言させるように留意。
- ・学外見学なので、見学先への学生の貢献やフィードバックがあるようにすること。また、そうした役割を担っていることを学生が認識するように導くこと。
- ・柔軟に自由に考えるように。
- ・学生⇄学生、学生⇄教員のコミュニケーションの活発化。
- ・日本語からだんだん英語で話せるように進めていくアプローチをとった。

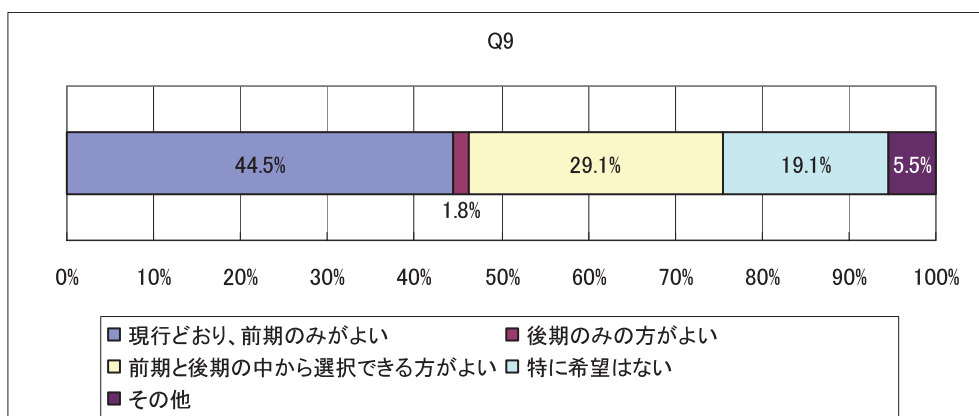
- できるだけ学生の考えを聞き、学生の関心に即するようにトピックを選び、話を進めた。
- 可能な限り平易に話す。
- 学生が主体的に資料収集して発言をしてもらうようにした。
- ディスカッション重視
- できるだけ学生の自主性を引き出すこと。生物学の基本的な概念、知識（の一部）に、講義等とは別ルートで親しむこと。
- 全ての学生が議論に参加できるように努力した。
- 学生が発言しやすい雰囲気になるよう気をつけた。表情表出映像の撮影→評定実験→結果分析→考察と研究の流れを体験できるように工夫した。
- 講義の内容や、学生の発言などを批判的に理解し、質問することに慣れるような進め方に留意した。
- 予備知識に学生間に大きな差があるため、基礎から説明した。そのため、一部の学生にはたいくつな授業もあったかもしれない。
- 自分で内容をまとめ発表すること。疑問点や論点を自分で考えてくること。討議に参加し、自分の意見をまとめて発言すること。
- 学生が学びたいことを逐次聞き、それに合わせて内容を変化させた。
- 双方向の授業をこころがけ、学生ひとりひとりの能力を引き上げるように努力した。
- 本人の意見や考え方を引き出すように誘導した。
- 高校までの学習とは違う学問・研究の在り方、行い方の香りがする授業。
- 講義の後、実際の研究室を見学した。
- 自分の意見を発表する機会を多く与える。
- 異分野交流、学際性、さらには社会との接点をつねに意識しつつ、自らの専門性についても意欲が向上することを目標とした。10月に行う国際会議“What is creativity?”の準備的導入ともなり、何名かの参加希望者が現れた。
- 気楽な雰囲気
- 教科書の内容だけでなく、より広い範囲での見地から問題提起することを考えた。
- 研究力、構想力のトレーニング
- 教員が「教える」のではなく、学生から「引き出す」ことに留意した。
- 学生自身による作業をできるだけ多くした。
- 授業の半分以上の時間は討論に充て、学生の発言を引き出すことに努めた。できるだけリラックスして、本音が出せるように配慮した。大学で学ぶことの意義や心構えなどについてとくに言及することに努めた。演習でのプレゼン、レジュメの書き方、レポートの書き方などに留意。
- 学生が自ら考え発言するようムードを作る。
- 1回生の文・理系両方を対象としていることから、できる限り難解な数式の利用を避け、概念を教えることに留意した。また、実習の機会を増やし、実学としての学問に触れさせるよう配慮した。
- 教員と学生の間がなるべく一方通行にならないように。また、学部の異なる学生同士のコミュニケーションが活発になるように。また、学年の異なる学生同士（昨年、一昨年のゼミの受講生との交流やレポート添削を通したやりとり）の交流を促進し、お互いに学問的な刺激を与え合い、互惠的競争を促すこと。
- 研究の先端や、研究所・研究室に触れさせる。実習により、一人ひとりが自分の手でサンプルを扱う。
- 個人の興味に応じた個別指導と発言の機会を確保すること。
- 学生が興味をもつ内容とする。
- 自前の wiki サーバを立ち上げて情報共有に使っている。
- できるだけ学生が発言するよう誘導した。1回生でもわかりやすいように説明した。
- 1. 一方通行の知識伝達を避けること。2. 生徒の発言を出発点にして議論を展開するこ

- と。3. 本質的な「問い」を発見させること。
- ・演習、実技を含んでいたため、安全面への配慮。
 - ・学生に発言させることを目標としているが、発言が特定の人にかたよっている。
 - ・1回生であることを考慮して、飽きさせないように、色々な話題を提供することをこころがけた。
 - ・学生のアイデアや興味を尊重すること。
 - ・本来学ぶことは楽しいことであり、大学在学中に自分が夢中になれることを見つけられるようにメッセージを伝えるように心がけました。
 - ・できるだけ学生とのディスカッションを多くとるようにした。
 - ・対面で行うことを重視している。
 - ・文理の基礎知識の差が有利不利になりすぎないこと。負担を多すぎないようにして研究活動への関心を高めることを主目的にすること。
 - ・初年度にあたる学生を対象としているため、大学での勉強内容にネガティブな印象を与えないよう特別に留意した。
 - ・講義だけでなく、簡単な実習を取り入れること。
 - ・スケジュールをタイトにせずに、学生と会話する時間を持つようにした。大学に入学したばかりなので、大学生活や講義に慣れるよう助言する等の工夫をした。
 - ・自然から学ぶ。特に奥深の体験。
 - ・各人ができるだけ自発的に意見を述べること。
 - ・発言の機会を多く与えること。すべて自分たちで行うこと。(食事、調査、山行きの装備)安全の確保。
 - ・各人が積極的に発表できるように心がけた。
 - ・学生の関心を重視し、それをサポートするよう心がけた。
 - ・学生全体が主体的に取り組めるよう、少人数のグループで調査実習をさせ、個人の意見や考えたことが表現しやすいように心がけた。大学院生との交流の機会をもつようにして、大学院生や研究を身近に感じてもらうようにした。
 - ・できるだけ双方向の授業をしたかったが、古典思想研究という性格上、やむを得ず講義(読解含む)形式の授業となってしまった。ただ、結論を与えるのではなく、研究していくプロセスとともに体験することで、古典の読み方、思想研究の方法について知ってもらうよう心がけた。
 - ・研究分野はいかに広いかを実感させる。
 - ・できるだけ専門過ぎない一般的内容にした。学生にできるだけ発表させるようにした。
 - ・学生の自主性、行動力を引き出すよう工夫している。
 - ・実際の家、建物が見せられること。
 - ・興味を持つきっかけを与えること。
 - ・文系と理系の学生が混在しているので、学術用語の説明に留意した。夏の野外実習なので、学生の健康に留意した。農業体験では、新しい農業技術(リモートセンシングなど)の実習を行った。
 - ・授業内容に関連する実用例などを紹介することで身近に感じられるようにした。実験等を入れながらゆっくりと進めるようにした。
 - ・常識を疑う重要性。
 - ・学生の基礎知識に合わせた講義内容の編成。
 - ・学生の自主性を重んじるあまり、課題が不明確になってしまった。
 - ・集中形式であったが、出発前に講義も行い、予備知識をつけさせた。
 - ・学生の男女比、安全安心対策
 - ・課題設定と複眼的思考の方法を修得させる。
 - ・ともかく体験することに重点を置いた。内容については大学院レベルであるが、理解より体験に重点を置いた。

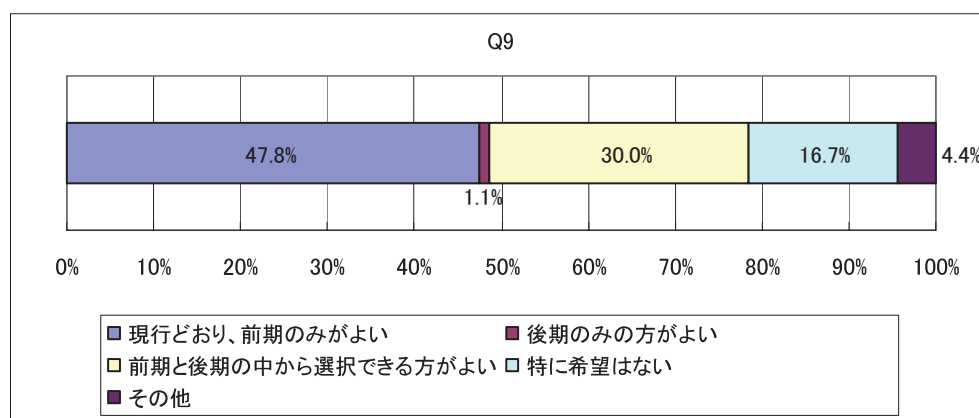
- ・なるべく多くの生徒に毎回発言してもらえようにした。
- ・自ら物事について考える能力を付け、自らの意見が言えるようにする。
- ・多様な学生がいるので、ドロップアウトしないように「楽しく自分の世界を広げる」という雰囲気になっている。しかし、今年は1名ドロップアウトしてしまった。（もう1名は体調が悪く、旅行に参加できなかったが、それは止むを得ない）
- ・受講生が実際に農作物を手に触れて栽培技術を学ぶように実習材料の準備を行ったことと、収穫実習が行えるような時期を選定した。
- ・現地を歩くので、交通安全には十分心がけた。
- ・食事は原則自炊とするなど、参加学生が協力し合う場面を意識して作った。
- ・「研究」の雰囲気を体験させる。「一般」では見られない、できないことでも「研究室」に所属しておれば、困難なくできること、見られることを体験させる。高校と大学のちがいを4月の時点でわからせることによって、大学での勉強がスムーズに行くことも留意したつもりである。
- ・最初から講義内容を決めずに、学生の興味・知識のバックグラウンド等を考えて話す内容やレベルを変えた。

Q9 これまでポケット・ゼミは、新生生に対して、学問へのモチベーションを与えるという趣旨から、前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思われますか。2または3を選択された場合、その理由もお書きください。

結果は図4-11のとおりであり、ほぼ前回調査と同様の傾向を示している。授業担当者のほぼ3割は後期開講を是認している。これは、学生の要望と合致している。



今回調査



平成15年度調査

図4-11 ポケット・ゼミの開講時期についての項目別選択率

ポケット・ゼミの開講時期についての自由記述の意見を以下にまとめる。

① 「1. 現行どおり、前期のみがよい」理由

- ・大学入学後のやわらかい頭にガツンと一撃。
- ・短期に集中できる。インパクトが大きい。
- ・新入生のフレッシュな時期がよいと思います。
- ・入学後半年間が最も重要である。
- ・ゼミのおわりにフィールド実習を入れるが、それが夏休みに入ってからだと都合が良いから。

② 「2. 後期のみの方がよい」理由

- ・大学生活そのものに慣れていないように見えた。
- ・1回生の場合、いきなりゼミ方式で行うととまどうかもしれない。

③ 「3. 前期と後期の中から選択できるほうがよい」理由

- ・現行の前期のみは、フィールド実習の時的制限（季節、利用時期）に対応できない。
- ・フィールド実習を加えたポケット・ゼミを行ったので天候の問題があるため。
- ・前期中心でよいが、都合で取れない学生に対しては、後期にもチャンスを与えるほうがよいかもしれない。
- ・長期出張の計画を立てやすい。
- ・学生の満足度が全体として高いなら、2科目選択できてもよいかもしれない。
- ・前期の他の講義を通して、興味に変化する可能性があるため。
- ・必修科目との関係から、選択できるほうが良いのでは。
- ・通年で受講したいという声は依然として強い。半期だけだとモチベーションが上がってきたところで終わりという感がぬぐえず、さてこれから **take off** するところでやめてしまう学生がかなりいるように思う。やはり長期にわたるサポートが必要。
- ・後期から授業を欠席しはじめる学生には、その防止になる。
- ・前期と後期に1つずつできる。
- ・前期（4月の選択）では、まだ大学の状況や、大学生としての生活がわからないうちの選択となっている。開始時期を遅らせても良いのでは。
- ・大学に入り、落ち着いてから、授業を受けたり、読書などで得た知識や知った事柄をさらに深めたい希望があるかもしれないので、それに応えたい。
- ・教員の中に、後期のほうが都合が良い場合がある。
- ・いろんな分野の授業を受けて、大学における学問のあり方をしってからのほうが、選択肢も高まり、また、教育効果も上がるのではないか。
- ・こちらの自由度があがる。
- ・スケジュールあわせが難しい。
- ・自然を対象とする場合、秋～冬でないに行えない内容もあるため。
- ・少なくとも2年生くらいまでは開放すべき
- ・次のステップを希望する学生もいるので、中級コースを提供したい。
- ・他講義との兼ね合い、選択肢の増加。

④ 「5. その他」理由

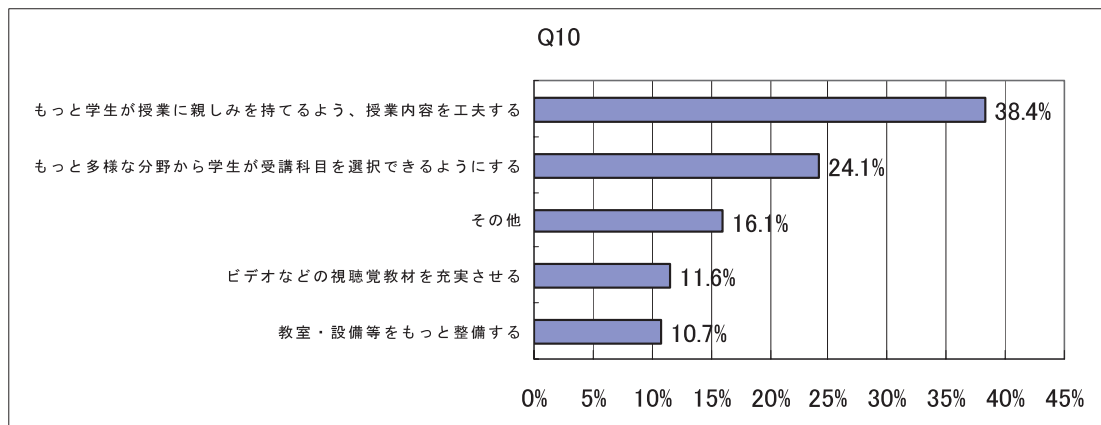
- ・もしも同じテーマでもう一度ポケゼミを担当するなら通年でやってみたい。学生たちの発表が大変充実しており、もっとふくらませることができると思われるから。
- ・学期期間外に行うのがよい。学外への見学などの時間設定が他の講義時間の制約のため難しい。

- ・単位は前後期別でもよいから通年でやるポケゼミがあってもよい。半期 10 回くらいで数学の本を 1 冊読みきくことはできない。
- ・1 年間通した開講が望ましい。学生の希望が多いことと、充実して教育が実施できる。
- ・ポケゼミの教育目標が不明確
- ・前期開講ですと、夏期休業の後半での集中講義がやりにくいので、後期配当で夏休み実施があってもいいのでは。

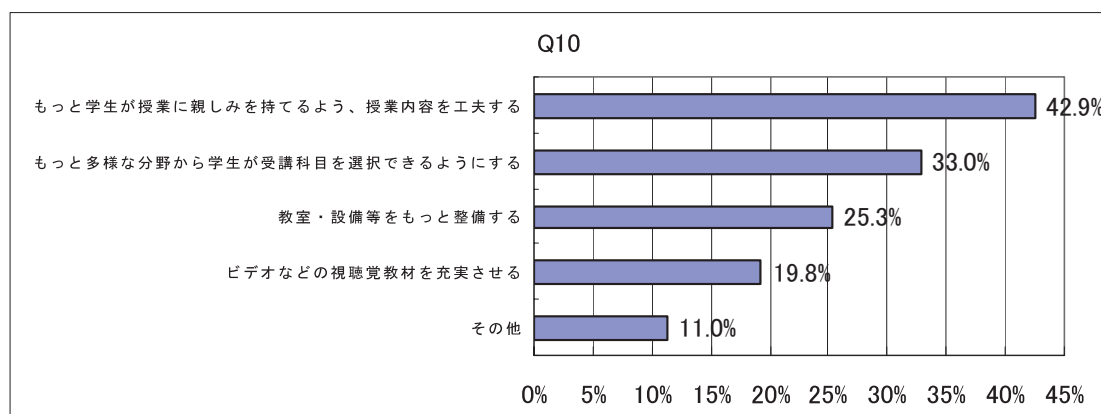
Q10 今後、ポケット・ゼミの内容をさらに充実させるためには、どのようにすればよいと思われますか。（複数回答可）

結果は 4-12 に示される。授業担当者の多くは、授業の工夫の重要性を感じている。しかし、一部には「専攻する学生の育成にもっと直結するように、受講生の範囲を限定することが望ましい」など、ポケット・ゼミの精神を全く理解していない担当者もいる。

「その他」と回答した授業担当者が増加し、「その他」以外は「もっと学生が授業に親しみを持てるよう、授業内容を工夫する」を除けば減少している。以下に示すように、「その他」の内訳は多様であり、今後充実させるにはきめ細かなサポートが必要であることを示唆している。



今回調査



平成 15 年度調査

図 4-12 ポケット・ゼミの内容を充実させる方策

その他の内訳は以下のとおり。

- ・専攻する学生の育成にもっと直結するように、受講生の範囲を限定することが望ましい。
- ・半期のみでなく、より長期の期間の開講とすること。
- ・学外見学には自主的に大学院生が数名参加している。1 年生と上回生の交流はなかなか機

会がないものなので、貴重な機会だと思っている。学年間交流的な工夫があってもよいかと思う。（見学の場合に限る。）

- ・外部講師を招くためやフィールド調査を行う小額の予算があるとよい。
- ・集中と平常授業を組み合わせることができれば、私の行っている授業に関してはより望ましい。
- ・毎年テーマを変えながら続けることが必要。数年ののちには、上級生から1回生まで幅のある議論の「場」になるのでは。
- ・TAを付けられるようにしてほしい。
- ・桂キャンパスでは授業が不可能。（道具は桂にある。）
- ・前期、後期、通年という選択肢があつてよい。学生の希望により後期も引き続いてゼミを続けるという選択ができるのが理想だろう。
- ・担当者のその他の負担を減らせる枠組みをつくる。
- ・野外調査等のポケゼミでは、TAを配慮すべきでは。
- ・宇治キャンパスへの交通の確保
- ・学生（+教員）の費用負担（野外旅費）の軽減。
- ・親しみを持たせようとするとうんざり、内容を充実させようとするとうんざり、興味のない学生にとっては厳しい内容となってしまう。今回は、初回であったため、さじ加減に失敗した。
- ・遠隔地で行うことが多い分野なので移動・滞在に関する経済的バックアップ体制を充実する。
- ・実習（旅行を伴うもの）の参加費を補助する。
- ・実習による集中講義のため、教員側が準備を充実させられるかどうかは鍵となる。
- ・このゼミについては自分でできるだけのことをすべてやっている。TA代の補助はやはり助かる。

2. 自由記述のまとめ

Q11 ポケット・ゼミについて、これまでの受講者へのアンケート調査結果からは学生の満足度が高いとされていますが、更に充実させるための方策など、ご意見やご希望がありましたら、ご自由にお書きください。

整理してみると、授業内容や実施方法（後期開講も含めて）に工夫が必要とする意見が多いが、授業を負担に感じたり、旅費、TA経費といった財政支援を求める意見も多い。

フィールド実習や、遠隔地のキャンパス、研究所等で行われる科目の場合、担当する教員の負担は特に大きい。平成16年度より、一科目あたりの定額配分に加えて、フィールドにおける学生実地指導に要した旅費、現地での諸経費等の経費支援が開始されているが、今回の調査結果においても、その必要性が裏付けられたといえよう。

フィールド実習や学外見学など、バラエティに富んだ科目が数多く開講されていることはポケット・ゼミの魅力のひとつであり、受講学生の調査結果においても、ポケット・ゼミに満足した理由として、「生き生きとした実地経験・直接体験」を挙げた学生が多く見られた。

今後、ポケット・ゼミを充実させ、学生の期待に応えるためには、フィールド実習等に対する経費支援をさらに進める必要があると考えられる。また、TA経費については、全学共通教育全体のTA配置計画の中で検討されることが望まれる。

自由記述の意見を、①授業内容、実施方法の工夫が必要とする意見、②経費支援に関する意見、③負担に関する意見、④その他に分けて全て記載した。一人の回答者が複数の意見を

書いている場合は、中心的意見と思われるものにより分類した。

① 授業内容、実施方法の工夫が必要とする意見

- ・教員が授業内容をさらに工夫することが、充実への最短路だと思います。
- ・ゼミの主体を学生に置くこと。教員が出過ぎないこと。通常の講義と異なる部分を出すこと。とにかく学生に「しゃべらせる」ことが大切と感じている。
- ・授業の一環として、どこかの段階で、一泊研修のような形で集中講義に近い形の授業のころみがあればよいと思う。一定の予算措置が望まれる。なお、後1回の授業は残しているが、これまでの11回の授業は、全受講生皆出席（欠席0）であることに、担当者自身が驚いている。
- ・上手にトピックを選択して、年齢の近い大学院生の人たちから直接、彼らの取り組んでいる研究について、語ってもらう様な時間を設けてもよかったかなと思っています。
- ・多様性が重要と思われる。
- ・担当者が固定化しないような工夫（隔年開講、複数人による担当など）をして、より多くの教員が参画できるようにする。
- ・ポケット・ゼミ制度はたいへんよいと思います。私の授業では、スポーツを行っている学生を対象としているにもかかわらず、クラブ活動や7大学戦の時期に集中講義を設定するなど、いろいろ失敗してしまったため受講人数が少数となってしまいました。また、どうしても甘い内容となってしまう傾向がありました。
インターネットから多くの情報を簡単に得ることができる時代に教師と学生が面と向かって何を伝えられるのか。私にとっては、とても厳しい試練でありました。様々な反省がありますが、もっと実習的要素を充実させればよかったと思います。高校では、実験・実習などを行っていないようなので、実物や実感を大切にしたいゼミにすべきであったと思います。今年は大失敗でありました。
- ・少人数であるがため、きめ細かく実地を伴った授業ができるメリットがある反面、受講できる学生の数が少なく、教える側からすると効果が大きくない。このジレンマを解消できたらよいのですが、あまり良いアイデアが浮かびません。①1年次に全学共通科目で概論を行う（例えば「きのこ学概論」（人数制限なし）とか）②2年次にその受講生の中から希望により、ポケゼミを受講する。（例えば「きのこ学ゼミ」（少人数）とか）などの二段構えにすればよいのかも知れません。
- ・簡単な実習的なこと、デモンストレーションなどをしようとしても、普通のセミナー室などで行うことは躊躇されるが、実習室は通常の実習で埋まっていてほとんど使用できない。研究室では少人数（3人くらい）しかできない。（このセミナーでは土曜日に1回出てきてもらって、あいている実習室を使用した。）特段の設備はいらないので、実習・実験的なことのできる講義室・セミナー室などがあることが増える。あるいは、普通の講義室・セミナー室でやってもよいことの指針があると助かる。抽選があった場合、何人希望があったかわかると良い。次年度の受け入れ人数をふやすかどうかの参考になるので。
- ・半期ではやや短い感じがした。（私の行ったものに関しては）大変熱心なのであと半期続けることができればと思った。ただ、一般論としては前期のみでいいと思います。
- ・1. 通年開講を実現して欲しい。2. シラバスに記入する際、入力容量が2ページしかない。これでは足りない。もっと必要。3. 昨年、本年ともOCWにて資料を公開する（している）。4. 学生のメールアドレスを昨年分も含めて把握したい。国際会議の連絡などに必要。5. 昨年は、「生命とは何か？」というテーマで開講。国際会議は"What is Life?"として開催本年度は"What is creativity?"というテーマで開催。6. 資料の一部を同封した。
- ・ゼミを受講する学生の所属部局に少し偏りがある。改善してほしい。
- ・KULASIS の受講者へのメール送信機能を使って、受講者と連絡を取っていたが、若干名メールを確認しない、メールが届かない（迷惑メールとしてフィルタリングされていた模様）等のトラブルがあった。入学時ガイダンスでの周知を徹底していただくようお願いす

ると共に、メール以外での連絡手段（担当科目連絡用掲示板を KULASIS 上に作るなど。メールを確認しないものも、KULASIS のチェックは行っている模様。）をフェール・セーフとして用意していただくと安心である。

- ・ゼミ受講者が全員受け入れられるような、十分なゼミ数、教員数を確保する。泣く泣く受講をあきらめたり、抽選でおちたり、受講したいが、人数が多そうなので自分の意に沿わない第2、第3希望をあえて希望したり、学生は色々考えて対応している。くだらない政治的駆け引きを考えるとなく、本当に自分がやりたい分野のゼミに、純粋に学問的興味から参加・受講できるようなシステムが必要。その一つの解決法が、後期も受講できるようなシステムか？
- ・90分では少し短いと感じるが、いろいろな制約から延長できない。
- ・ポケゼミ・OB・OGのフォローアップをサポートするようなシステムがあるとよいのではないだろうか。
- ・通常の講義室や演習室ではなく、研究室の活用が望ましい。桂キャンパス移転後、研究室を使えなくなった。
- ・学生から新入生へのポケゼミのガイダンスをする。（数が多いので、選ぶのが難しい。）
- ・私のゼミの場合。最後の旅行が最も人気があるのですが、授業や試験期間を外すと、実施できるのはほぼ決まっており、これ以上ふやすことはできない。1週間程度通常の授業のない期間を設定していただければ、もっとやりやすくなる。
- ・ポケット・ゼミに来る学生は意識が高いが、それでもまだ受身である。例えば、後期、2回生には自主ゼミを奨励するようなさらにステップアップするプログラムを示してはどうか。私が学生のころにはあちこちで目に付いた自主ゼミという言葉を目にしなくなって久しい。

② 経費支援に関する意見

- ・外部講師を招くためやフィールド調査を行う小額の予算があるとよい。
- ・国内調査と一緒に行くときの費用などが事前に申請できるとよい。
- ・TA 経費をつけて欲しい。（今は自費でやっている。）
- ・見学に行くときの交通費を早く払ってあげたい。
- ・隔地にあるので、せめて半額でも交通費がでるとよい。
- ・合宿形式（自炊）のポケゼミではどうしても一回生への配慮から、大学院生のTA（男女）が必要です。また、野外実習の場合にも安全の確保のために必要不可欠だと思っています。昨年には、3年前（2004年度）のポケゼミメンバーが4回生版のポケゼミをやってほしいと申し出がありました。集まって酒を呑みたい部分もあったようですが、文系の学生は就職も決まり、最後にもう一度芦生に行きたかったようです。
- ・学内バスがしばしば満席で学生が交通費を自己負担している。また、ゼミ終了時刻には、連絡バスがなく、帰りは常に交通費が自己負担である。上記の理由で、ゼミ受講をあきらめている学生がいないとも限らない。
- ・実習に対する財政的支援があるとよりよいものになる。
- ・開講時期に自由度を与える。学外見学機会を充実させるための費用等の支援。（交通費等）技術職員等の専門的知識、技術を持つスタッフの参画の機会の増大
- ・隔地でポケゼミの集中講義を行っています。宿泊施設の面で充分とは言えず、この委員会からも隔地施設の宿泊施設の重要性を時計台に要望してほしい。（もちろん我々のサイドも機会があるたびに要望していますが。）
- ・霊長研は犬山市という遠隔地にあるので、学生がもっと気軽に来れるような交通手段や補助を出してほしい。学生諸君も機会があればもっと来たいと言っていた。

③ 負担に関する意見

- ・学生はやる気があり、いろいろおもしろい試みができそうであるが、いかんせん仕事が増

えすぎてきちんと準備をやり切れなかったのが残念である。専門、全学を含めて、担当者の負担が軽減されるよう総合的な枠組みが必要。たとえば、ポケゼミの開講数カウントを2倍相当にする、など。難しいとは思いますが、現状ではいくらお題目ばかりとなえてもどうしようもないですし、それは悪化の一途を辿っているようです。たとえば、この封筒をあけることができたのは、全て授業が終わってからでした。ようやく山積みの書類をひもといてみつけたものです。よって受講生へのアンケートは実施できませんでした。そもそも面倒な KULASIS を強要するなら、こういうのも含めて全部そっちでやってほしいですよね。（そうでなければ全部紙に戻すか。）

- 学生にとってプラスであるのは間違いないが、雑用等が増えている現状では、教員の負担が大き過ぎる。
- 提供科目数が不足しているなら、学部等の単位で必須提供数を決めて、出してもらうしかないだろう。ボランティアで行っているのが現状で、負担は大きい。まじめにやると、特に負担が大きい。義務で提供することにさせると、ポケゼミ全体としては「手抜き」ゼミも増えてしまうのは確実だから問題もある。受講希望者が定員をオーバーした時のこと。現状では無作為抽選のときに限って、第2、第3希望のゼミを受講できる可能性があり、教員が選ぶ場合はその可能性がない。教員が選ぶ場合にもダメだった学生が第2、第3希望にまわれるようなシステムにできないか。あるいは、第3までとってまだ定員を満たしていないゼミ名を公開して、2次募集のような形の募集を行うのはどうか。TA 代や消耗品代の補助、旅費（教員の）の支給はやはり助かる。ぜひ今年もお願いしたい。

④ その他

- 基礎学力とは別と考えたほうが良い。現状でよいのでは？
- 現状を改善していくのでよいと思います。
- 単位数が多すぎるように思う。他の講義科目と異なり予習・復習の時間がそれほど多いとは考えにくいので、ポケゼミの単位数を大幅に減らすのが公平性の観点から見てよい。たとえば、MIT の IAP ではゼミが組まれているが、実施期間は1学期と2学期の間の講義のない期間（1月）であり、単位数も講義科目に比べて大幅に少ない。
- ポケット・ゼミ終了後も、なんらかの形で指導（関係が維持される）できるような"POST LECTURE"のシステムがあればよいと思います。
- 授業時間の設定のためか、一部の学科の学生が多くなった。まんべんなく色々な学科の学生が参加して欲しいが、時間割上難しいと思う。

第5章 まとめ

これまでの章において、平成20年度におけるポケット・ゼミの受講学生（第2章）、非受講学生（第3章）、担当教員（第4章）それぞれのアンケート結果について、主としてデータそのものに語らせる方法でその特徴を述べてきた。本章では、これらの分析をふまえ、調査結果全体からうかがいあがる主な特徴と論点および課題をとりまとめてみたい。

第1章で現行制度がもつ諸課題が整理されているので、ここでは主に意義と成果に焦点をあてて述べることにしたい。ポケット・ゼミがかかえる諸問題の解決策は、何よりもそれが実らせつつある教育実績を真正面から見つめることを通じてこそ工夫しうるものと考えからである。

1. ポケット・ゼミの成果と可能性

何よりも、受講学生・担当教員双方の満足度が、高かった前回はさらに上回る高水準を示したことに注目したい。「満足」と「どちらかといえば満足」を合計すると、受講学生の場合は88.9%から94.0%へと上昇し、担当教員の場合は85.4%から86.4%へと高水準で推移した。この傾向は「満足」のみをみればさらに明瞭であり、受講学生では54.3%から63.6%へ、担当教員では33.7%から35.5%へと上昇している。開設科目数が150に近く新入生の半ば近くが受講する巨大科目において、これだけの高い満足が示されたことは、驚くべきことといえよう。

受講学生からは、「第一線の研究成果にふれた」「調査・研究現場を目にできた」「教員と膝をまじえて話し合えた」「学部をこえる討議ができた」ことなどを歓迎する意見が相次いだ。1回生前期だけでなく後期にも、さらには上回生になっても受講できるようにしてほしいとの要望も多数提出された。反対に、受講できなかったことを残念もしくは不満だとする意見も多かった。

担当教員からは、「熱意がうれしい」「反応が良好」など学生の参加姿勢を評価する声とともに、「私自身が楽しかった」「互いの信頼関係が深まった」「文理融合のディスカッションが有意義だった」「刺激的な議論を満喫した」「教員にとっても多くの発見があった」など、教員自身にとってもよい経験であったとする意見が多数よせられた。

もう一つ興味深いデータに、「学生からみた担当教員の熱意」がある。「非常に熱意が感じられた」と「かなり熱意が感じられた」の合計は平成15年度の89.2%から96.0%に上昇し、なかでも「非常に熱意が感じられた」とするものは33.5%から46.8%に著増した。これは先にみた学生・教員双方における「満足度」の向上に対応するものであろうが、少人数教育が教員の熱意をかきたてる効果をもっていることを示すものでもあろう。

以上より、新入生のための導入教育として開設されたポケット・ゼミは、目的どおり学生たちのモチベーションを刺激しそれを維持・成長させるうえで大きな成果をあげているのみならず、教員に対しても場合によっては「教育への開眼」すらもたらすという「想定外」の効果を生んでいると見てよさそうである。そしてこれらのことは、ポケット・ゼミが当初目的をこえて、大学教育全体を考え直すための「大きな実験」としての性格をあわせもってきていることを意味しているようにも思われるのである。

さらに「入学前からポケゼミのことは知っており、入学したらぜひ受講したいと思っていたのに、抽選にもれ残念だった」とするものがいたことにも注意を払いたい。すでにポケット・ゼミは、京大に対する受験生の期待の一部を構成していることを示しており、かかる意味において新たな段階を迎えていると見てよいと思われるからである。

2. 受講希望者を可能な限り救うために

「新入生に必要な導入教育」という位置づけに基づき、希望者に対し可能な限り受講機会を提供することは、当初より最大の課題として位置づけられていた。しかし平成15年度において40.3%であった受講許可率は20年度においても45.7%にすぎず、わずかに改善されたものの未

だ半ばにも達していないという現状がある。受講許可率を引き上げることは、依然として最大の課題であり続けているのである。

この問題の根本的な解決策は開設科目数を大幅に増やすこと以外にないが、教員の自発性に依拠するボランティア科目であるという性格上抜本的な対策はとりにくく、平成 15 年度の開設数 134 に対し 20 年度は 148 の微増に終わっている。このような状況にかんがみ、各部局には開設科目の増加をお願いするだけでなく、あわせて次のような手立てを講じた。①要請があればセミナー室を確保・提供する（平成 20 年度より）。②助教の科目開設を認める（同）。③前期開設数の維持を前提に後期開講を認める（同 21 年度より）。①は、現行定員が 3・5 名程度の小規模ゼミの定員を 10 名前後に増員できるようにするための措置である。これまでボランティア科目という性格上教員の自室を使うことが前提とされてきたが、理系の教員室は狭いため定員を絞らざるをえない場合があったことへの対処策である。②③は、いずれも開設科目数を増加させるための手立てであり、②はボランティア科目という特性を生かして助教層まで担当者の範囲を拡大したものの、③は後期であれば担当可能な教員の参加を得るための措置である。

後期開講の「試行」について付言したい。これは上述のように、最大の懸案事項である開設科目数の増加に寄与することを意図したものであるが、今回あえて「試行」ととどめたのは「導入科目だから前期でなければならぬ」というこれまでの議論を尊重する必要があるからである。今後の実績を見ながら、本格的な後期開講の可能性を検討していく必要があると考えている。

なお、平成 16 年度よりフィールド実習や遠隔地キャンパスでの授業に対する財政的支援が措置された。間接的ではあるが開設科目の増加を支える条件となっていると考えられ、このような側面からのバックアップが引き続き考慮され具体化されていくべきであろうと思う。

3. ボランティア科目¹であることのメリットとデメリット

1. でみたような少人数教育のもつ魅力には、多分にボランティア科目であることの積極面が反映されていると考えられる。「自らの意志に基づいて担当し、内容を自由に工夫できる」ことが教員の積極性を引き出し、学生にはそれが教員の熱意として伝わり、膝をつきあわせて直接対話できる少人数のセミナーという制度的特質と相乗して高い満足度を生んだようにみえるのである。また、逆説的な言い方になるが、強制力を欠いたボランティア科目であるにもかかわらず 150 に近い多数が提供されたこと自体が、ボランティア科目であることの強さを証明しているともいえよう。もちろん部局レベルでみれば、デューティ科目に準ずるものとして取り扱われ割り振られているという実情があるが、参加する教員個人のレベルでみれば、自らの意志に基づき内容上の自由度は 100% 確保されたものとしてあることは間違いない。

以上のように、ポケット・ゼミの成果の大きな部分がボランティア性によって支えられていると考えられるが、次のステージをめざすには、かかるボランティア性を大切にしつつ、「ボランティア科目」という位置づけのもつネガティブな側面にも注意をはらうべきだと考える。

それは、ポケット・ゼミが新入生の期待にこたえるためには、さらに多くの教員参加を必要としていることに関連する問題である。教員の多くはいわば許容限度をこえた多忙さのなかにあり、「時間があれば担当したいが、なかなか決断できない」という状況が一般的であるように思う。多忙ななかでさらなる自発性を引き出すために必要とされる第一は、本冊子が明らかにしたようなポケット・ゼミの意義と面白さを十二分に伝えることであるが、それとともに、現状ではわずかではあるが、フィールド実習や遠隔地キャンパスでの授業に対する財政的支援およびセミナー室の確保など種々のサポートがあることを周知させる必要がある。そして何よりも、実際の教育実績の大きさに見合う適切な評価をあたえ、負担をいとわず担当していただいた方々をエンカレッジすることが大切であろう。「ボランティア科目」という表現には、ともすると<大学教育に

¹ 前調査報告である「新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題—平成 15 年度アンケート調査報告—」では「ボランティア科目であるということ」の意味は、「①教官個人の自発的な意志による参加、②教官の自由な発想で授業が設計される、③教官の負担コマ数にカウントされない、④全学共通科目としての審査を受けない、といったことである」としている（66 頁）。

とっては副次的・周辺の>というニュアンスが含まれ、その結果教員の教育活動実績にふさわしい評価を与えない傾向をうむおそれがある。教員のボランティア精神をより豊かに引き出す「力」をもった位置づけを工夫することが必要であろう。

4. 大学教育再構成にむけての参照系として

手元に『アンさんどこ行きはなの？—アンナ・カレーニナという生き方—』と題する大部（A5版 296頁）の冊子がある。これは「2004年度ポケット・ゼミ『アンナ・カレーニナ』を読む」（若島正文学研究科教授）に集った文・経・総人・理・医・農の10名の学生がその後もディスカッションを継続し卒業の年2008年4月に刊行にこぎつけたものである。新入生の導入教育であるポケット・ゼミの成果が大部の冊子にまとめられたこと自体が素晴らしいが、学部を異にするメンバーがゼミ解散後卒業に至るまで交友を継続してきたことも驚きである。メンバーの一人はポケット・ゼミの効用を、「教員と近い距離で話ができること、教員室に集えることが嬉しかった。毎回相当大部の割当があったがみな熱心にこなした」といい、「大学というところは“学問をめぐる人間関係”をつくる場所だと思う。このような関係ができて“大学の中に居場所ができた”と思え、これがその後の力の源となった」という。

この事例は、導入教育としてのポケット・ゼミの意義を極めてクリアに示しているが、卒業に至るまでこの集まりが持続したこと、大部な「研究」書をまとめあげたことなどにおいて、導入教育の枠をはるかに超えた内容をもっている。そして、「ボランティア精神に支えられた“学問における人間関係”」が、これらのアクティビティを生み出す原動力となっているところに注目したい。

もともと教育にボランティア精神は不可欠であり、ある意味では本質的な部分であるともいえる。その点で、ボランティア精神を真正面に掲げたポケット・ゼミの取り組みとその成果は、導入教育としてのそれにとどまらない射程を有するものであるように思われる。1.で「大学教育全体を考える「大きな実験」としての性格をあわせもっている」と記したのはこのことを指している。上記事例は、京都大学のめざす教育理念である「自学自習」の、一つの興味深いあり方を示しているともいえるであろう。その意味で、ポケット・ゼミが積み上げつつある諸経験は、少人数教育部会における閉じた議論に終わらせず、より大きな視点から検討を加えることによって、大学教育全体を再構成するための参照系を生み出す貴重な素材になるのではないかと思われるのである。

新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）に関するアンケート

ポケゼミを受講した学生対象

全学共通教育システム委員会
教養教育専門委員会少人数教育部会

このアンケートは、新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）を今後、より充実したものにしていくなため、受講された学生のみなさんの率直なご意見をうかがうものです。氏名や学籍番号を記入する必要はありませんし、回答は統計的に処理されますので、プライバシーは完全に保護されます。もちろん成績評価とは一切関係ありません。京都大学の教育改善のため、ご協力よろしく願いいたします。

なお、アンケート用紙は、添付の封筒に入れて密封し、担当教員に提出してください。

記入上の注意

1. 特に指定のない限りは、**最も当てはまると思う項目 1つだけ**を選び、番号に○をつけてください。
2. 設問の終わりに（**複数回答可**）と書いてある場合は、いくつでも○をつけていただいて結構です。
3. 答えたくない設問があれば、無理にお答えいただかなくても構いません。
4. 2 ページの一番上の「整理番号」欄には何も記入しないでください。

整理番号	
------	--

Q 1 あなたの性別を教えてください。

1. 男 2. 女

Q 2 あなたの所属学部を教えてください。

総合人間学部所属で専攻がまだ決まっていない方は、現在の時点での志望を教えてください。

1. 文 2. 教育 3. 法 4. 経済 5. 理 6. 医
7. 薬 8. 工 9. 農 10. 総合人間 (文科系) 11. 総合人間 (理科系)

Q 3 あなたが受講したポケット・ゼミが属している群を選んでください。

1. A群 2. B群 3. A・B群 4. B・D群

Q 4 あなたが受講したポケット・ゼミの授業開始時の受講者は何人ぐらいでしたか。

1. 5人未満 2. 5人～10人 3. 11人以上

Q 5 あなたが受講したポケット・ゼミの希望順位は何番目でしたか。

1. 第1希望 2. 第2希望 3. 第3希望 4. 追加募集

Q 6 このポケット・ゼミを受講することにした理由を教えてください。 **(複数回答可)**

1. 履修案内に書かれている内容を見て関心を持ったから
2. 担当教員に関心があったから
3. 所属学部の専門以外の学問に触れたかったから
4. 所属学部の専門課程での勉強に役立ちそうだったから
5. 曜日・時限が履修に都合がよかったから
6. 集中講義だったから
7. その他 ()

Q 7 ポケット・ゼミを受講しての感想をうかがいます。

(1) 全体として、ポケット・ゼミの授業内容に満足していますか。 **その理由も書いてください。**

1. 満足 2. どちらかといえば満足 3. どちらかといえば不満 4. 不満
理由 ()

(2) 振り返ってみて、あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。

1. 熱心 2. どちらかといえば熱心 3. どちらかといえば不熱心 4. 不熱心

(裏面に続きます。)

(3) あなたが受講したポケット・ゼミの学生数についてどう思いますか。

1. 多すぎる 2. どちらかといえば多い 3. ちょうどよい
4. どちらかといえば少ない 5. 少なすぎる

(4) 授業内容の難易度はどうでしたか。

1. 難しすぎる 2. どちらかといえば難しい 3. ちょうどよい
4. どちらかといえば易しい 5. 易しすぎる

(5) 担当教員の対応はどうでしたか。

1. 非常に熱意が感じられた 2. かなり熱意が感じられた
3. あまり熱意が感じられなかった 5. ほとんど熱意が感じられなかった

Q 8 少人数制の授業形式についてうかがいます。

(1) **ポケット・ゼミを受講する前**、少人数形式の授業によって、講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることをあなたは期待していましたか。

1. とても期待していた 2. 少しは期待していた
3. あまり期待していなかった 4. まったく期待していなかった

(2) では、**実際にポケット・ゼミを受講してみて**、少人数形式の授業でしか得られないものと実感できましたか。

1. とても実感できた 2. 少しは実感できた
3. あまり実感できなかった 4. まったく実感できなかった

(3) **前問(2)で1または2を選んだ方**にうかがいます。(3, 4を選んだ人は直接Q 9へ)

少人数形式の授業のどのような点がよかったですか。(複数回答可)

1. 教員の人間性に触れることができた
2. 個別的に親切な指導が受けられた
3. 発言の機会を多く得られた
4. 同じ授業を受けた学生と親しくなりやすかった
5. 作業や現地研修などを通して得られるものが大きかった
6. その他 ()

Q 9 ポケット・ゼミの実施方法についてのご意見をうかがいます。

(1) ポケット・ゼミは、新生に対して、学問へのモチベーションを与えるという趣旨から、前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思いますか。**2または3を選択された場合**、その理由も書いてください。

1. 現行どおり、前期のみがよい 2. 後期のみの方がよい
3. 前期と後期の中から選択できる方がよい 4. 特に希望はない
5. その他 ()
理由 ()

(2) 今後、ポケット・ゼミの内容をさらに充実させるためには、どのようにすればよいと思いま
すか。

(複数回答可)

1. 教室・設備等をもっと整備する
2. ビデオなどの視聴覚教材を充実させる
3. 授業内容をもっと親しみの持てるものにする
4. もっと多様な分野から受講科目を選択できるようにする
5. その他

()

Q10 大学生生活に関するA～Fの各項目について、あなたはそれぞれどの程度重視していますか。

	重視 している	やや重視 している	あまり重視 していない	重視 していない
A. 専門の学問分野の勉強	1	2	3	4
B. 幅広い知識・教養を身につけること	1	2	3	4
C. 部・サークルの活動	1	2	3	4
D. 趣味に打ち込むこと	1	2	3	4
E. 友人とのつきあい	1	2	3	4
F. 各種技能・資格の取得	1	2	3	4

その中であなたが最も重視していることは何ですか。上のA～Fの記号で1つだけお答えください。

()

Q11 ポケット・ゼミについて、何かご意見やご希望があれば自由に記入してください。

ご協力ありがとうございました。

新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）に関するアンケート

ポケゼミを受講しなかった学生対象

全学共通教育システム委員会
教養教育専門委員会少人数教育部会

このアンケートは、新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）を今後、より充実したものにしていくなため、受講学生のほかに受講されなかった学生のみなさんにも率直なご意見をうかがうものです。氏名や学籍番号を記入する必要はありませんし、回答は統計的に処理されますので、プライバシーは完全に保護されます。京都大学の教育改善のため、ご協力よろしくお願いいたします。

なお、アンケート用紙は、**10月31日（金）**までに**全学共通科目学生窓口前の廊下に設置されている専用ポスト（レポートボックス）**に入れてください。

記入上の注意

1. 特に指定のない限りは、**最も当てはまると思う項目1つだけ**を選び、番号に○をつけてください。
2. 設問の終わりに（**複数回答可**）と書いてある場合は、いくつでも○をつけていただいて結構です。
3. 答えたくない設問があれば、無理にお答えいただかなくても構いません。
4. 2ページが一番上の「整理番号」欄には何も記入しないでください。

Q 6 当選した科目を受講しなかった理由を教えてください。(複数回答可)

1. 第1希望の科目ではなかったから
2. ポケット・ゼミ以外に受講したい科目があったから
3. 履修許可者が少なかったから
4. 履修登録を忘れたから
5. その他 ()

Q 7 ポケット・ゼミの受講を希望しなかった理由を教えてください。(複数回答可)

1. 履修案内に書かれている内容を見て関心が持てなかったから
2. 履修に都合がよい曜日・時限に受講したい科目がなかったから
3. 受講したい科目があったが、語学や専門基礎科目等の授業が入っていたから
4. 専門科目と全学共通科目の授業ですでに過密なスケジュールだったから
5. 希望したとしても抽選にあたりそうもないと思ったから
6. ポケット・ゼミに特別な意義は感じなかったから
7. その他 ()

Q 8 ポケット・ゼミについて、何かご意見やご希望があれば自由に記入してください。

ご協力ありがとうございました。

新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）に関するアンケート

担当教員用

全学共通教育システム委員会
教養教育専門委員会少人数教育部会

このアンケートは、新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）および京都大学の教育を今後、より充実したものにしていくため、ポケット・ゼミを担当された先生方のご意見をうかがうものです。ご回答は統計的に処理されますし、調査結果を教育改善以外の目的に使用することはありませんので、ぜひ先生の率直なご意見をお聞かせください。調査の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

なお、アンケート用紙は、**7月31日（木）**までに同封の封筒にて共通教育推進課企画・調整グループにご返送願います。（集中講義の場合は、上記締切にかかわらず、授業終了後にご返送願います。最終締切は10月17日（金）とさせていただきます。）

ご記入上の注意

1. 特に指定のない限りは、**最も当てはまる項目を1つだけ**を選び、番号に○をおつけください。
2. 設問の終わりに**（複数回答可）**と書いてある場合は、いくつでも○をつけていただいて結構です。
3. お答えになりたくない設問がありましたら、無理にお答えいただかなくても結構です。
4. 2ページ一番上の「整理番号」欄には何も記入されないようお願いいたします。

Q7 今年度のポケット・ゼミを担当されてのご感想をうかがいます。

(1) 全体として、担当されたポケット・ゼミの教育成果に満足されていますか。その理由もお書きください。

1. 満足 2. どちらかといえば満足 3. どちらかといえば不満 4. 不満
理由 ()

(2) 学生の反応は全体としていかがでしたか。

1. 良かった 2. どちらかといえば良かった
3. どちらかといえば悪かった 4. 悪かった

(3) 先生が担当されたポケット・ゼミの学生数についてはどう思われますか。

1. 多すぎる 2. どちらかといえば多い 3. ちょうどよい
4. どちらかといえば少ない 5. 少なすぎる

Q8 少人数制の授業形式についてうかがいます。

(1) 実際にポケット・ゼミを担当されてみて、学生にとって少人数の授業のどのような点がよかったと思われますか。(複数回答可)

1. 対面的できめ細かな指導ができる
2. 学生一人一人の個性や能力に応じて、個別的な指導ができる
3. 発表や議論などを通じて、学生が発言できる機会が多い
4. 同じ授業を受けている学生同士が親しくなりやすい
5. 作業や現地研修などを通して学生が得られるものが大きい
6. その他 ()

(2) ポケット・ゼミの中で、指導上特に留意されたことがありましたら、ご自由にお書きください。

Q9 これまでポケット・ゼミは、新入生に対して、学問へのモチベーションを与えるという趣旨から、前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思われますか。2または3を選択された場合、その理由もお書きください。

1. 現行どおり、前期のみがよい 2. 後期のみの方がよい
3. 前期と後期の中から選択できる方がよい 4. 特に希望はない
5. その他 ()
理由 ()

Q10 今後、ポケット・ゼミの内容をさらに充実させるためには、どのようにすればよいと思われますか。(複数回答可)

1. 教室・設備等をもっと整備する
2. ビデオなどの視聴覚教材を充実させる
3. もっと学生が授業に親しみを持てるよう、授業内容を工夫する
4. もっと多様な分野から学生が受講科目を選択できるようにする
5. その他 ()

Q11 ポケット・ゼミについて、これまでの受講者へのアンケート調査結果からは学生の満足度が高いとされていますが、更に充実させるための方策など、ご意見やご希望がありましたら、ご自由にお書きください。

※ お差し支えなければご記入ください。

1. 今年度に担当されたポケット・ゼミの科目名
2. 所属部局・お名前

ご協力ありがとうございました。

少人数教育部会名簿

平成 20 年 4 月 1 日現在

所属部局	職名	氏名	備考
高等教育研究開発推進センター	准教授	田中 真介	
文学研究科	准教授	出口 康夫	
教育学研究科	教授	楠見 孝	
公共政策大学院	教授	秋月 謙吾	法学部委員
理学研究科	教授	戸部 博	
農学研究科	教授	野田 公夫	部会長
情報学研究科	教授	湯淺 太一	工学部委員
フィールド科学教育研究センター	准教授	益田 玲爾	

(以上 8 名)



新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）の現状と課題
平成 20 年度アンケート調査報告

平成 21 年 3 月発行

編 集 京都大学高等教育研究開発推進機構

全学共通教育システム委員会 教養教育専門委員会少人数教育部会

発 行 京都大学教育推進部共通教育推進課

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 Tel 075-753-6690
